

金沢城編年史料 近世四

石川県金沢城調査研究所

令和七年三月 金沢城史料叢書48

金沢城編年史料 近世四

石川県金沢城調査研究所

凡例

一、本書は、国史跡「金沢城跡」を対象に、関連する文献史料等を編年集成した『金沢城編年史料』の第四巻（近世四）である。史料の収録範囲は寛政元年（一七八九）から文化四年（一八〇七）である。なお、標題に「近世」の語を掲げたのは、本叢書が明治以降の史料も対象（掲載・刊行予定）とするためである。

二、本書に掲げた項目は、既刊の『金沢城総合年表 後編』の内容をベースにした。配列は年月日順である（すべて和暦。年次を推定した場合は月日の上に「*」を付す）。各項目に対応する史料の配列は、信頼の置ける史料、または見出し文と関係の深い史料の順に掲げた。なお、『金沢城総合年表 後編』刊行後の調査等により、同書に掲げた典拠史料とは異なる史料を掲げている場合がある。

三、典拠や校合に刊本を利用した場合は、刊本名を『』で示した。

四、字体は原則として常用漢字を用いた。史料原本に拠った場合、けつじ 欠字・へいしゅつ 平出はできる限り残した。また、文書史料については、年月日・発給者（差出人）・受給者（宛所）の位置は、原本の体裁を尊重する範囲で統一した。

五、史料には適宜校訂者によって読点（・）、並列点（・）、注記（括弧（ ））を付した。

六、朱書・注記等については「」で括り、（朱書）（注記）等と注記した。

七、欠損・判読不明で、字数が推定可能な場合は□□□、字数が推定不可能な場合は□□□で示した。また、文字が抹消されている場合はを左傍に付し、訂正された文字を右傍に記した。

八、史料の翻刻にあたつては、身分差別に関わる用語・表現も基本的にそのまま掲載した。これは差別の歴史を認識し、それを克服することを目的とするためで、これを容認するものではない。

九、本書の編集・執筆には、主に大西泰正・川名俊があたつた。また、校正などに石野友康・池田仁子の協力を得た。

金沢城調査研究編年史料専門委員会

協力いただいた主な機関等（敬称略・順不同）

木越隆三

石川県教育委員会事務局文化財課近世史料編さん室長

金沢市立玉川図書館

鷺澤淑子

石川県教育委員会事務局文化財課近世史料編さん室主幹（令和五年度）

前田土佐守家資料館

小西昌志

金沢市立玉川図書館近世史料館係主査

国立公文書館

竹松幸香

前田土佐守家資料館副館長

寛政元年（天明九年。一七八九）

三月一二日

前田治脩、帰国を許可され、四月一五日、江戸城に登る。次いで同月一六日、江戸を発し、同月二九日、金沢城に到着する。

1 「江戸幕府日記」寛政元年三月一二日条 国立公文書館内閣文庫蔵

上使松平伊豆守 （信明）

（銀百枚）
（巻物三十）

松平加賀守 （前田治脩）

右、御暇被 仰出候付被遣之、

2 「諸事被仰出日記」寛政元年三月一九日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

文庫蔵

一、当十三日、御暇上使老中松平伊豆守殿を以、（信明）如御例

被進、御拝領物前々之通、（前田治脩）中将様御不例ニ付、御

名代建部内匠頭殿ヲ以、万端如前規相済、明後十五

日、御札御登城并御家来兩人御目見之儀も如例、小

札御持参之由中飛脚到来、（カ）

但、十五日ハ御不例ニ付、御登城御断、

3 「江戸幕府日記」寛政元年四月一五日条

国立公文書館内閣文庫蔵

御黒書院

御暇

（御鷹）
御馬被下

御白書院

（中略）

松平加賀守家来

巻物五

前田土佐守 （直方）

同

津田修理 （政本）

4 「諸事被仰出日記」寛政元年四月二二日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

文庫蔵

一、当十五日、御暇之為御札御登城、於御座之間 御札

被仰上、御懇之上意、御自手御熨斗御頂戴、如例御

馬・御鷹御拝領、十六日昼、御発駕被遊候旨、中

飛脚夜前到来、今日出仕以上之人々江戸御用番々御廻

状ニ而御しらせ之事、

5 「御触并御返書留」三二

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

前月十三日、上使松平伊豆守殿を以、御国許江之御

暇被 仰出、白銀・御巻物御拝領、従

〔（広大院）〕御台様茂夏目撰津守殿を以、御卷物御拝領、当十五

日、右為御礼 御登 城被成候処、於 御黒書院御

目見、御懇之上意、殊御鷹・御馬御拝領、且又前

田土佐守・津田修理〔（直方）〕〔（政本）〕

御前江被 召出、其上 御卷物頂戴之、重畳難有御仕

合ニ候旨、拙者共江以 御書被 仰下候事、

四月

6 「御触并御返書留」三一

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

猶以、難被罷出人々者、其段名之下ニ可被書記候、

以上、

明後廿九日、津幡（中略）

御着城之筈ニ候条、御着之御様子被承合登 城、可

被相伺御機嫌候、若御着七時以後ニ候者、翌晦日四時

分九時迄之内可被罷出候、病氣等之面々者、御用番宅

迄以使者可被申越候、以上、

四月廿七日

本多安房守〔（政行）〕

御名殿 奉得其意候、

御相組中殿

7 「諸事被仰出日記」寛政元年四月晦日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、夜前津幡御泊、御供揃五半時、御待請揃刻限、一統

六半時、九半時過、御機嫌克御帰城、江戸表之御礼

使人持多賀帶刀、七つ前足足、〔（安定）〕

8 「政隣記（耳目甄録）」一四

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
〔（信明）〕政隣記 耳目甄録 拾四

〔（三月）〕

十三日 上使御老中松平伊豆守殿を以、御国許江之御

暇被蒙 仰、如御例卷物三十・白銀百枚御拝領、從

御台様も御使御広式御用人夏目撰津守殿を以、卷物

等御拝受被為遊候、然処、

御前御風氣ニ而御鼻液多被為出ニ付、御名代建部

内匠頭殿へ御頼、上意御拝聴等被為成候、尤如御

例 上使へ二汁六菜御料理、御相伴 御名代内匠

頭殿ニ而御饗応有之、御使撰津守殿へ者御重菓子等

出、御相伴御取持之酒依清左衛門殿、其外都而御作

法前々之通ニ付留略、

〔（中略）〕

十五日

〔（四月）〕頃日之依御奉書、今朝六時之御供揃ニ而同時過、

御登 城之処、於御黒書院御暇之御礼被 仰上、御

懇之被為蒙 上意、御鷹ニ・御馬ニ御拝領并前田

土佐守・津田修理〔（直方）〕〔（政本）〕 御目見、卷物三卷宛拝領被 仰

付、

右二付為 御礼、御老中方・若御年寄衆御廻勤并土佐守・修理与目分々々御礼廻勤之事、

(中略)

(四月)

十六日 九時御供揃二付、同刻頃 御殿へ相揃、夫々御

小将中揃之義も御横目所へ相届之候処、七時前、三

品押出候様被 仰出^(注記)一但、坂本駅迄ハ二品ニ候也、七

半時頃、御発駕、御下邸御立寄、夜九時前頃、浦

輪駅御着、自分本役騎馬所巢鴨町端迄相勤、夫々御

先へ罷越、定騎馬久能吉大夫^(致平)御近習頭本役御使番^(注記)・

御横目由比陸大夫^(勝文)前田甚八郎^(直房)、戸田川場江出候二付、

浦輪迄通^(注記)御供、且大組頭久世平助^(宜方)も川場へ罷出、昼分定

騎馬伊藤甚左衛門^(勝文)、御昼代之御中休前記ニ有之、

(中略)

廿九日 快天朗夜、四時頃、 御発駕、森下ニ而御猶予、

八時前、御着城、先騎馬御近習御使番勝尾吉左衛門^(信処)

門杯ハ本役騎馬、御大小将横目由比陸大夫、前々之

通河北御門外分 御駕脇ニ歩御供仕、夫分 御殿江

上り御席へ出、御用番安房守殿へ恐悦申述、且御歩

寛政元年(天明九年)

方并御細工者支配夫々へ引渡、退出帰宅候事、

三月二一日

加賀藩、金沢城二ノ丸御居間の補理に着手する。次いで四月六日、檜垣の間・柳の間の普請・補理に着手する。

9 「高島厚定職事日記」寛政元年三月二一日条

金沢市立玉川図書

一、二ノ御丸御居間御補理、今日ヨリ取懸也、

10 「高島厚定職事日記」寛政元年三月二八日条

金沢市立玉川図書

一、御居間御普請、来月朔日・二日御祭礼故相止趣、御

次江相達也、御近^(書)頭中此前不止段申聞故、御作事

場相止候旨、不指急而も不^(書)場ハ相止段相達申、

内橋御亭ハ当时指急故不指止候様ニ而申聞ニ而、其

段松波源右衛門江申渡也、

11 「高島厚定職事日記」寛政元年四月四日条

金沢市立玉川図書

一、当六日ヨリ檜垣ノ御間御普請取懸段、御達申也、

12 「高島厚定職事日記」寛政元年四月六日条

文庫蔵

金沢市立玉川
図書館加越能

一、柳ノ御間補理、今日ヨリ取掛ノ事、

四月六日

加賀藩、金沢城鼠多門橋の往来を禁止する。

13 「高島厚定職事日記」寛政元年三月一六日条

越能文庫蔵

金沢市立玉川
図書館加

一、鼠多門橋、当十九日迄取懸候旨、右ニ付仮橋掛候段

御達申也、

14 「高島厚定職事日記」寛政元年三月二四日条

越能文庫蔵

金沢市立玉川
図書館加

一、鼠多門仮橋丈夫ニ出来、右出来候ハ、御城代并両御

広式頭中へ届候様、御城代被仰渡也、

15 「高島厚定職事日記」寛政元年四月三日条

文庫蔵

金沢市立玉川
図書館加越能

一、鼠多門仮橋出来、当六日迄往来止候儀、御城代・金

谷御用部や両御広式頭中へ相届也、

四月七日

金沢城二ノ丸表式台の屋根、修復完了する。

同月二五日、加賀藩、同月二八日からの同所
の使用許可を通達する。

16 「高島厚定職事日記」寛政元年四月八日条

文庫蔵

金沢市立玉川
図書館加越能

一、二ノ御丸御式台屋根、昨日切出来也、

17 「御触并御返書留」三一

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

付札御横目へ

表 御式台屋称御修覆出来ニ付、当廿八日迄往来不指

支候条、可有其心得候事、

四月廿五日

四月八日

加賀藩、金沢城二ノ丸膳所の修理に着手する。

18 「高島厚定職事日記」寛政元年四月八日条

文庫蔵

金沢市立玉川
図書館加越能一、二ノ御丸御膳所修理、今日迄取也、
(掛脱力)

六月七日

加賀藩、江戸藩邸（本郷邸）に造営した前田斉敬居所の呼称を「新御居宅」とする。

19 「三守御譜」三 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

（寛政元年）六月七日 今度江戸於上邸御普請被仰付、教千代君

御居宅御上棟御祝有之、新御居宅ト唱可申旨被仰出アリ、

閏六月一四日

前田治脩、金沢城五十間長屋の「鬼」を鉛葺にするよう命じる。

20 「高島厚生定職事日記」寛政元年閏六月一四日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫

一、五拾間御長屋鬼^{（カ）}ニツヒ鉛葺被仰付段、御城代ハ被仰渡也、

閏六月二八日

この日以前、金谷御殿広式切手門が大破する。

21 「高島厚生定職事日記」寛政元年閏六月二八日条 金沢市立玉川

寛政元年（天明九年）

図書館加越能文庫蔵

一、金谷御広式切手門及大破段、番人書付遠田^{（白瀬）}三郎太夫奥書切手来也、

閏六月二八日

金沢城五十間長屋・土蔵等の普請が完了する。

22 「高島厚生定職事日記」寛政元年閏六月二八日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、五拾間御長屋今日切出来ノ段、御城代江御達申、足代取払之儀ハ来月二日迄ト御達申也、

右出来并諸方御土蔵等出来、御城代御見分明日九時揃被仰渡也、

一、五拾間御長屋今日出来ニ候得共、足代取払迄御医師中御作事エ見廻之義御達申也、頭中迄紙面出也、

（中略）

一、五拾間御長屋并諸方御土蔵等出来、見分今日相仕廻也、

一、右三付、一統被下物有之儀付、御徒横目被下方願紙面指出、左之通今日相達也、

23「高皇厚定職事日記」寛政元年閏六月二十九日条 金沢市立玉川

圖書館加越能文庫藏

御城方御造営之節、右御用懸り役人前々拝領物被仰付候処、御徒横目被下物無御座候ニ付、別紙之通御徒横目今申聞候間、以前之様子相糺候所、以前ハ被下物被仰付候様御歩横目中粗承罷在候得共、当時

一、今日（本多政行）安房守殿五拾間御長屋・諸方御土藏等□□
過今御見分也、如例夫々役人罷出ル也、

以前相勤候人々茂無御座候ニ付、何れノ御普請之節被下物有之候与申儀相知不申候、乍然右御用懸り一統被下方御座候所、御歩横目并御横目足輕迄被下方無御座候、右人々ニ限り被下方無御座候而者いか、敷御座候間、今般之儀者御徒横目并御横目足輕共被下方御座候様、格別御僉義御座候様仕度奉存候、以

上、

（間力）
□六月

高皇五郎（厚定）兵衛印
小寺武兵衛（惟孝）同
吉田八郎（兼忠）大夫同

今井甚兵衛（矩明）様
（誠教）
野村与三兵衛様

（中略）

一、今般五拾間御長屋出来、下物ニ付、石川御門之節被下方等之趣、主付頭中江相達也、

一、五拾間御長屋出来、被下物之義ニ付、人々掛り日数主付頭衆（カ）江書出左之通、

□□
谷猪左衛門（以直）

御普請初今申五月
脇田瀬兵衛（尚尺）

廿九日迄

□□
不破（永頼）兵衛（規秀）

御普請初ヨリ
岩田平兵衛

申□月十五日迄
寺西五左衛門（正一）

御普請初ヨリ

申九月十五日迄
松野源左衛門（恭近）

終迄

申八月今西
石黒善九郎（忠久）

六月迄

申八月（守富）迄

終迄

御普請初（正吉）迄

酉五月迄

御普請初（盛昭）迄

□月廿六日迄

同断

申二月十六日

御免

右、昨日書附頭中江相達也、

九月一日

金沢城二ノ丸広式の屋根、修復完了する。

24「高島厚定職事日記」寛政元年九月二日条

館加越能文庫蔵

金沢市立
玉川図書

一、二ノ御丸御広式屋根、昨日切相済也、

九月一二日

加賀藩、金沢城二ノ丸楽屋多門の屋根の修復

に着手する。同月二三日に修復完了する。

25「高島厚定職事日記」寛政元年九月二三日条

館加越能文庫蔵

金沢市立
玉川図書

一、御楽屋多門屋根、今日ヨリ取掛也、

26「高島厚定職事日記」寛政元年九月二四日条

館加越能文庫蔵

金沢市立
玉川図書

一、御楽屋多門屋桝、昨日切出来也、

九月

加賀藩、金沢城二ノ丸菱櫓について調査する。

27「高島厚定職事日記」寛政元年九月八日条

文庫蔵

金沢市立玉川
図書館加越能

一、菱御櫓かたかり有之由ニ被聞召候、御作事奉行・内

作事奉行罷出、御大工召連相札可申上旨、御城代ヨ

リ被仰渡、左之通紙面御達申也、

菱御櫓建方ひつミ有之様相見候之様被聞召候段被

仰出旨被仰渡候ニ付、先達而御大工手前遂僉義候所、

御建方かたかり申儀無御座旨申聞、其段御達申上候

処、得与曲尺等相札可申上旨、重而被仰出旨被仰渡、

奉得其意候、依而私共内作事奉行罷出、御大工等召

連大曲尺を以、土台等ヨリ相しらへ、下ヶ振等為下、

得与相改候所、少もひつミ・かたかり候儀無御座候、

先達而も申上候通見請、所ニヨリかたかり有之様ニ

相見工候哉与奉存候、

右御達申上候、以上、

九月八日

高島五郎兵衛^(厚定)

吉田八郎太夫^(兼忠)

小寺武兵衛^(惟孝) 煩

本多安房守様^(政行)

村井又兵衛様^(長壽)

28 「高島厚定職事日記」寛政元年九月一二日条

館加越能文庫蔵

金沢市立
玉川図書

一、御城代方々被仰渡ハ菱槽厂木坂ヨリ御覽被遊時ハか

たかり、軒口ニ見工候段被 仰出候間、其訳紙面出

候様ニ被仰渡也、

【解説】この頃、二ノ丸菱槽に傾き・ひずみが觀察されたい

が、右の通り、御大工の調査等によつて菱槽には一切傾き・ひ

ずみのないことが確認された。その後、菱槽は文化の大火に

よつて焼失したため、詳細は不明である。

九月

加賀藩、京都において素焼瓦を焼かせる。

29 「高島厚定職事日記」寛政元年九月一〇日条

館加越能文庫蔵

金沢市立
玉川図書

一、京都素焼瓦見本、丸平ヒ来り御勝手方江御達申也、

紙面今日ノ所末ニ記置也、

(中略)

一、京都詰人工素焼瓦見本請取段及返書、運賃之儀早速

申越有之様ニ申遣也、

(中略)

一、初二記置京地瓦之紙面、左之通、

御作事方御用素焼瓦、於京都出来、直段之儀、先達

而申越候ニ付、冬中しミ堪之義如何可有之哉、是迄

雪国ニ相廻候儀在之候哉、瓦師手前遂僉義可申越旨、

重而申遣候所、則瓦師手前僉義有之候所、先年越前

江相廻候義も有之候得共、堪之義ハ如何有之候哉相

知不申、尤素焼ニ而も磨与申方土目茂細ニ与随分堪

宜旨、瓦師申聞候段、高臯直右衛門等（定靜）申越候ニ付、

左候者見本瓦并直段等之義、得与遂僉義可申越旨申

遣候所、見本瓦（指）越逐見分候所、随分宜、御当地素

焼瓦位ニも可有御座候哉与被存候、直段之儀ハ丸平

氏百枚ニ付、八拾目宛、運賃等之儀ハ追而可申越旨、

梅才記（合）申越候、猶更運賃等申来次第、宮腰（合）取寄

候駄賃物様銀高御達可申上候、以上、

酉九月十日

高臯五郎兵衛（厚定）

矢部友右衛門（成尺）

吉田八郎大夫（兼忠）

本多安房守様（政行）

村井又兵衛様（長壽）

【解説】素焼瓦の利用先は判然としないが、金沢城代二名に右の

報告が行われている点から推せば、金沢城内での利用も想定で

きる。

一二月二三日

加賀藩、金沢城二ノ丸御殿柳の間廊下の胎内

くぐりの普請に着手する。

30「高臯厚定職事日記」寛政元年二月二三日条

金沢市立
玉川図書
館加越能文庫蔵

一、柳ノ御間御廊下胎内ク、リ、今日（合）取懸也、

寛政二年（一七九〇）

三月七日

加賀藩士伊藤喜兵衛（上御台所御横目同心）、金

沢城二ノ丸台所にて自害する。

31「政隣記（耳目甄録）」一五

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
「政隣記 耳目甄録 拾五・拾六」

（三月）朝五半時過、上御台所御横目同心伊藤喜兵衛与申

者、同所於詰所自害相果候ニ付、当番御大小将横目

小原惣左衛門、御台所奉行土師清吉・堀部五左衛門（正慶）

遂内見分言上、重而夕七時過、当番御大小将横目今

村三郎大夫見分（重景）「是ハ被（注記）仰出之趣有之、再見与云々」

尤清吉等も見分、相済候上、死骸汚紙ニ包之、板戸

ニ載セ、御台所壁を抜、組頭溜之前空地江出之、夫

ノ縁取廊下通新口へ持出、橋爪御門ハ右之方小口（合）、

横山山城〔除從〕

七月廿六日

御相組中殿 奉得其意候、

33「諸事被仰出日記」寛政二年八月朔日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、今日六時過之御供揃ニ而、五時過、御機嫌克 御

登駕被遊候、

34「江戸幕府日記」寛政二年九月朔日条

国立公文書館内閣文庫蔵

御黒書院

参勤

〔銀拾五枚
卷物二十

〔前田治脩〕
松平加賀守

御白書院

〔中略〕

松平加賀守家来

〔經廿筋
銀馬代

〔致均〕
本多頼母

〔致本〕
津田修理

同

35「御触并御返書留」三三一

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

〔八月〕
前月十三日、御機嫌能 御着府、同廿七日、以上

〔信明〕
使松平伊豆守殿被為蒙 上意、当朔日、

御登 城、於御黒書院御参勤之御礼被 仰上、殊

御懇之上意、本多頼母・津田修理

〔注記〕
石川御門ニ而者左之方小口〆持出之「附、右小口・左

小口之義、平日往来無之小口也」、右一件取哢者都而御

台所奉行・ 御城代懸合也、御横目ハ見分迄ニ而外

ニ取哢之趣者無之、〔但、自害所辺板鋪取替、塩水ニ而掃

除等夜五時過相濟、附、元禄六年上御台所小者溜ニ而自害、

右以来於ニ之御丸之變死無之由云々」

八月一日

前田治脩、金沢を發ち、同月一三日、江戸に

到着する。次いで九月一日、江戸城に登り、

参勤の挨拶をする。

32「御触并御返書留」三三一

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

猶以、難被罷出人々ハ、其段名之下可被書記候、

以上、

来月朔日、御発駕之筈ニ候条、当廿九日四時〆九

時迄之内被登 城、可被相伺御機嫌候、病氣等之

面々者、御用番宅迄以使者可被申越候事、

一、来月朔日例月之出仕者相止候事、

右之趣、可被得其意候、以上、

御目見被 仰付、重疊難有御仕合被 思召候段、御書を以被 仰下候事、

36「諸事被仰出日記」寛政二年九月一三日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、前月廿七日、御参府ニ付、為上使老中松平伊豆守殿を以、上意有之、当朔日、為御礼御登城、於御座之間御礼被 仰上、御家来奥村河内守・本多頼母 (致均) 御目見被 仰付候旨申来、

37「政隣記〔耳目甄録〕」一五 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
〔八月〕 御先立揃、曉七時過ニ而六時過御供揃、五時過、

大御式台々御馬ニ而御発駕、御供御家老本多頼母殿、御道中奉行・御行列才許相兼、御小将頭堀平馬御歩頭御用人遠藤両左衛門、御大小将御番頭神保儀右衛門、同御横目今村三郎大夫・前田權作、御筒押物頭並聞番長瀬五郎右衛門、御弓押御持弓頭和田權五郎、御長柄鎗押御大小将阿部波江、其外御近習御用部屋横浜善左衛門、御近習頭生駒伝七郎等、(前田齊敬) 教千代様御式台階下迄御送、(前田利孝) 勇之助様御使者清水八郎右衛門、実檢之御間入口少此方ニ扣罷在、披露

御奏者番御使者之趣唱之、御年寄衆等都而前々之通御送被申上候事、

但、御発駕後、御見立ニ罷出候頭分以上、御席へ罷出、御用番江恐悦申述退出、

附記、五日朝、境之御飛脚来着、御道筋左右御廻り、御鉄砲ニ而鷲一・山雉一・鶺鴒一・鴉三御打留、且十三日、御日廻り之通御着府之段、同日立御飛脚、廿一日来着告来、

(中略)
十五日、一昨日安房守殿之役等連名之依御廻文、今朝

五時人持・頭分登城、御帳ニ付、例月出仕之面々、柳之御間列居、御年寄衆等被調、其節今度就御参勤、前月廿七日、上使松平伊豆守殿を以、被蒙上意、同廿九日、御老中方御連名之依御奉書、当月朔日、御登城、於御黒書院御参府之御礼被 仰上、御懇之被為蒙上意、本多頼母・津田修理御目見被 仰付之旨之御弘、御用番安房守殿御演述、

八月二二日

金沢に地震あり。

38「政隣記（耳目甄録）」一五

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 拾五・拾六』

（八月）十二日 五時、御供揃二而宝円寺へ

（前田齊敬）
教千代様御参詣、今曉五半時過、余程之強地震、

八月一六日

前田齊敬（教千代。治脩養嗣子。重教の子）、金沢を發ち、九月六日、江戸に到着する。

39「御触并御返書留」三二 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

当十六日、

（前田齊敬）
教千代様御発駕之筈二候条、御発駕之御様子被承合、

為御祝詞御用番宅迄可被罷出候、病氣等之面々者、使者を以可被申越候事、

八月十二日

（連起）
長大隅守

御名殿 奉得其意候、

御相組殿

但、河野弥次郎殿無之、

40「諸事被仰出日記」寛政二年八月二六日条

（通歴）
金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、今日四半時之御供揃二而、八半前、御機嫌克從金

谷御□教千代様御発駕被遊、為恐悅同日、頭分以上

布上下着用、御用番宅江参出、

41「諸事被仰出日記」寛政二年九月一四日条

（前田齊敬）
金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、当六日、教千代様御機嫌克江戸御着之旨申来、

42「政隣記（耳目甄録）」一五

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 拾五・拾六』

（八月）十六日 快晴、教千代様、四半時之御供揃二而八時頃、

御発駕、御供奥村河内守殿、御近習御用人持組織田

主税・前田左衛門等、御附之諸頭等、御大小将御旅

館取次羽田伝左衛門等、正月晦日記之通、会所奉行

加人堀八郎左衛門、割場奉行、御先三品ハ御筒押松

田治右衛門「芝御広式附物頭並」、御弓押河野弥次郎

「御身附物頭並」、御長柄押ハ野村順九郎「御大小将」、

（青操院）
御袋之方御一宿下り二而江戸表江被罷越、今夜森下

泊、教千代様今夜津幡 御泊、但、山之下・不親

知・駒返り等高波二而御通行難被為成、境ニ五ヶ

日 御逗留之处、一日御追込ニ而、九月六日 御着

府之段、同月十四日、江戸へ御飛脚を以申来、

十一月一日

前田斉敬(教千代)、勝丸、次いで犬千代丸と改め、同月二日、又左衛門利博を称する。

43「諸事被仰出日記」寛政二年十一月条 金沢市立玉川図書館
加越能文庫蔵

一、当朔日、(前田斉敬)教千代様御名 勝丸様ニ御改、同日犬千代様ニ御名被進旨申来、

一、当三日、犬千代様御名 又左衛門様ニ御改之儀、
於 御前被進、御実名利博公、トシヒロ

一、同日、御老中方江前田信濃守殿御同道ニ而御廻勤被遊候旨申来、(前田治修)中將様氣滯ニ付、信濃守殿御頼之旨、(長禮)

44「御触并御返書留」三二一 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
(前田斉敬)教千代様御名、当月朔日、

勝丸様与御改、重而 御代々之御名ニ付、同日、犬千代丸様与御改、翌朝、

又左衛門様ニ御改被遊候、此段何茂江申聞候様被仰出候、且又 御実名

利轉様与奉称旨、(奥村尚寛)河内守等々申来候、

右之趣、同役中伝達、組支配之人々江茂相達候様可被

申談候事、

但、今日登 城無之面々江者、向寄々相達可申候、

45「御触并御返書留」三二一 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

定番頭江

(前田斉敬)又左衛門様 御名乗字、トシヒロ利轉様与奉称候、御家中之人々、実名

御名乗字同字有之候ハ、相改可申候、文字ハ違候而も唱同事ニ候ハ、唱替可申候事、

戊十一月

46「政隣記(耳目甄録)」一五 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
「政隣記」耳目甄録 拾五・拾六
(前田)今月朔日 於江戸

(前田斉敬)教千代様御名、御吉例ニ付 勝丸様与御改、重而御代々之御名ニ付、犬千代丸様与被称、且又翌二日、

又左衛門様与被称候段、同日御席へ頭分以上四、五人宛御呼立、右之趣可申聞旨被 仰出候段、本多

(政均)頼母殿被申渡、各拝聴退、
但、何も常服ニ而罷出、御帳并現心悦勤も無之候事、

十一月二五日

前田治脩、養嗣子齊敬（利博）を同道して江戸城に登り、徳川家斉と対面する。

47「江戸幕府日記」寛政二年一月一五日条 国立公文書館
内閣文庫蔵

御白書院

初而 御目見

加賀守養子

（前田齊敬）
松平又左衛門

養子 御目見之御礼

（前田治脩）
松平加賀守

卷物十

（御太刀一腰
銀三拾枚
卷物十
御馬一疋）

48「諸事被仰出日記」寛政二年一月二八日条 金沢市立
玉川図書

館加越能文庫蔵

一、今日、諸頭登城、御弘左之趣、

（前田齊敬）
又左衛門様、御目見御願之儀、去七日、御用番

（信明）
松平伊豆守殿江被仰達置候所、同十四日、御老中

方御連名之御奉書到来、翌十五日、御同道御登城

可被成旨申来候ニ付、則御登城被成候所、於御白

書院御目見被仰上、

（前田治脩）
中将様ニ茂御礼被 仰上、重而 御両殿様御一所

被為召、御着座被為 仰付、御懇之上意被為

蒙、重疊忝御仕合被為 思召候旨、拙者共迄以御書被 仰下候事、

教千代様御名、当月朔日、

勝丸様与御改、重而 御代々之御名ニ付、

大千代様与御改被遊、翌朝、

又左衛門様与御改被遊候、此段何茂江申聞候様

被 仰下候、且又 御実名

利博様与奉称旨、（奥村尚寛）河内守等申来候、

右之趣、同役中伝達、組支配之人々江も相達候様

可被申談候、

但、今日登城無之人々者、向寄可被申談候事、

49「御触并御返書留」三三一 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

（前田齊敬）
又左衛門様 御目見 御願被遊候趣、去七日、御用

（信明）
番松平伊豆守殿江被 仰達置候处、同十四日、御老中

方御連名之御奉書到来、翌十五日、御同道 御登

城可被成旨申来候ニ付、則 御登 城被成候处、於御

白書院 御目見被 仰上、

（前田治脩）
中将様江も御礼被 仰上、重而

御両殿様御一所被為 召、御着座被為 仰付、御

懇之被為蒙

上意、重畳忝御仕合被 思召候旨、拙者共迄以 御
書被 仰下候、右之趣、可申聞旨被 仰出候事、
別紙之通、可被得其意候、以上、

十一月廿八日

長大隅守(運起)

御名殿 奉得其意候、

御相組中殿

50「政隣記(耳目甄録)」一五金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
同十五日(一月) 初而 御目見被 仰上、依之同日・十六日・

十八日、御殿向一統平服、且十五日、從 御城直

ニ御老中・若年寄中江

(前田治脩・齊敬)
御両殿様 御同道ニ而御廻勤被遊候事、

右四日江戸発、十五日同断之御飛脚、追々金沢着、

相知レ候事、

寛政三年(一七九一)

二月一日

寛政二年〜寛政三年

前田治脩、養嗣子齊敬(利博)を同道して江戸
城に登る。齊敬は元服、正四位下左近衛権少
将・佐渡守に叙任され、齊敬と改める。

51「江戸幕府日記」寛政三年二月二日条国立公文書館内閣
文庫蔵
一、今已上刻、御黒書院江 出御、

(前田 齊敬)
松平又左衛門

佐渡守卜伺

右、元服被 仰付候付、御目見、御一字被下、被
任叙正四位下少将、

松平佐渡守

齊敬

御太刀一腰
金五枚
卷物十
御馬一疋
御刀豊後国 実行
代金拾五枚

右之通、献上之御礼申上之、御盃頂戴之、御刀備前
国真利、代金貳拾枚拝領之、

養子元服之御礼

(前田治脩)
松平加賀守

御太刀一腰
銀二十枚
綿三十枚

52「御触并御返書留」三三三金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

(前田 齊敬)
又左衛門様御元服可被 仰付候条、当十一日、御両

殿様御登 城被成候様、前晚御老中方御連名之御奉書到来、則御登 城被遊候処、

又左衛門様御儀、於御黒書院 御目見、御一字御拝領、被為任正四位下少将ニ、御盃・御肴御頂戴、御腰物御拝領、御懇之被為蒙 上意、

前田式部中將様ニも御礼被 仰上、御懇之被為蒙上意、重畳難有御仕合被 思召候、此段何茂江可申聞旨、以 御書被 仰下候、

御名佐渡守様、御実名

齊敬様与被称候事、

今日登 城之上、別紙忝通、御用番玄蕃助殿御渡被成候写相廻之申候、右為御祝詞、今日・明後日中年寄中等宅江相勤可申候、幼少・病氣等ニ而今日登 城無之面々へハ、向寄分致伝達、御用番宅江以使者御祝詞可申上筈ニ御座候、以上、

二月十九日

御名

御相組中様

御筆頭中様 但、指急候事故、御廻状ニ通也、

尚以、指急候事故、廻状致両通指出候、以上、

別紙之通、可被得其意候、以上、

二月十九日

長大隅守 (連起)

御名殿 奉得其意候、

御相組中殿

定番頭へ写

佐渡守様御名乗、御一字御頂戴、齊敬様と奉称候、御家中之人々実名同字有之候者、相改可申候、文字ハ違候而も唱同事ニ候者、唱替可申事、

亥二月

別紙之趣、被得其意、有無之儀当廿五日迄可被申聞候、以上、

二月廿日

長大隅守

御名殿

青山殿

殿

前田式部殿 (孝始)

留主居

殿

殿

53 「諸事被仰出日記」寛政三年二月条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

佐渡守様御実名

トキタカ
齊敬様与被称候事、

54 「政隣記（耳目甄録）」一五

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 拾五・拾六』

十九日 昨日依御廻状頭分以上登 城、御帳ニ付、柳之

御間列居之处、御年寄中等御列座、御用番^(本多政成)玄蕃助殿

左之通御演述、

又左衛門様御元服可被 仰付候条、当十一日、

御而殿様御登 城被成候様、前晚御老中方御連名之

御奉書到来、則御登 城被遊候处、

又左衛門様御儀、於御黒書院 御目見、御一字御

拝領、被為任正四位下中將ニ、御盃・御肴御頂戴、

御腰物御拝領、被為蒙 御懇之上意、

中將様ニも御札被 仰上、御懇之被為蒙 上意、

重畳難有御仕合被 思召候、此段何茂江可申聞旨、

以 御書被 仰下候、御名

佐渡守様 御実名 齊敬様^{ナリタカ}与奉称候事、

付札御横目江

今日御弘之為御祝詞、今日中又ハ明後廿一日、年寄

中等宅江罷出被申候、幼少・病氣等ニ而今日登城無

寛政三年

之人々ハ、向寄ル伝達、為御祝詞御用番宅へ以使者
申越候様可被申談候事、

二月

右、御用番御渡之旨等、御横目中申談之事、

三月一二日

前田治脩、帰国を許可され、同月一五日、江

戸城に登る。次いで同月一八日、江戸を発し、

四月二日、金沢城に到着する。

55 「江戸幕府日記」寛政三年三月二三日条

国立公文書館内閣
文庫蔵

上使松平越中守^(定信)

銀百枚
巻物三十

松平加賀守^(前田治脩)

右、御暇被 仰出候ニ付被遣之、

56 「江戸幕府日記」寛政三年三月一五日条

国立公文書館内閣
文庫蔵

御黒書院

御暇

御鷹被下
御馬被下

松平加賀守^(前田治脩)

(中略)

松平加賀守家来

卷物五

奥村河内守(尚寛)

同

本多頼母(政均)

57「諸事被仰出日記」寛政三年三月二五日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

文庫蔵

一、今日出仕以上之人々江御用番ハ以廻状左之通申来、

当月十三日、以

上使松平(乗完)和泉守殿御国許江之 御暇被 仰出、

白銀・御卷物御拝領、從

御台様茂以中島三左衛門殿御卷物御拝領、同十五

日、右為御札 御登城被成候所、於御黒書院

御目見、御懇之 上意、殊二 御鷹・御馬御拝

領、且又、奥村河内守・本多頼母

御前江被召出、其上御卷物頂戴之、重畳難有御仕

合二候旨、拙者共江以 御書被 仰下候事、

三月

58「御触并御返書留」三三三

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

当月十三日、以 上使松平(乗完)和泉守殿御国許江之御暇

被 仰出、白銀・御卷物御拝領、從 御台様茂以中島

三左衛門殿御卷物御拝領、同十五日、右為御札 御

登 城被成候処、於御黒書院 御目見、御懇之上使、

殊 御鷹・御馬御拝領、且又奥村河内守・本多頼母

御前江被 召出、其上御卷物頂戴之、重畳難有御仕合

二候旨、拙者共江以 御書被 仰下候事、

三月

59「御触并御返書留」三三三

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

猶以、難被罷出人々者、其段名之下二可被書記候、

以上、

明後廿九日、高岡ハ 御着城之筈二候条、 御着之御

様子被承合登 城、可被相伺 御機嫌候、若 御着

七時以後二候者、翌晦日四時ハ九時まで之内可被罷出

候、病氣等之面々者、御用番宅迄以使者可被申越候、

以上、

三月廿七日

前田大炊(孝友)

御名殿 奉得其意候、

御相組中殿

60「諸事被仰出日記」寛政三年四月朔日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、御前、当月十八日、江戸御発駕、廿五日、糸井川

駅姫川満水、三日半日御滞留、廿九日、境駅江御着、

追々早飛脚到来、今暁高岡御泊り、明二日、御着城之段、四月朔日四過申来、

61「諸事被仰出日記」寛政三年四月二日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、今日七時、御機嫌克 御着城、夜前高岡御泊、御供揃曉々八時之由ニ而、七過御発駕、糸井川ニ三日半日御滞留之由、江戸表御礼使本多内記、七半過発足、

62「政隣記（耳目甄録）」一五

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
〔政隣記 耳目甄録 拾五・拾六〕

同十三日

上使御老中松平和泉守殿を以、御国許へ之

御暇被蒙 仰、御例之通御拝領物、從

御台様も御使中島三左衛門を以、御例之通御拝受物

有之、

十五日、御登 城、御暇之御礼、御鷹・御馬等御例之通御拝領之事、

（中略）

同日、

為御待請五時分登 城、

中将様今暁八時御供揃ニ而、同刻過高岡御発駕、夕

七時頃、御機嫌能 御着 城、御表式台鏡板江 御

城代本多安房守殿并御家老・若御年寄被罷出御意有

之、御年寄中橋爪御門外三之御丸之側へ罷出、役義

寛政三年

之人持・頭分等罷出、夫々御意有之一但、頭分以上迄也」御式台階上江御近習之人々并御医師罷出、御

白洲へ定番頭・御留守居物頭罷出、御式台畳之間へ

御大小将御番頭・御大小将列居、敷付へ御近習頭・

御表小将罷出、御先立若年寄衆被相勤候事（横記）

又五郎殿也、御供人前記ニ有之通夫々帰着、河地

才記者昨朔日記之通ニ而、氣滞ニ付自宅江御跡分帰

着、直ニ役引之処本復ニ付、五月十五日分出勤之事、

五月一日

前田治脩、前田孝友（大炊）を金沢城代に任命する。

63「諸事被仰出日記」寛政三年五月朔日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、今日於 御前、前田大炊、御城代被 仰付、

64「政隣記（耳目甄録）」一五

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
〔政隣記 耳目甄録 拾五・拾六〕

朔日 四時頃、出仕之面々一統御目見、夫々家督等之御

礼被為請、且於

御前、左之通被 仰付、

御城方御用 村井又兵衛代 前田大炊

一〇月二二日

前田治脩、学校の普請「手伝」を本多政行
(安房守)に命じる。

65「諸事被仰出日記」寛政三年一〇月二二日条 金沢市立
玉川図書
館加越能文庫蔵

一、今般学校御普請御手伝、本多安房守^(政行)江御頼之旨、今
日被 仰渡、

一〇月二七日

前田治脩、年寄役・家老・若年寄に蓮池馬場
での乗馬を命じ、次いで御亭にて紅葉見物を
許可して酒肴を振る舞う。

66「諸事被仰出日記」寛政三年一〇月二七日条 金沢市立
玉川図書
館加越能文庫蔵

一、今日、於蓮池御馬場、年寄中・御家老・若年寄江乗
馬被仰付、其以後、御亭ニ而紅葉拜見、御吸物・御
酒・御肴被下、六時過、相済、

一〇月三〇日

金沢城白鳥堀の松の木、風雨のため倒れる。

67「政隣記(耳目甄録)」一五 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 拾五・拾六』
(一〇月)
晦日 暁風向強ク候処、外御廊之内白鳥堀岸ニ有之松根

覆り、鎗留番所之前通り江倒れ、依之御年寄衆等者
河北御門分登 城、其外ハ倒レ候枝之間分往来不支、
是余程之大木故也、于時又十二月廿三日暁ニも烈風
雪ニ而同所之大木松根覆り、右同断之事、

一〇月

加賀藩、学校（明倫堂・経武館）の普請を開始する（翌年二月に竣工）。

68 「明倫堂経武館棟札写」

金沢市立玉川図書館清水文庫蔵

治脩公御代

御奉行

御作事奉行

奥村河内守平尚寛

横山山城小野隆從

御横目

矢部八郎右エ門藤原成尺

厥初

泰雲院殿有学校造営之 命而至

前田大炊菅原孝友

正田半平源直強

御大工頭

清水治左衛門峯充

乾兌離震

治脩公金沢靈地大成殿之基址既定而救養民間之人材紹 先君之大統今茲

御大工主附

巽坎艮坤

寛政三年有明倫堂経営之 嚴命而今冬十月初執斧百工相与図焉全十二月建
柱励勤其業進之今四年二月遂成就依各書姓名納諸梁上仰願無風雨水火
雷震之難而長賜於国家安全之基云爾

篠田七郎兵衛政博
中村八兵衛知之
松田与助直高

主附

内作事奉行

大音主馬藤原厚績

谷猪左衛門以直

脇田瀬兵衛藤原尚尺

松野源左衛門藤原恭進

治脩公御代

御奉行

御作事奉行

奥村河内守平尚寛

横山山城小野隆從

御横目

矢部八郎右エ門藤原成尺

泰雲院殿有武学校造営之 命而至

前田大炊菅原孝友

正田半平源直強

御大工頭

清水治左衛門峯充
清水多四郎軌亮

乾兌離震

治脩公撰金沢之靈地而喜恵後世紹 先君之大統今茲寛政三年 有諸士励武之

巽坎艮坤

武学校造営之 嚴命而今冬十月工匠相集量始之今十二月建柱挂梁進其業全
四年春二月終成就依而各書姓名納諸棟上仰願無風火雷震之難而長此賜
於国家安全之基云爾

御大工

篠田七郎兵衛政博
中村八兵衛知之
松田与助直高

主附

大音主馬藤原厚績

内作事奉行

谷猪左衛門以直

脇田瀬兵衛藤原尚尺

松野源左衛門藤原恭進

寛政三年

69「越登賀三州志」 来因概覽附録二 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

寛政三年九月ヨリ学校興造、翌春落成ス、

【解説】 学校造営と同時代に編纂された富田景周「越登賀三州

志」 来因概覽附録二では、寛政三年（一七九二） 九月の起工と

あるが、本書では棟札（明倫堂経武館棟札写） の記載に従い、

その年代を同年一〇月とする。 なお、『加賀藩史料』一〇（寛

政四年（一七九二） 二月二日条） では「棟札之写」として、明

倫堂の棟札記載をのみ掲出する。

寛政四年（一七九二）

閏二月二日

前田治脩、金沢城内を見分する。

70「政隣記（耳目瓢録）」一六 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目瓢録 拾五・控△』

（閏二月） 廿一日 八時之御供揃ニ而御城中御巡見、奥之口ハ御出、

五十間御長屋并橋爪御櫓御覽、唐御門ハ裏口御門・

土橋御門・甚右衛門坂御門辺御見通シ、御宮坂御門

西町口辺御見通シ、石川御門続御櫓御覽、南御門・

東之丸八枚戸御覽、御本丸・薪丸御立帰、埋御門・
松坂御門・玉泉院様丸・金谷御門・堂形御馬場御入
口ハ御見通御立帰、奥ノ口ハ御帰殿、

三月二日

前田治脩、新たに開いた学校を訪れる。

71「御触并御返書留」三四 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

尚以、不被罷出面々ハ、其段名ノ下ニ可被書記候、

以上、

来月二日、学校御開に付、学頭新井白蛾江孝経講釈

被 仰付、御前御出御聴聞被遊候、其節頭分以上望次

第聴聞被仰付旨被 仰出候条、被得其意、（目脱） 慰斗半袴着

用、朝六半時過、学校可有参出候、其節御作法之儀ハ、

御横目江御作法書相渡候間、当廿七日朝五つ時ハ九つ

時迄之内登 城候而、右御作法書可有披見候、以上、

閏二月廿五日

（孝友）
前田大炊

（政寛）
横山藏人殿 奉得其意候、

三田村虎次郎殿
(定保)

津田外記殿
(保和)

河野弥次郎殿
(通歴)

72「諸事被仰出日記」寛政四年三月二日条
金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、今日、学校御開キニ付、五時過、学校江 御出、頭
分以上望之者予参、委細別帳ニ記、

73「政隣記(耳目甄録)」一六
金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 拾五・拾六』
(三月)
二日 前記前月廿七日等ニ有之通、今朝五時御供揃ニ而

同刻過 御出、両学校江被為人御供致、前月廿二日
記之通ニ而、御大小将御番頭当番々奥村十郎左衛門
罷出、御大小将横目水越八郎左衛門罷出、四半時頃
御帰殿、但、前記之通組頭御供無之ニ付、武学校御
上り口ニ而暫之間御先立十郎左衛門勤之、御駕籠之
戸御簾役御大小将宮崎清右衛門開之、於学校者御作
法書之通御駕籠横付等之事、

三月六日

前田治脩、金沢を發し、同月一八日、江戸に

寛政三年〜寛政四年

到着する。次いで四月一日、江戸城に登り、
参勤の挨拶をする。

74「御触并御返書留」三四
金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

尚以、難被罷出人々者、其段名之下ニ可被書記候、
以上、

当六日、御発駕之筈ニ候条、四日四時々九時迄之内
被登一城、可被相伺御機嫌候、幼少・病氣等之面々者
御用番宅迄以使者可被申越候、以上、

三月朔日

(進起)
長大隅守

御名殿 奉得其意候、

御相組中殿

75「諸事被仰出日記」寛政四年三月六日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、全晴、六半時御供揃ニ而、五ツ時、御機嫌克 御
発駕、高岡御泊り、御供御家老横山々城・今枝内記、
(降從) (易直)

76「諸事被仰出日記」寛政四年三月二七日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

文庫蔵

一、当十八日、御日廻り之通、江戸表江御機嫌克御着之
旨、中飛脚到来、

77「江戸幕府日記」寛政四年四月朔日条

国立公文書館内閣文庫蔵

御黒書院

参勤

(銀五拾枚
卷物式十)(前田治脩)
松平加賀守

御白書院

(中略)

松平加賀守家来

(經廿筋
銀馬代)(陸從)
横山山城

同

(易直)
今枝内記

78 「諸事被仰出日記」寛政四年四月一五日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、前月廿八日、上使御老中戸田采女正殿ヲ以、被蒙

上意、当朔日、御参府御礼如御例被 仰上、御懇之

上意、御供御家老横山々城・今枝内記御目見被 仰

付候旨、

右、今日出仕之面々江御用番演述、

79 「御触并御返書留」三四 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

前月十八日、御機嫌能御着府、同廿八日、上使戸田

(氏教)
采女正殿を以被蒙上意、当朔日、御登 城、於御黒

書院御礼被 仰上、殊御懇之

上意、横山々城・今枝内記(易直) 御目見被 仰付、重畳

難有御仕合ニ被 思召候由、以御書被 仰下候事、

別紙両通之趣、夫々可申談旨、御法事御奉行又兵衛(村井長世)

殿被仰聞候条、御承知被成、御同席御伝達可被成候、

以上、

五月

御横目

人持衆中

80 「政隣記(耳目甄録)」一六

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
政隣記 耳目甄録 拾五・拾六
六日 快天、前記御供揃ニ而五時過、表御式台ヨリ御発

駕、鑑板江

亀万千殿御送、御年寄衆等前々之通被罷出、人持・

頭分も前々之通罷出、御発駕後御席江出、御用番

(長連起)
大隅守殿江恐悅申述退出、

(中略)

廿八日(中略)

(前田治脩)
中将様今月十八日晝五時、御供揃ニ而同刻頃、浦輪

駅御発駕、前記有之通蔵駅御中休、御下邸江御立寄、

四半時頃、御上邸江御着府、為御茶請 出雲守様并(前田利謙)

(利以)
前田大和守殿・前田信濃守殿、其外御勝手座敷江御

出入衆前田安房守殿等廿人余御出、一汁五菜之御料理等、後御菓子迄夫々出、御城坊主衆等も夫々御出入之分参上、右於御席之御対顔等有之、八時頃御出、御老中方御廻勤、

(中略)

廿八日 上使御老中戸田采女正殿を以、就御参府御懇之被蒙 上意、御作法御例之通、四月朔日、御登城、御参勤之御礼被 仰上、御懇之上意且横山山城・今枝内記(易直) 御目見等御例之通候段、追々江戸へ申来、

四月二五日

前田齐敬、帰国を許可され、同月二八日、江戸城に登る。次いで五月七日、江戸を発し、同月一九日、金沢城に到着する。

81「江戸幕府日記」寛政四年四月二五日条 国立公文書館内閣文庫蔵

上使戸田采女正

卷物二十

(前田齐敬) 松平佐渡守

右、就御暇被遣之、

82「江戸幕府日記」寛政四年四月二八日条 国立公文書館内閣文庫蔵

御白書院

御暇

御鷹被下
御馬被下

(前田齐敬) 松平佐渡守

養子御暇之御礼

(前田治脩) 松平加賀守

83「諸事被仰出日記」寛政四年五月二一日条

文庫蔵

金沢市立玉川図書館加越能

一、今日、諸頭登城、左之通御用番演述、

(前田齐敬) 佐渡守様御国許江之御暇御願置被成候所、前月廿五日、以上使戸田采女正殿御暇被 仰出、御卷物御拝領、從 御台様茂安藤長左衛門殿以御卷物御拝受、同廿八日、為御礼御登城被成候所、於御白書院 御目見被仰上、其上御着座三而御懇之上意、殊ニ御鷹・御馬 御拝領、中將様二茂

(前田治脩) 御目見、御懇之被為蒙 上意、重畳難有御仕合被 思召候、此段何茂江可申聞旨、拙者共迄以御書被 仰下候事、

五月十一日

84「御触并御返書留」三四 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

寛政四年

二九

佐渡守様御国許江之御暇御願置被成候処、前月廿五

日、以上使戸田采女正殿御暇被仰出、御卷物御拝

領、從

御台様も以安藤長左衛門殿御卷物御拝受、同廿八日、

為御札 御登城被成候処、於御白書院 御目見被

仰上、其上御着座ニ而御懇之上意、殊御鷹・御馬

御拝領、

中將様ニも 御目見、御懇之被為蒙上意、重畳難有

御仕合被 思召候、此段何もへ可申聞旨、拙者共迄

以 御書被 仰下候事、

今日登 城之上、御用番玄蕃助殿別紙迄通御渡被成

候写、相廻之申候、右為御祝詞今日・明後日中、年

寄中等宅へ相勤可申候、且又幼少・病氣等ニ而難被

罷出面々者、御用番宅へ以使者申上筈御座候、以上、

五月十一日

御名

御相組様

前田修理様

成瀬内蔵助様

奥村左京様

前田兵部様

前田主殿助様

菊池大学様

御筆頭之分指急義ニ付、二訳ニして御廻文之事、

85「御触并御返書留」三四

佐渡守様明後十九日、津幡

御着之筈ニ候条、御着之御様子被承合、為御祝詞御

用番宅まで可被罷出候、幼少・病氣等之面々ハ、以

使者可被申越候事、

右之趣、可被得其意候、以上、

五月十七日

本多玄蕃助

御名殿 奉得其意候、

86「諸事被仰出日記」寛政四年五月一九日条

文庫藏

一、今日九時前、佐渡守様御機嫌克、夜前津幡御泊りニ

而、金谷御殿江 御着被遊、年寄中・御家老并大音

〔厚曹〕南郊・若年寄・定番頭罷出、〔道暢〕但、御供人持織田主税、御付組頭堀頭並北村三郎左衛門、御大小將御番頭柎植儀大夫、櫻田折之助、同御横目堀六郎左衛門

但、頭分以上、為御祝儀御用番宅江參出、

87「政隣記（耳目甄録）」一六 〔四月〕金沢市立玉川図書館加越能文庫藏
〔政隣記 耳目甄録 拾五・拾六〕

〔前田齊敬〕佐渡守様御袖留之義、御用番御老中江御届、今月廿

七日被為留、且御国許江之御暇之義、從

〔前田治修〕中將様御願被遊候処、今月廿五日、上使御老中戸

田采女正殿を以、御願之通被 仰出、御卷物御拝領、

從

〔広大院〕御台様も御使御広式番之頭安藤長左衛門殿を以、御

卷物御拝受、且前日依御奉書、同廿八日、御登 城、

御礼被 仰上、御懇之 上意、御鷹・御馬御拝領、

中將様二も御登 城、御礼被 仰上候処、御懇之被

為蒙 上意候事、

〔中略〕

〔五月〕十九日、九時前、御道中益御機嫌克、御日凶之通、金谷

御殿江

佐渡守様御着、公辺江為御礼被指出候御使者人持

寛政四年

〔道暢〕組前田兵庫、御目見被 仰付、二之御丸御年寄衆

於席、卷物・御羽織拝領、披露御大小將岡田主馬勤

之、八時頃発足有之、且前記二有之追帰御供人、廿

四、五日追々発足帰府之事、

但、去七日、於江戸四半時御供揃二而八時過、御

発駕、

五月一七日

加賀藩大坂藩邸、類焼する。

88「政隣記（耳目甄録）」一六

〔五月〕今月十六日夜、大坂表七郎右衛門町塩屋源兵衛家、子上

刻頃出火、左之通類焼、十八日朝辰下刻鎮火、町数

八十九ヶ所、家数二千百十八軒、竈数壹万五百四十

三、

〔中略〕

右、從大坂到来之書面也、此方様御屋敷も御類焼二

候得共、御藏米者無御別条、詰人無難二立退候段申

来、且又御出入之鴻池・具足屋七左衛門・辻次郎右

衛門等類焼之由も申来、

一二月一五日

前田治脩、江戸城に登り、参議昇進を伝達される。

89「江戸幕府日記」寛政四年二月一五日条 国立公文書館
内閣文庫蔵

御座之間

被任宰相

(前田治脩)
松平加賀守

右、於 御前被 仰付之、

90「諸事被仰出日記」寛政四年二月三日条 金沢市立
玉川図書
館加越能文庫

一、当十五日、於江戸御座之間ニ而 御直ニ 宰相御拝

任被仰渡候旨、今日早飛脚到来、

91「御触并御返書留」三五 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

前田治脩

中将様御儀、旧臘十五日、御登 城被成候様、前日御
老中方御連名之依御奉書、御登 城被成候処、於

御座之間御懇之 上意之上、参議御拜任被 仰出、

難有御仕合被 思召候由、拙者共江以 御使者被下候、

右之趣、何茂江可申聞_レ旨御意候事、

(本多政成)

今日登 城之上、別紙迄通御用番玄蕃助殿御渡被成

候写相廻之申候、右為御祝詞、今明日中年寄中等宅へ

相勤可申候、幼少・病氣等ニ而今日登 城無之面々ハ、
御用番宅へ為御祝詞以使者可申上_三御座候、以上、

正月二日

御名

御相組中様

御筆頭様

92「政隣記（耳目甄録）」一六

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 拾五・拾六』

(二月)
十五日

昨日被 仰出候通、御供揃ニ而六時二步、奥之

口々御出、御登 城、御供人御平常例之通、御番

頭御供自分、御横目御供永原半左衛門、上下御供

組頭江守平馬、御使番久能吉大夫、御表小将中村

才兵衛、且不時ニ御表小将加藤嘉孟被 召連、四時

過御左右相知レ候ニ付、嘉孟早乘ニ而御館江帰、大

御門へ入、御転任之段演述、夫々御殿詰人一統布上

下着用、将又殿中御居残ニ付、四半時頃御三家様御

跡へ御下り、其節御乗用所迄安芸守様御父子様へ御

使者宇山貞助与申者被附置、今日之御左右御聞被成

度旨之御口上、自分取次、達 御聴伺被 仰出之上、

宰相 御拜任之段御返答申演遣ス、夫々肥後守様江

御立寄、御膳被 召上、自分・半左衛門・聞番御供

高田新左衛門江も左之通被下之、(下略)

奉行中席前ニ何茂罷出平伏、下山之節御丁場ニ而
同様之事、

この年

加賀藩の穴生、二十人石切に對し、石切・石
引の勤務に関する条目を通達したという。

93「戸室山初年号等留帳」

金沢市立玉川図書館後藤文庫蔵
切丁場確認調査報告書Ⅰ

『戸室石

戸室山御丁場御縮方之事

一、御石割方之儀、石之筋合詮儀之上取掛、中割・小割
可仕事、

一、角石角脇小づら四方切立作立可申候、石ニ合難成石
者其通ニ候事、

一、御石作様角石等寸尺等之儀、其節可申談事、

一、御石出来之上見届候、尤帳面ニ可被相記事、

一、火之元堅固之事、

一、御丁場之内、無用之者不可入事、

一、御丁場 御城代為御見分登山之節、別所村辺迄売人
ハ罷出へく候、其余之儀者其節可申談事、

一、御普請奉行中登山之節、前々之通可被相心得事、

但、石切者無構相勤罷在、昼合御小屋江入候節、

一、御家中役小者御丁場向御用、夫々可申付事、

一、御道具等金沢江持参之貫目、御定之通候事、

一、御道具遣ヒ方一統申談、御不益無之事、

一、役小者参着刻限、六半時之事、

一、役小者参着之上、人高指見届候、若当病人有之節、

杖突詮義之上出不足ニ相立、紙面取立、翌日無相違
(理力) 為埋可申事、

一、役小者出過人請不申候、乍併杖突合申聞候品ニ候、
出人ニ相立、翌日指引之事、

一、役小者於御丁場、致過杖突より及断候者、遂見
分、御定之通可申付事、

一、御丁場仕廻 御城中同様之事、

一、御道具自然土中江相成候儀有之、見江当り不申候

ハ、小紙ヲ以可被申聞事、

一、御丁場合くづ石たり共取出シ申ましく事、

一、御丁場江指出候御道具、朝夕出入改之事、

一、金沢合登せ、或ハ下シ候御道具等、帳面ニ相記可申

事、

一、不寄何、御益之儀有之候者、可申聞事、

一、鉄道具金沢江修復ニ遣候節、見届候上、焼直等之儀、小紙ヲ以可申遣事、

一、近年積石小石專切立候条、石形等之儀者、時々可申談事、

一、交替之儀、登山人待請下山之事、

右之通可被相心得候事、

(文化六生)

巳三月

奥源次郎

後藤彦三郎

後藤小十郎

後藤金平

御扶持人石切中

御縮方之趣、前々々覚書を以申談置候得共、文化元^(六)年改而申渡候、二十人石切江ハ寛政四年申渡置候通候事、次第二文面ハ宜相成候、元来戸室山初り候節、御縮方等之儀茂無之、甚左衛門了簡相調、同役へ申談候、小紙私共役所ニはり有之候、是ニてハ御縮方ニてハ無之候、天明年^(六)御城代々御縮方等之義御尋

に付、相調指図候得共、文面甚行届不申、初心之内なれハ無是非茂事、

【解説】以上、文化六年（一八〇九）に加賀藩穴生が扶持人石切に対して通達した戸室山石切丁場における勤務に関する条目である。その付記に、こうした条目が二十人石切に対しては寛政四年（一七九二）に達せられた旨が見出せる。ただし、その条目の内容は不明である。

寛政五年（一七九三）

三月六日

前田斉敬、金沢を発し、同月一九日、江戸に到着する。次いで四月一日、江戸城に登り、参勤の挨拶をする。

94 「諸事被仰出日記」寛政五年三月六日条

金沢市立玉川図書館蔵
館加越能文庫蔵

一、今日五半時、^(前田斉敬)佐渡守様御機嫌克御発駕、今夜高岡御泊、

95 「諸事被仰出日記」寛政五年三月二十八日条

金沢市立玉川図書館蔵

文庫蔵

一、佐渡守様御途中無御恙御当り之通、当十九日、江戸

表江御着府之旨、中飛脚到来、

【解説】前田斉敬の登營については、97「江戸幕府日記」寛政五年（一七九三）四月朔日条、98「諸事被仰出日記」同年四月一五日条を参照。

三月二八日

前田治脩、帰国を許可され、四月一日、江戸城に登る。次いで同月四日、江戸を發し、同月一六日、金沢城に到着する。

96「江戸幕府日記」寛政五年三月二八日条 国立公文書館内閣文庫蔵

上使松平伊豆守

（前田治脩）
松平加賀守

銀百枚
卷物三十
（竹千代）
若君様々
卷物二十

右、就御暇被遣之、

97「江戸幕府日記」寛政五年四月朔日条 国立公文書館内閣文庫蔵

御座之間

御暇

寛政四年〜寛政五年

御鷹被下
御馬

一、今已后刻、御白書院江 出御、

参府

（御太刀一腰
銀三十枚
卷物十）

（前田斉敬）
松平佐渡守

養子参府之御礼

申上候御礼

松平加賀守

（中略）

松平加賀守家来

卷物五

同

（孝友）
前田大炊
（明義）
西尾隼人

98「諸事被仰出日記」寛政五年四月一五日条 金沢市立玉川図書館加越能

文庫蔵

一、今日出仕之人々江左之通御用番演述、

前月廿八日、以上使松平伊豆守殿御国許江之御暇

被仰出、白銀・御卷物御拝領、從 若君様右御同人

を以、御卷物御拝領、從 御台様茂中島三左衛門殿

を以、御卷物御拝領、去朔日、右為御礼御登城被成

候所、於 御座之間 御目見、御懇之上意、殊

ニ御手自御熨斗蛇御頂戴、御鷹・御馬御拝領、且又

前田大炊・西尾隼人^(明義)、御前江被召出、其上御卷物

頂戴、重畳難有被思召候旨、拙者共江以 御書被

仰下候、将又今般、

佐渡守様御参府三付、前月廿八日、上使松平伊豆守

殿を以被為蒙 上意、且去朔日、御礼可被仰上旨、

前日依御奉書 御登城、於御白書院御礼被仰上候所

御懇之被為蒙 上意、

相公様ニ茂御礼被 仰上候所、御懇之被為蒙 上意、

難有 思召候旨 御意之由、大炊等々申来候事、

99 「御触并御返書留」三五 金沢市立玉川図書館加越能文庫藏

前月廿八日、以

上使松平伊豆守殿御国許江之御暇被

仰出、白銀・御卷物御拝領、從

若君様右御同人を以御卷物御拝領、從

御台様茂中島三左衛門殿を以御卷物御拝領、去朔日、

右為御礼 御登 城被成候所、於 御座之間 御目

見、御懇之 上意、殊ニ 御手自御熨斗蛇御頂戴、御

鷹・御馬御拝領、且又前田大炊・西尾隼人^(明義) 御前江

被 召出、其上御卷物頂戴之、重畳難有被 思召候

旨、拙者共へ以 御書被 仰下候、将又今般、

佐渡守様御参府三付、前月廿八日、上使松平伊豆守

殿を以被為蒙 上意、且去朔日、御礼可被 仰上旨、

前日依 御奉書 御登 城、於

御白書院御礼被 仰上候所、御懇之被為蒙 上意、

相公様ニ茂御礼被 仰上候所、御懇之被為蒙 上意、

難有被 思召候旨、

御意之由、大炊等々申来候事、

今日、於 御城御用番玄蕃助殿御渡之別紙相廻之申

候、以上、

四月十五日

御名

御相組様

御筆頭様

別紙之通り被得其意、早速可被相廻候、以上、

四月十八日

長大隅守^(連起)

御名殿 奉得其意候、

青山将監殿^(勇次)

寺西九左衛門殿^(秀一)

前田(孝始)式部殿

篠原(二清)監物殿

佐々木(定則)誠善殿

御六人御連名之事、

100「諸事被仰出日記」寛政五年四月一六日条

文庫藏
金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、夜前津幡御泊り、今日五半過、御機嫌克 御着城、

御礼使生駒右近(直進)発足、一卜先御帰り四半時野田御廟

参、

101「政隣記（耳目甄録）」一七

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 拾七』
(前田孝友)

同日 於御席頭分以上并聞番見習へ左之通天炊殿御演述、

畢而於竹之間頭分以上迄御帳二付、恐悦申上候事、

前月廿八日、上使松平伊豆守(信明)殿を以、御国許へ之

御暇被進、白銀・御卷物御拝領、從

若君様右御同人を以、御卷物御拝領、從

御台様も中島三左衛門(竹千代)殿を以、御卷物御拝領被成

候、昨廿九日依御奉書、今日御登 城被成候処、於

御座之間御礼被 仰上、御懇之被為蒙 上意、御手

自慰斗鮑 御頂戴、御鷹・御馬御拝領、次二大炊・

寛政五年

隼人(西尾明義) 御目見、拝領物も被仰付、重疊難有被 思

召候、将又今般

佐渡守様(前田齊敬) 御参府二付、前月廿八日、上使松平伊

豆守殿を以、被為蒙 上意、且今日御礼可被仰上候、

昨日依御奉書御登城、於御白書院御礼被 仰上候処、

御懇之被為蒙上意、

相公様(前田清勝)も御礼被仰上候処、御懇之被為蒙 上意、難

有被 思召候、此段何もへ可申聞旨 御意二候、

(中略)

四日(四月) 一昨日記之通、御供揃二而今日夕七時過、御例之

通表御式台々 御発駕、

(中略)

同日(四月三日) 去十六日、金沢発之中飛脚、戌上刻江戸着、左之

通申来、

相公様御道中御日図之通御通行、十六日朝五半時頃、

御帰城、追付之御供揃二而、野田

泰雲院様御廟江 御参詣、且御帰国為御礼、公辺江

之御使生駒右近(直進)、御目見被 仰付候後、御年寄衆

於席御例之通紗綾二卷・御羽織被下之、披露御大小

将杉原安左衛門、(一傳)

但、生駒右近、廿七日江戸参着、

一〇月二五日

富山藩江戸藩邸、焼失する。

102 「政隣記（耳目甄録）」一七

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 拾七』

廿五日 暮時前、下谷茅町出火与御櫓近板打候ニ付、火

消老番宮崎藏人、(元生)二番大脇鞍負、御人数召連押出候

処、火事所 出雲守様御借地御囲之内、御長柄小者

之御貸長屋分出火ニ付、為防候処、御長屋十二筋并

御厩ハ焼失、其外ハ防留之、然処無縁坂町家へ火移、

此所ニ而も講安寺本堂并町家三軒ハ防留候内、榊原

式部(致敦)大輔殿御中屋敷へ飛火等ニ而燃付、本家ハ不殘

焼失、門・長屋・土藏者防留之候内、北風烈ク、飛

火等所々ニ有之、湯島切通等分天神大門迄江焼拔、

立花出雲守殿焼失、此辺ニ而此方様御人数消口都合

十二ヶ所有之、右分段々焼通り、下谷和泉橋通、夫

分須田町・今川橋通へ焼拔ケ、遠火ニ相成候ニ付、

夜九時前、一二番火消歸入有之候、右火事、日本橋

河岸ニ而翌廿六日昼九時前及鎮火、右火事ニ付、一
統 御館へ罷出候処、夜九時前ニ至遠火ニ相成、風
筋も宜敷ニ付退散、小屋拵与西尾隼人殿御指図之由、
御横目演述ニ付、夫々退出、(明義)

寛政六年（一七九四）

【解説】棟札の写真・寸法および記載事項が、『兼六園全史』

（兼六園観光協会、一九七六年）に「昭和五〇年一月二六

日 魚泡洞発見」として紹介される（二二二頁）。なお、金

沢市立玉川図書館清水文庫蔵「金城靈沢天満宮棟札写」は

当該史料の写本と推定される。

三月二日

加賀藩、学校鎮守の上棟式を行う。

103「金沢神社御棟札」 『兼六園主史』

（表）

無上

参議菅原朝臣治脩公 御代

御主附

奥村河内守平尚寛

前田大炊菅原孝友

本多玄蕃助藤原政成

御造宮奉行

佐藤利兵衛藤原直寛

寺社方修理裁許

本橋仙右工門広領
奥村平左工門義方

御大工頭

清水治左工門峯充
清水多四郎軌亮

靈宝

金城靈沢御勧請 天満宮 鎮守御造宮御棟札

神道

稲荷守
命婦神

御作事奉行

井上勘右工門源喜親

御大工

井上庄右工門明規
松田与助保広

加持

寛政六歳三月二日 御上棟

御主附
大音主馬藤原厚績

同御横目

小塚斎宮橋行文
疋田半平源直強

（裏）

加陽金城靈沢鎮護有

天満宮細井神
命婦神

社造宮之 嚴命而今茲寛政癸巳秋九月神職等相議

案四神相応之靈場定工匠法規之図形衆巧励業經之宮之臻翌年

春三月遂成就之実御武運長久国民安康之基也仰願無風火雷震

之難永垂援護因各書姓名納之宮社梁間祝曰万歳万歳万歳

井上明規 謹拝書

寛政五年～寛政六年

三月五日

金沢城二ノ丸進物所の金銀、盜難に遭う。

104「政隣記（耳目甄録）」一八 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 拾八』（三月）
十一日（中略）

二之御丸御進物所長持ニ入有之候御札錢代、金壹歩四十
九切・銀壹貫二百目余、今月五日紛失、同所番人割
場附足輕齋藤和助与申者疑敷ニ付、翌六日、盜賊改
方伊藤平大夫於宅吟味之處、不分明ニ付、牢揚屋江
入置、今七日、再吟味ニ而白状、右金銀者盜取候得
共、怖口敷相成候ニ付、坂下御門内御堀江投捨候段
申ニ付、御用番江平大夫江御達申候處、御堀浚へ被
仰渡候得共無之ニ付、重而吟味之處、右御堀江捨候
テ一向無相違段申候由候、尤右同日々禁牢、同廿七
日々公事場江引渡有之由也、

四月二七日

前田治脩、金沢を發し、五月九日、江戸に到
着する。次いで同月一五日、江戸城に登り、
参勤の挨拶をする。

105「諸事被仰出日記」寛政六年四月二七日程 金沢市立玉川
図書館加越能
文庫蔵

一、今日六ツ過之御供揃ニ而、五時過、御機嫌克 御發
駕被遊、高岡御泊、御供之御家老本多玄蕃助、

106「江戸幕府日記」寛政六年五月一五日程 国立公文書館内閣
文庫蔵

御座間

参勤

御太刀一腰
銀五十枚
巻物二十（前田治脩）
松平加賀守

（中略）

一、今已上刻、御白書院江 出御、

（中略）

松平加賀守家来

經二十筋
銀馬代（政成）
本多玄蕃助

同

（明義）
西尾隼人107「諸事被仰出日記」寛政六年五月条 金沢市立玉川図書館加越
能文庫蔵

一、当九日、御機嫌克御日図り之通、御着被遊、十三日、

上使安藤对馬守殿を以、上意被蒙、為御礼十五日、

御登城、御供之御家老本多玄蕃助・西尾隼人、御目

見被 仰付、

108 「政隣記（耳目甄録）」一八 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 拾八』

廿七日 （四月） 朝五半時頃、御機嫌克 御発駕被遊候、其節

龜万千殿階下江御送、御城代・御用番・御家老中

階下江被罷出、御先立若年寄大音主馬、（原統）其外御年寄

衆等并諸頭之内等罷出候ヶ所前々之通、御発駕後、

御席江頭分以上御見立三罷出候人々者罷出、御用番

（長連起）大隅守殿江恐悦申演退出之事、

但、五月九日九半時頃、御日図之通江戸御着、都

而御例之通、

（中略）

今月十三日 （五月） 今般就御参勤而之為 上使、御老中安藤

対馬守殿御出、御作法前々之通、（信成）十五日、御登 城、

御参勤之御礼被仰上、（本多政成）玄蕃助殿・隼人殿も御目見等

都而御前例之通ニ付記略、

九月六日

加賀藩、金沢城尾坂門脇の石垣修復のため、

この日以降、同所の往来を禁止する。

109 「政隣記（耳目甄録）」一八 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 拾八』

廿三日 （八月） （中略）

付札御横目江

尾坂御門脇御石垣御修復就被 仰付候、来月六日迄

往来指留候条、此段夫々可被申談候事、

八月廿七日

右、御城代安房守殿被仰聞候旨等、如例御横目廻状

出、

一二月一日

金沢に地震あり。

110 「政隣記（耳目甄録）」一八 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 拾八』

朔日 （三月） 雪風強、已上刻地震、

寛政七年（一七九五）

三月六日

この日以前、金沢城尾坂門脇の石垣修復が完了する。加賀藩、この日以降、同所の往来を

許可する。

11 「政隣記（耳目甄録）」一八 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵『政隣記 耳目甄録 拾八』

二日（中略）

付札御横目江

△ 尾坂御門脇御石垣御修覆中往来指留置候得共、当月六日右往来不指支候条、夫々可被申談候事、

三月二日

右、御城代安房守殿被仰聞候旨、御横目廻状出、

三月一三日

前田治脩、帰国を許可され、同月一五日、江戸城に登る。次いで同月一九日、江戸を発し、四月一日、金沢城に到着する。

112 「江戸幕府日記」寛政七年三月二三日条 国立公文書館内閣文庫蔵

上使安藤対馬守 （信成）

松平加賀守 （前田治脩）

銀百枚
卷物三十
（徳川家）
若君様
卷物二十

御台様 （広大院）

御使小笠原久兵衛 （義武）

卷物五

同人

右、御暇被 仰出候付被遣之、

113 「江戸幕府日記」寛政七年三月一五日程 国立公文書館内閣文庫蔵

御座間

（中略）

御暇

御鷹被下
御馬被下

松平加賀守 （前田治脩）

一、今已上刻、御白書院 出御、

（中略）

松平加賀守家来

卷物五

本多玄蕃助 （政成）

同

不破彦三 （為章）

114 「諸事被仰出日記」寛政七年三月条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

十三日

一、於江戸表今日上使安藤対馬守殿を以、御国江之御暇、

如御例白銀百枚・御卷物三十御拝領、西御丸も御

同人を以御拝領物、且又從 御台様御広式御番頭小

笠原久兵衛殿ヲ以御拝領物有之旨、中飛脚到来、

十五日

一、御暇之御礼被仰上、且又御供之御家老本多玄蕃助・

不破彦三御目見被 仰付、拝領被 仰付候旨、廿二

日、中飛脚到来、

115 「諸事被仰出日記」寛政七年四月朔日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、今日夜前、津幡御泊ニ而、今朔日五半少過、御機

嫌克御当り之通、御帰城、即刻宝円寺江御参詣、無

程御帰城、但、天氣宜候ハ、野田御廟参可被遊旨、

昨日被 仰出候得共、夜前少々雨天、五半過ハ雨

ふり候ニ付、野田御延引、宝円寺迄、

116 「政寛覚書」寛政七年四月朔日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

四月朔日

今日、御帰城ニ付、津幡七時過御発駕之由ニ而、六

半時揃と玄蕃助等々申来、五時過ニ出席之事、

四時前、御帰城、年寄中三ノ丸へ罷出、御城代老

人・御家老・若年寄鏡板伺公之事、

於表席以御近習頭忍悦申上候処、追付

御前へ年寄中一切、御家老・若老一切ニ被為 召、御

意之趣有之、一先御入被遊、重而 御出、御使人上坂

平次兵衛被為 召、御意有之、其節例之通伺公有之、

117 「政隣記（耳目甄録）」一八 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

十三日 同断、上使御老中安藤对馬守殿を以、御国許

江之御暇被蒙 仰、御例之通巻物・白銀御拝領、從

御台様も御使御広式御用人小笠原久兵衛殿を以、御

巻物五御拝受、御作法都而御例之通、十五日、御

登 城、御暇之御礼、御懇之上意、御手自御慰斗

鮑・御鷹「同日渡」・御馬「栗毛八才・月毛五才」御

拝領、玄蕃助・彦三 御目見、拝領物等都而御例之

通、同日、旧臘御拝領之 御拳之鷹御披、是又

御作法等都而前々之通、

（中略）

十九日 夕七時前、江戸御発駕、御作法前々之通、且御

泊附左之通、浦輪 熊谷 板鼻 追分 榊 牟礼

荒井 能生 泊 魚津 高岡 津幡

（中略）

同月二日（中略）

相公様、昨夜津幡御泊、今曉七時御供揃ニ而今日

四時前、御着 城、御作法都而前々之通ニ付略ス、

且為御礼江戸江之御使人上坂平次兵衛 御目見後拝

領物可被 仰付候処、去々年暮合格別御省略ニ付、

御使人江之被下物当分相止候事、但、野田

泰雲院様御廟江御着後、御参詣与昨夜被 仰出置候

処、雨天ニ付御延引、宝円寺江御参詣、自分御供、

【解説】金沢着城日について「政隣記（耳目甄録）」は四月二日とするが、ここでは「諸事被仰出日記」・「政寛寛書」の記述に従った。

四月

金沢城石川門にて普請あり。

118 「寛政文化間日記」寛政七年四月二六日条

文庫蔵

金沢市立玉川図書館加越能

石川御門御普請ニ付、河北往来、

六月二七日

前田斉敬（治脩の養嗣子。重教の子）、江戸にて没する。次いで遺骸が金沢へ運ばれ、八月二五日、天徳院にて葬儀が行われる。

119 「江戸幕府日記」寛政七年七月四日条

国立公文書館内閣文庫蔵

銀三拾枚

右、養子佐渡守卒去付、為御香奠被遣之、

但、加賀守在国付、為名代高家前田信濃守罷出由、

120 「諸事被仰出日記」寛政七年七月七日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、佐渡守様前月晦日六時過、御逝去之旨、御大小将山崎弥次郎を以言上、今朝四時前参着、但、御前後之義別帳ニ記ニ付致省略、

御法名 観樹院殿故正四位下羽林次将法山道輪大居士 齊敬公

士 齊敬公

121 「政寛寛書」寛政七年七月七日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、前月晦日未ノ上刻、江戸表発足早打御使御大小将山崎弥次郎到着、四時過、表方席江罷出ル、

但、丹波島指支二日逗留有之由、

佐渡守様御逝去之段、安藤对馬守殿江聞番を以前月晦日卯ノ上刻、御届有之由申来ル、

122 「政隣記（耳目甄録）」一八

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

同月晦日 於江戸

佐渡守様不被為叶御療養、卯上刻、御逝去、委曲之

義七月朔日等記ス互見、但、御実ハ今月廿七日卯ノ
二刻御逝去之事、

(中略)

廿五日

(八月)

前記ニ有之通ニ而、今朝五半時頃、御葬式相
初り、詰人頭分以上太鼓堂之方後口ニ仕伺公、御
巡堂之間中場江罷出、縁取之上庫裏之方廻廊後口
ニ仕列居、夫々御出棺之節為御見送山門之外勝手
門之方江罷出蹲踞、夫々四半時頃相済、御廟御納
り、暮頃相済、御寺詰人者九時過退出、同役々田辺
善大夫相詰、都而御次第等前記之通、且又
(直業)
(前田齊広)
亀万千殿就御風氣ニ御詰無御座候事、

一〇月二二日

金沢城三ノ丸に馬二疋が駆け込む。

123 「文化雑記」五

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

同七年十月

(寛政)

一、当廿二日四半時頃、三之御丸江在馬式疋駈込候ニ付、
捕置候段、三之御丸御番人小川隼太罷出申聞候段、
当番組頭野村伊兵衛^(礼商)申聞候ニ付、寄附御横目足輕^(氏保)

寛政七年

指出為致見分候所、石川御門下番ニ而様子承合候所、
新坂柵御門々駈込、石川御門通り三之御丸江入候ニ
付、右御番人橋爪御門辺ニ而捕繫置候、男馬一疋・
女馬一疋之由申聞候、依而伊兵衛申談及言上、御城
代江も御達申候、然所右馬割場江牽渡候様被仰渡候
旨為承知、御城代被仰聞候ニ付、猶更指出候儀、八
時頃石川御門々牽出、於割場詮義有之候処、男馬石
川郡村井村次郎右衛門、女馬河北郡野村寛右衛門馬
之由、依而右両所之十村下役之者并馬主、割場江罷
出候ニ付、御用番々被仰渡口上書取立候上、馬主江
相渡、夫々相済候旨申聞候、

一一月

金谷御殿表向の修復あり。

124 「寛政文化間日記」寛政七年十一月二四日条

越能文庫蔵

金沢市立玉川図書館加

○金谷御表向御修覆ニ付、御城代御間受取、

一二月二一日

四五

加賀藩、「金谷御殿」を「金谷御屋敷」と改称する。

125 「横山氏日記」寛政七年二月一日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、左之通御城代方々演述有之候事、

金谷 御殿、最前之通、御屋敷与唱可申旨被仰出候事、

126 「政隣記（耳目甄録）」一八 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 拾八』（孝友）

十一日 左之通、於御横目所 御城代前田大炊殿被仰

聞候段、申談有之、

金谷 御殿之義、是以後金谷御屋敷与唱候様被仰出、

127 「寛政文化間日記」寛政八年正月一日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

金谷御屋敷ト唱ルコト、

一二月二六日

前田齊広（亀万千）、金谷屋敷へ移住する。

128 「横山氏日記」寛政七年二月二六日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

『金沢市史』資料編三

一、亀万千殿、今日、金谷 御殿へ

御引移被成候事、

右ニ付、各布上下ニ改、於表方席年寄中・御家老中・若年寄一集ニ、以三郎兵衛

相公様へ御祝詞申上、且退出る直ニ金谷へ罷出、亀万千殿へも右御祝詞申上候事、

129 「筆のまに」寛政七年二月二六日条 金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

廿六日

一、亀万千殿、今日金谷御屋敷御表へ御引移ニ付、各桐

之御間ニ而、相公様へ恐悦申上退出、直金谷へ罷出、

恐悦申上候処、御逢被成、御意有之、但、何へも帯刀

と御意、御敷居之内御同間へ扣候へとも帯刀之候也、

但、服ハ尤上下也、且又右帯刀ニ而罷出候儀、先例覚之人無之、今日俄ニ示談之上右之通也、

130 「寛政文化間日記」寛政七年二月二六日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

（前田齊広）
亀万千殿金谷御表工御引移、恐悦、

131 「諸事被仰出日記」寛政七年二月二六日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、今日（前田齊広）龜万千殿、金谷御殿御表御居間江御引移被遊候事、

＊この年力

加賀藩の穴生、前田齊敬のために、狸々山から青石を切り出すという。

132 「戸室山初年号等留帳」

金沢市立玉川図書館後藤文庫蔵 『戸室石切丁場確認調査報告書』I

寛政年中

（前田齊敬）
観樹院様御用立故、水丁場ノ向、狸々山之根ヲ掘仕、石切立申候、

寛政八年（一七九六）

四月六日

前田治脩、金沢を發ち、同月一日、江戸に到着する。次いで五月一日、江戸城に登り、参勤の挨拶をする。

133 「横山氏日記」寛政八年四月六日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、今日、御発駕御供揃五時、年寄中・御家老中・若年寄、六半時（中略）段々登城之事、

（中略）

一、御供図書・帶刀、六半時過、旅装束ニ而登城、五

時過、檜垣之間二之間ニおゐて兩人一集ニ以加藤次郎（武里）左衛門相窺御機嫌候事、

一、五半時過、年寄中一切、三郎一切、御家老中・若年

寄一切、南郊一切、以折出助（金谷原曹）御居間書院へ被為

召、御意有之、御請申上退去、

但、御供図書・帶刀ハ不被召事、

一、四時過、益御機嫌克御発駕、年寄中者御式台

内（左ノ方）被罷出、御家老中・若年寄ハ御式台内（右ノ方）裏

御式台ヲ後ニシテ罷出有之候处、御意有之、御先

立大学相勤候事、

一、龜万千殿、御玄関迄御見送り御出被遊候事、

一、御供図書・帶刀、御発駕之節、柳之間上ノ間御襖之内ニ扣罷在候处、御意有之、

一、南郊腰痛ニ付、御玄関江不罷出、朔望之通檜垣之間御縁類ニ扣罷在候处、御意有之、

134 「筆のまにく」寛政八年四月六日条

金沢市立玉川図書館
奥村文庫蔵

六日

一、今日巳中刻過、益御機嫌好金沢

御発駕、御供前田〔貞〕図書・大章〔原統〕帝刀

135 「筆のまにく」寛政八年四月一八日条

金沢市立玉川図書館
奥村文庫蔵

十八日

一、今日江戸 御着、

136 「横山氏日記」寛政八年四月二六日条

金沢市立玉川図書館
加越能文庫蔵

一、御道中益御機嫌能、去十八日、御着府被遊候旨、

同日発足中飛脚、夜前到着いたし候事、

137 「江戸幕府日記」寛政八年五月朔日条

国立公文書館内閣文庫蔵

御座間

参勤

御太刀一腰
銀五十枚
巻物二十

〔前田治脩〕
松平加賀守

〔中略〕

一、今四江五分前、御白書院江 出御、

〔中略〕

松平加賀守家来

纏二十筋
銀馬代

〔貞〕
前田図書

同

138 「筆のまにく」寛政八年五月朔日条

〔原統〕
大音〔刀〕
金沢市立玉川図書館
奥村文庫蔵

朔日

一、御道中々御足輕御痛三而、御老中方御廻勤御延引、

其後御受御廻勤有之、今日、御参勤之御礼被 仰

上、

139 「横山氏日記」寛政八年五月一〇日条

金沢市立玉川図書館
加越能文庫蔵

一、前月十八日、御着府之处、御脚痛被遊、御老中方

御廻勤御延引之处、御快、同廿八日、御廻勤、同

廿九日、上使太田備中守殿を以御参勤二付、被為

蒙 上意、翌晦日、御老中御連名之御奉書到来、当

朔日、御登 城、御参勤之御礼被 仰上候御様子、

年寄中等江御書、同日発足町飛脚中飛脚步二、一昨

日到来二付、今日各不時出席、例之通常服二而、右

表方於席拜戴之事、

但、若老中も月番座へ被招拜戴有之候事、

140 「諸事被仰出日記」寛政八年五月条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、前月廿七日、御気色御快、御着之御案内御廻勤、御

老中方江御勤被成候所、同廿九日、上使御老中太田

(寶愛)
撰津守殿を以、被蒙 上意、為御礼当朔日、御参府
御礼御登城、於御座之間 御礼被 仰上、御懇之
上意、其上御家来前田^(貞)・大音^(厚統)帶刀御目見被 仰
付候旨申来、

141「政隣記(耳目甄録)」一九

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 拾九』

(四月) 六日 御見立揃刻限六半時、御発駕御供揃五時二而四

時過、御発駕、今夜今石動 御泊、但、前々之通、
改方小頭以上布上下着用、役所へ罷出之事、

附、御日図之通、十八日江戸 御着、此段五月十

五日互見、

(中略)

(五月) 十五日 (中略)

前月十八日、御機嫌能 御着、同廿九日、上使太

田^(寶愛)備中守殿を以、被為蒙 上意、当朔日、御登城、

於御座之間御礼被 仰上、殊ニ 御手自御熨斗鮑

御頂戴、前田^(貞)・大音^(厚統)帶刀 御目見被 仰付、重

疊難有御仕合ニ 思召候由、以 御書被 仰下候事、

前田齊広(亀万千)、金沢を發ち、十一月二
日、江戸に到着する。

142「横山氏日記」寛政八年一〇月二五日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、明日、

(前田齊広)

亀万千殿御發途ニ付、今日、年寄中・御家老中・若

年寄中、各退出^{金谷御屋敷江罷出}、御機

嫌相伺候、年寄中一切、御家老中・若年寄中一切、

成瀬^(種徳)監物を以 御前江被為 召、御意有之、座上

へ御請申上退去、
(大音厚連) 但、南郊義、腰痛致難義候付、以紙面申上候事、

一筆致啓達候、

亀万千殿益御安泰、明廿六日、御發途被成、目出

度御儀、恐悦之至奉存候、尚更伺御機嫌旁如此御座

候、御序之刻、可然様御執成所仰候、恐惶謹言、

大音南郊

十月廿五日

一判

閨屋中務様

高田新左衛門様

青木与右衛門様

一〇月二六日

寛政八年

四九

井上勘右衛門様 （喜親） 人々御中

143 「筆のまにく」寛政八年一〇月二六日条 金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

廿六日

一、（前田齊広） 亀万千殿、今日八時頃、御発駕、津幡御泊、

144 「諸事被仰出日記」寛政八年一〇月二六日条 金沢市立玉川図書館蔵

一、今日昼四半過之御供揃ニ而、八時前、（前田齊広） 亀万千殿御

機嫌克御発駕被遊、津幡御泊ニ来月十一日御着之御

図り、

145 「横山氏日記」寛政八年一月一八日条 金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

一、（前田齊広） 亀万千殿牟礼御着之日荒強、暁天御着、御供人追々

着、

亀万千殿ニ茂少々御難義被成ニ付、同所ニ一日御逗

留、去十一日、江戸御着之由、同日之早飛脚、今日

表方へ到来之事、

146 「筆のまにく」寛政八年二月二三日条 金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

廿二日

一、（前田齊広） 亀万千様、十一日江戸 御着之段申来、且以後様と

唱候様被 仰出之趣も申来、

147 「政隣記（耳目甄録）」一九 金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

廿六日 （二〇月） 四半時不遲御供揃ニ而九半時頃、

（前田齊広） 亀万千殿御発駕、今夜津幡駅 御泊、来月十日、江

戸表江御着之御日図、

一月二一日

加賀藩、江戸藩邸（本郷邸）の前田齊広（亀万千）居所を「北之御居宅」と称する。

148 「横山氏日記」寛政八年一月二二日条 金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

一、（前田齊広） 亀万千殿御儀、向後様付ニ唱候様、去朔日、被 仰

出候由、且又御同所様御儀、御出府之上、松平之御

称号并御乗物御乗用之儀、御用番江御書付被指出候

処、前月廿九日、御先格之通与被 仰出候、且御鑑

二本為御持之義も、御願被成候処、是又御願之通、

同日被 仰出候旨、朔日被 仰出候由、（前田齊広） 図書等々

表方江申来候事、

新御居宅、是以後、北之御居宅与相唱候様被 仰出

由、今十一日之紙面ニ図書等々表方江申来候事、

149 「寛政文化間日記」寛政八年一月二二日条 金沢市立玉川図書館蔵

(前田齊広)
亀万千殿御義、様ト称シ、松平御称号、且北ノ御屋

敷ト唱段申来、

150 「三守御譜」三 金沢市立玉川図書館加越能文庫藏
(寛政八年二月)

此月 新御居宅是以後北之御居宅ト相唱候様被仰出、
(前田齊広)
亀万千様御住居所也、

一二月二四日

幕府、前田治脩に齊広(亀万千)を養子とする

ことを許可する。

151 「筆のまにく」寛政八年二月二五日条 金沢市立玉川図書館奥村文庫藏

一、去ル十四日、御登 城被成候様、御老中方御連名
之依 御奉書、同日御登 城被成候之処、

(前田齊広)
亀万千様御儀、御養子・御嫡子御願之通被 仰出候

旨、松平伊豆守御演述之由、同日中飛脚、使前田

(貞)
図書等申越、今日到着、御書も到来、

152 「横山氏日記」寛政八年二月二六日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫藏

一、当月十三日、御老中方御連名之依御奉書、翌十四日、

御登城被成候処、於御白書院御縁類ニ御老中方御

寛政八年

列座、

(前田齊広)
亀万千殿御儀、御養子ニ被成、御嫡子被成度段、

御願之通被 仰出候旨、御用番松平伊豆守殿御演

述被成、難有被 思召旨等、被成下 御書、昨夕

到来ニ付、今日年寄中等不時登城之上、服上下ニ改、

右 御書於表方席各拜戴いたし、四半時退出之事、

前々御使者ニて茂被成下候得共、当時御省略中ニ

付、其御儀無御座旨被 仰出候事、

153 「諸事被仰出日記」寛政八年二月二八日条 金沢市立玉川図書館加

越能文庫藏

一、今日、諸頭登城、左之通御弘為御祝儀惣廻り

当月十三日、御老中方御連名之依御奉書、翌十四

日、御登城被成候所、於御白書院御縁類御老中御列

座、(前田齊広)
亀万千様御儀、御養子ニ被成度旨、御用番松平

(信明)
伊豆守殿御演述被成、難有御仕合被 思召候、此段

可申聞旨、拙者共迄以御書被仰下候事、

十一月

付札御横目江
亀万千様御儀、是以後者御振合前々

御嫡子様之通ニ候条、此段一統可被申談候事、

十一月

十一月二九日

幕府、前田齊広（亀万千）と徳川宗睦（尾張藩主）の養女琴姫との縁組を許可する。

154「筆のまにく」寛政八年二月七日条 金沢市立玉川図書 館奥村文庫蔵

七日

一、亀万千様御儀、尾張様御息女 （前田齊広）（徳川宗睦）

琴姫様与御縁組之儀、前月廿三日御願書被指出候処、同廿九日、御願之通被 仰出候段、同日之急便、今日到来申来、

155「諸事被仰出日記」寛政八年二月一日条 金沢市立玉川図書 館加越能文庫蔵

一、今日、亀万千様御縁組御弘、頭分以上登 城、為御祝儀、惣廻り、

亀万千様御縁組之儀、尾張大納言様 （徳川宗睦）

御養女様与被 仰合度旨、御願被遊候所、前月廿九日、御登 城可被成旨、前日、御老中方御連名之依御奉書、御名代飛驒守様御登 城被成候所、

於御白書院御縁類、御老中御列座御願之通被 仰出、難有御仕合被 思召候、此段可申聞旨被 仰出候事、

十二月十一日

156「政隣記（耳目甄録）」一九 金沢市立玉川図書 館加越能文庫蔵 『政隣記 耳目甄録 拾九』

十一日 （二月） 朝五時過、布上下着用登 城候様、御用番九郎左衛門殿（長連愛）一昨日依御廻文、人持・頭分登 城、御帳ニ附、四時過、柳之御間列居之处、御年寄衆等

御列座、左之通九郎左衛門殿御演述、
亀万千様御縁組之義、尾張大納言様 御養女与
被 仰合度旨、御願被遊候处、前月廿九日御登

城可被成旨、前日御老中方御連名之依 御奉書、
御名代飛驒守様御登城被成候处、於御白書院御縁類
御老中方御列座、御願之通被 仰出、難有御仕合
被 思召候、此段可申聞旨被 仰出候事、

【解説】『金沢城総合年表』後編では、琴姫の養父を『加賀藩史料』編外備考の表記に従って「徳川実陸」としたが、右の通り「宗睦」と訂正する。

一二月三日

前田齊広（亀万千）、勝丸さらに犬千代丸と名を改め、さらに翌日、又左衛門利厚と改称する。

157「筆のまにく」寛政八年二月二三日条

金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

十三日

一、（前田齊広）亀万千様御儀、御吉例ニ付、当三日朝、

勝丸様と御改、重而 御代々之御名ニ付、同日、

犬千代丸様と被称、暨同日、

又左衛門様と御改、御実名

利厚アツ様与被進候段、四日之急便ニ伝附申来、此儀十

五日ニ出仕之面々へ申聞、且

御実名文字唱同事之分も改候様、御用番々触出有之、

右之御祝詞夫々申上、二御丸御広式へハ十五日退

出、直ニ各罷出申上、

158「横山氏日記」寛政八年二月一五日程

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

今般

（前田齊広）亀万千様御名御改ニ付、今日各御広式江罷出、正姫

様江右御祝詞申上候、御自分様ニも御出御申上可被

寛政八年

成候、此段拙者共々可申進旨、月番年寄中々演述ニ付、如此御座候、以上、

十二月十五日

（大音厚曹）
南郊様

（今枝易直）
内記

追而若御当病ニ而御出難被成候ハ、以御紙面御申上可被成候、以上、

一筆致啓上候、

亀万千様御名、当三日、

勝丸様と御改、重而 御代々之御名ニ付、同日、犬

千代丸様と御改、翌四日、

又左衛門様と御改、同日、前田信濃守殿御同道ニ而

松平伊豆守殿・戸田采女正殿江被為人候段、承知仕、

恐悦之至奉存候、右御祝詞申上度如斯御座候、御序

之刻、可然様御執成所仰御座候、恐惶謹言、

十二月十五日

（西尾）
隼人

明義

（不破）
彦三

為章

（横山）
藏人

五三

政寛

修理(津田)

政本

頼母(本多)

政均

内記(今枝)

易直

被申談候事、

但、今日登 城無之面々江者、向寄分相達可申候、

付札定番頭江

又左衛門様 御名乗字 利厚様トシアツ与奉称候、御家中之

人々実名御名乗字同字有之候ハ相改可申候、文字違

候而も唱同事ニ候ハ唱替可申候事、

辰十二月

右、同組筆頭前田兵部(純孝)分如例定番頭分廻状到来之旨

ニ而被相廻候事、

〔前田貞〕
圖書様

〔大音厚統〕
帶刀様 人々御中

159「政隣記〔耳目甄録〕」一九

〔二月〕
十五日 月次出仕、四時過御年寄衆等謁之節、左之通御

用番九郎(長連愛)左衛門殿御演述、

〔前田齊広〕
龜万千様 御名、当月三日、

勝丸様与 御改、重而 御代々之御名ニ付、同日、

犬千代丸様与 御改、翌朝、

又左衛門様与 御改被遊候、此段何茂へ申聞候様

被 仰出候、且又 御実名、

利厚様与奉称旨、前田圖書等分申来候、

右之趣、同役中伝達、組支配之人々へも相達候様可

一二月一五日

前田治脩、前田齊広(利厚)を同道して江戸城
に登り、徳川家斉と対面する。

160「江戸幕府日記」寛政八年一二月一五日程 国立公文書館
内閣文庫蔵

一、今已后刻、御白書院 出御、月並御礼四品以下一同

被為 請、

初而 御目見

加賀守養子

御太刀一腰
銀三十枚

〔前田齊広〕
松平又左衛門

卷物十
御馬一疋

養子 御目見之御礼

卷物二十

(前田治修)
松平加賀守

161「筆のまにく」寛政八年二月二八日条

金沢市立玉川図書館
奥村文庫蔵

廿八日

一、当十五日

(前田齊広)

又左衛門様、初而御目見被 仰上候趣、以御書被仰

下、同日之中飛脚、今日到着、各於 御城着服上下

ニ改之拜戴之、

162「横山氏日記」寛政八年二月二八日条

金沢市立玉川図書館
越能文庫蔵

一筆致啓上候、

(前田齊広)

又左衛門様、去十五日、御目見御首尾能被 仰上、

段々結構成御様子、重畳目出度御儀、恐悦之至奉存候、

右御祝詞申上度如斯御座候、御序之刻可然様御執成所仰

御座候、恐惶謹言、

十二月廿九日

西尾隼人

明義

不破彦三

為章

横山藏人

政寛

津田修理

政本

本多頼母

政均

今枝内記

易直

前田(貞二)図書様

(厚經)

大音帶刀様 人々御中

163「諸事被仰出日記」寛政八年二月二九日条

金沢市立玉川図書館
加

越能文庫蔵

一、今日、頭分以上登城、御弘左之通、

(前田齊広)

又左衛門様 御目見之儀、御願置被成候所、去十

五日、御同道 御登城可被成旨、前日御老中方御

連名之御奉書就到來、則 御登城被成候所、於御

白書院 御目見被 仰上、

(前田治修)

相公様ニ茂御礼被 仰上、重而

御両殿様御一所被為召、御着座被為 仰付、御

懇之被為蒙 上意、重畳忝御仕合被 思召候旨、拙者共迄以

御書被 仰下候、右之趣、可申聞旨被 仰出候事、

十二月廿九日

寛政九年（一七九七）

正月二八日

164 「政隣記（耳目甄録）」一九 〔金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵〕
〔政隣記 耳目甄録 拾九〕
 廿九日 御用番九郎左衛門殿今夜前依御廻文、今朝五時

登 城、如例御帳ニ付候処、四時過御年寄衆等被謁、
 歳末御祝詞申上、畢而頭分以上列居之处、重而御年
 寄衆等御出御列座、御用番九郎左衛門殿左之通御演
 述、

〔前田齊広〕
 又左衛門様 御目見之義、御願置被成候処、去十

五日、御同道御登 城可被成旨、前日御老中方御
 連名之 御奉書就到来、則御登 城被成候処、於御
 白書院 御目見被 仰上、

〔前田治脩〕
 相公様ニも御礼被 仰上、重而

〔前田治脩 齊広〕
 御両殿様御一所ニ被為召、御着座被為 仰付、御
 懇之被為蒙 上意、重畳忝御仕合被 思召候旨、拙
 者共迄以 御書被仰下候、右之趣可申聞候旨被 仰
 出候事、

加賀藩、「金谷御屋敷」を「金谷御殿」と改称
 する。

165 「横山氏日記」寛政九年正月条 〔金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵〕

左之通 御城方為承知被指越候事、

金谷御屋敷、是以後御殿与可申旨被 仰出候事、

丁巳正月廿八日

166 「寛政文化間日記」寛政九年正月一八日条 〔金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵〕

此比ヨリ金谷御殿卜唱候事、

167 「諸事被仰出日記」寛政九年正月二八日条 〔金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵〕

文庫蔵

一、金谷御屋敷之義、是以後 御殿与唱候様被 仰出旨、

今日御横目中□□江演述、一統触出ル、

168 「政隣記（耳目甄録）」一九 〔金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵〕
〔政隣記 耳目甄録 拾九〕

〔正月〕
 晦日 左之通於御横目所披見申談有之、

是以後、金谷 御殿与相唱可申候事、

正月

二月九日

前田治脩、前田齐広（利厚）を同道して江戸城に登り、徳川家齐と対面する。齐広（利厚）、正四位下左近衛権少将・筑前守に叙任され、齐広と改める。

169 「江戸幕府日記」寛政九年二月九日条

国立公文書館内閣文庫蔵

一、今已下刻、御黒書院江 出御、

（前田齐広）
松平又左衛門

筑前守卜改

右、就元服被 仰付出座、於御縁類

御目見、

御一字被下、被任叙正四位下少将、

松平筑前守

御太刀一腰
黄金五枚

卷物十

御馬一疋

裸背
鹿毛

御刀 備後国正興

御刀 代金十五枚

右之通献上之、於御縁類御礼申上之、御盃頂戴、御

刀 青江守次
代金二十枚 拝領之、

寛政八年〜寛政九年

養子元服之御礼

銀二十枚
綿三十把

（前田治脩）
松平加賀守

170 「横山氏日記」寛政九年二月一八日条

金沢市立玉川図書館
加越能文庫蔵

一、又左衛門様御儀、去九日、御元服可被 仰付候条、

御同道 御登 城被成候様、前日御老中方御連名之御奉書到来、則御登 城被成候処、於御黒書院 御目見被 仰上、

御元服被 仰付、御一字御頂戴、被任

正四位下少将候由、御老中御演述、其後、御盃・

御肴御頂戴、御腰物御拝領、御懇之被為蒙 上

意、御名をも 筑前守様与御改被成候、

相公様（前田治脩）も御礼被 仰上、御懇之被為蒙 上意候

旨、夜前図書等々表方江申来、右ニ付、御書被成

下、今日各不時登 城、服上下ニ改、拝戴いたし候、

171 「筆のまに〜」寛政九年二月一九日条

金沢市立玉川図書館
館奥村文庫蔵

十九日

一、九日ニ

相公様（前田治脩）

又左衛門様御登 城、又左衛門様御儀、御元服、御

官位被 仰出、御名

筑前守様与御改、御一字御頂戴、

齊広様ナカと奉称旨等、十日之急便ニ申来、御書も到

来、今日、御弘有之ニ付、各のしめ上下にて登城、

退出、直ニ御丸御広式へ罷出、御用番宅へ廻□ニ致

参上候事、

172 「横山氏日記」寛政九年二月条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

定番頭江

筑前守様御名乗、御一字御頂戴、

齊広様ナカ与奉称候、御家中之人々実名同字有之候ハ、

相改可申候、文字ハ違候而茂唱同事ニ候者、唱替可申

事、

巳二月

173 「諸事被仰出日記」寛政九年二月一九日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

文庫蔵

一、今日、左之通御弘、頭分熨斗目着用登城、為御祝

儀惣廻り、熨斗目布上下着用也、

又左衛門様御儀、御元服可被 仰付候条、当九日、

御両殿様 御登 城被成候様、前日御老中方御連

名之御奉書到来、則 御登 城被遊候所、又左衛

門様御儀、於御黒書院 御目見、御一字御拝領、

被為任正四位下少将、御盃・御肴 御頂戴、御

腰物 御拝領、御懇之被為蒙 上意、

相公様前田治範ニ茂 御礼被 仰上、被為蒙 上意、重□愚

難有御仕合被 思召候、此段何茂江可申聞旨、□以

御書被 仰下候事、

御名筑前守様 御実名

齊広様ナリナカ与被称候事、

二月十九日

174 「政隣記（耳目甄録）」一九

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
「政隣記 耳目甄録 拾九」

十九日 御用番九郎左衛門殿（長連愛） 御意之趣可申述候条、

熨斗目布上下着用、今日五時過登 城候様、昨日御

廻状就到来、則頭分以上登 城、如例御帳ニ附、四

時過、柳之御間列居、御年寄中等御列座、左之通

御用番御演述、畢而左之御覚書於横廊下披見退出、

自分如例御用番御宅迄へ相勤候事、

又左衛門様御元服可被 仰付候条、当九日、

御両殿様御登 城被成候様、前日御老中方御連名之

御奉書到来、則御登 城被遊候処、

又左衛門様御儀、於御黒書院 御目見、御一字御拝領、被為任正四位下少将、御盃・御肴御頂戴、御

腰物御拝領、御懇之被為蒙 上意、

相公様前田浩徳ニも御礼被 仰上、御懇之被為蒙 上意、重

畳難有御仕合ニ被思召候、此段何茂へ可申聞旨以

御書被 仰下候事、

御名 筑前守様、御実名 齊ナリナガ広様与被称候事、

三月四日

加賀藩、金沢城橋爪門「外橋」修復のため、

この日以降、同所の往來を禁止する。次いで

同月二二日以前、同「外橋」の修復が完了す

る。加賀藩、この日以降、同所の往來を許可

する。

175 「村井長世日記」寛政九年二月二七日条

金沢市立玉川図書館
館加越能文庫蔵

御城方覚書

○橋爪御門外橋御修覆有之候ニ付、来月四日迄往來指留候間、二之 御丸江罷出候人々、鶴之丸通埋 御門迄

往來之筈ニ候条、此段不相洩様夫々可被申談候、

但、三之 御丸御番所左右入口迄供之人数、二

之 御丸之通召連可申事、

〔朱書此紙面之通、同廿八日、從御用番承知として到来

ニ付、家来江申聞置候事、尤組江ハふれ申ニ不及、

自分迄也、依之供方人々江承知ニ申聞置候様ニ申

談遣ス事〕

176 「横山氏日記」寛政九年二月条

金沢市立玉川図書館館加越能文庫
蔵

橋爪御門外橋御修覆有之候付、来月四日迄往來指留

候間、二之御丸江罷出候人々、鶴之丸通埋御門迄往來

之筈ニ候条、此段不相洩様夫々可被申談候事、

但シ、三之御丸御番所左右入口迄供之人数、二之御

丸之通召連可申事、

二月廿五日

右之通、御横目江申渡候事、

177 「寛政文化間日記」寛政九年三月四日条

金沢市立玉川図書館
館加越能文庫蔵

〔朱書〕
御丸往來、橋爪橋懸直ニ付、

178 「横山氏日記」寛政九年三月条

金沢市立玉川図書館館加越能文
庫蔵

付札、御横目江

橋爪御門外橋御修覆出来ニ付、当廿二日右御門往来之筈候条、此段不相洩様、夫々可被申談候事、

三月十七日

179「寛政文化間日記」寛政九年三月二日条

文庫蔵

金沢市立玉川図書館加越能

橋出来ニ付、橋詰往来、

180「政隣記（耳目甄録）」一九

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
「政隣記 耳目甄録 拾九」
安村

廿五日 左之趣、同役筆頭小川八郎右衛門・同組筆頭前

田兵部（純孝）も廻状有之、

付札御横目江

△ 橋爪御門外橋御修覆有之候ニ付、来月四日往來指留候間、二 御丸へ罷出候人々、鶴丸通埋御門へ往

来之筈候条、此段不相洩様夫々可被申談候事、

但、三御丸御番所左右入口へ供之人数、二御丸之迄

召連可申候事、

二月廿五日

右御修覆出来、三月廿二日橋爪御門往来相立候段、

御城代大炊殿被仰聞旨、同月十七日廻状右同断有之、

三月二日

前田治脩、帰国を許可され、四月一日、江戸城に登る。次いで同月四日、江戸を發し、同月一五日、金沢城に到着する。

181「江戸幕府日記」寛政九年三月二日条

国立公文書館内閣文庫蔵

上使安藤对馬守（信成）

大納言様（徳川家康）

同 水野出羽守（忠友）

御台様（広大院）

御使中島三左衛門（行敬）

松平加賀守（前田治脩）

銀百枚
卷物三十
大納言様
卷物二十
御台様
卷物五

右、御暇被 仰出候付被遣之、

182「諸事被仰出日記」寛政九年三月条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、当廿一日、御暇之上使御老中安藤对馬守殿を以被進、

宰相様御不例ニ付、御名代筑前守様ニ而万端御首

尾克被為済、御相伴筑前守様、西御丸へ水野出羽守

殿、御台様へ御使御広式御番頭中島三左衛門殿、

イニ西ノ丸水野出羽守殿方、

183「江戸幕府日記」寛政九年四月朔日条

国立公文書館内閣文庫蔵

御座間

御暇

御鷹被下
御馬被下

(前田治脩)
松平加賀守

一、今已后刻、御白書院 出御、

(中略)

松平加賀守家来

卷物五

(貞統)
前田図書

同

(厚統)
大音帯刀

184「諸事被仰出日記」寛政九年四月条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、朔日、御暇之御札御登城被為濟、万端如御例、

185「筆のまにく」寛政九年四月五日条

金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

五日

一、前月廿一日、御暇之上使有之、廿三日、御札として

可御登 城之筈之处、御疝邪にて御断之旨、廿四日

出ニ図書等之之状、今日到来、

186「横山氏日記」寛政九年四月五日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、前月廿一日、上使安藤对馬守殿を以、御国許江之

御暇被進、白銀・御卷物御拝領、從

大納言様之茂水野出羽守殿を以 上意、御卷物御拝

領、御台様之も中島三左衛門殿を以御卷物御拝受

被成候、

御前御疝邪氣ニ被為在候付、御名代

筑前守様御出、且又同廿三日、御暇之御札被 仰上

候様、前日御老中御連名之御奉書到来之处、御疝邪

氣ニ付、御断被成候、追而御札被 仰上候節、委細

可申越旨、同廿四日出ニ図書等之今日表方へ申来、

187「横山氏日記」寛政九年四月一〇日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、御帰国御暇被 仰出、当朔日、御札被仰上候義ニ付、

八日ニ御書、表方江到来、昨日ハ御日柄之故、今日

各不時登 城、致拝戴候事、但、前々之通、常服之

俣拝戴之事、

188「筆のまにく」寛政九年四月一五日条

金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

十五日

一、右御札、当朔日被 仰上、四日申上刻、江戸 御発

駕、十六日、津幡之御着 城之筈之处、十四日御泊、

高岡之直三十五日、御着 城之儀、糸魚川ニ而被

仰出、今十五日申下刻、御着 城、

189「横山氏日記」寛政九年四月一五日条 金沢市立玉川図書館
加越能文庫蔵

一、今日七時過、益御機嫌能 御着城之事、

190「横山氏日記」寛政九年四月一五日条 金沢市立玉川図書館
加越能文庫蔵

一、今日

御着城ニ付、年寄中・御家老中・若年寄、四時頃迄

二段々登 城、

但、諸役人揃、五半時之事、

一、例月之出仕無之事、

一、天音厚曹南郊義、腰痛ニ而登 城無之、

一、七時過、浅野川橋江被為 入候、附人来り候ニ付、

御城代并御家老中・若年寄、御式台江罷出居候処、

七ツ時過ニ益御機嫌克御着被遊候、御供（前田貞）圖書、

但シ、当四日、江戸表 御発駕、同十一日、糸

魚川駅 御止宿、十六日、御着城之筈ニ候処、津

幡 御泊被指止、十四日、高岡御泊合直ニ 御着

城被遊候事、

191「諸事被仰出日記」寛政九年四月一五日条 金沢市立玉川
図書館加越能

文庫蔵

一、夜前、高岡御泊ニ而、十四日夜九時之御供揃ニ而、

高岡 御発駕、今十五日七時過、御機嫌克 御帰

城、御礼使人持富田権佐、七半時過、発足、如先規

拝領被 仰付候事、

192「政隣記（耳目甄録）」一九 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
「政隣記 耳目甄録 拾九」

十二月（中略）

前月廿一日、以上使安藤（信成）对馬守殿、御国許へ之御暇

被 仰出、白銀・御卷物御拝領、從

大納言様も水野出羽守殿を以、御卷物御拝領、将又

從

御台様中島三（行敬）左衛門殿を以、御卷物御拝受、去朔

日、右為御礼 御登城被成候処、於 御座之間 御

目見、御懇之 上意、殊ニ 御手自御熨斗鮑御頂戴、

御鷹・御馬御拝領、且又前田（貞）圖書・大音（厚統）帶刀 御前

江被 召出、其上御卷物頂戴之、重畳難有被 思召

候旨、拙者共江以 御 書被仰下候事、

四月

（中略）

十五日 夕七時過、御機嫌克 御帰城、御作法前々之

通、且為御礼、江戸表江之御使人持組富田権佐^(景周)発出、

拝領物三ヶ年以前迄之通、御羽織一・御巻物二、於

御年寄衆席御大小将披露ニ而被下之、

五月二四日

金沢城内の時鐘を修復のため、鶴ノ丸の鐘を
代用する。次いで七月二六日、時鐘の鑄造が
完了する。

193 「寛政文化間日記」寛政九年五月二四日条

文庫蔵

金沢市立玉川
図書館加越能

時鐘御修復ニ付、今日ハ鶴丸鐘用、

194 「続漸得雜記」九

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、時鐘直り候事、寛政九年七月廿六日、釣鐘之高サ六

尺八歩、口指渡三尺八寸、目形四百拾三貫目八厘、

八星之坐之上ニ村山若狭守正久ト銘有之候也、

195 「寛政文化間日記」寛政九年閏七月一五日条

金沢市立玉
川図書館加

越能文庫蔵

撞鐘所新鐘、今^(日方)□九分打、

五月

加賀藩の穴生、戸室山等での勤務に関する条
目を杖突に對して通達する。

196 「戸室山初年号等留帳」

金沢市立玉川図書館後藤文庫蔵『戸室山
切丁場確認調査報告書』I

覚

一、御石割為御用、役小者請取候条、勤方之儀ハ、下役
人指図之通可相心得事、

一、一統和順可相勤事、

一、当所掛毎晩八ツ半時、御普請会所へ相揃、六半時ヲ
限、参着之事、

一、御道具持参之儀、下役人ハ各方へ引渡候上、役小者
へ相渡、御普請会所へ持届之事、

一、御丁場之内ハくづ石、或ハ柴杪苅取申ましく事、

一、御用仕廻、毎日々役人ハ各方へ申談候事、

一、各方参着之上、案内之事、

右之外、御定之儀者、御普請会所ニ而承知ニ候得共、
当所御縮方右之通候条、可被得其意、可被申渡候事、

(寛政九年)

巳五月

奥源左衛門

後藤彦三郎

後藤平八

杖突中

戸室山々中山迄、役小者を以御石引出被仰渡、追
付取掛候、依而役小者揃方之儀、每晚八半時、御普
請会所江相揃、当所江六半時を限、参着之筈ニ候条、
途申遲候無之事、

六月六日

前田治脩、奥村尚寛（河内守）を金沢城代に任
命する。

197「筆のまにく」寛政九年六月六日条
金沢市立玉川図書館
奥村文庫蔵
六日

一、四時過、御居間書院江 御出、来月御用番九郎左
衛門誘引にて

御前へ罷出、九郎左衛門、奥村河内守と唱之、近ふ
と 御意、御敷居之内へ入、二畳目中程迄罷出候処、
其方儀、城代主付用申付候、大炊申談可相勤旨
御意ニ付、奉答候、近ふ（前田孝友） 公義御用被 仰付候処、
又候重キ御用被 仰付、重畳難有仕合奉存旨、及居

成にて御請候、九郎左衛門御取合申上□□、
節、年寄中・御家老
中・若年寄中伺公、
此被
仰渡候

198「諸事被仰出日記」寛政九年六月六日条
金沢市立玉川図書
館加越能文庫蔵

一、御城代大炊申談可相勤旨於 奥村河内守
（前田孝友）
（尚寛）

御前被仰渡

199「政隣記（耳目甄録）」一九
（六月）
六日 左之通被 仰付、
金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
「政隣記 耳目甄録 拾九」

御城方御用 公義御用

奥村河内守
（尚寛）

一〇月一二日

金沢城七十間長屋門内、次いで金谷門内へ馬
が駆け込む。

200「文化雑記」五
（寛政）
同九年十月
金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、昨十三日四半時頃、七拾間御長屋御門内江鞍置馬駈
入候ニ付、下番人々捕候所、けり手ニ合不申、金谷
御門之方江駈拔候ニ付、追掛候所、右御門ニ而指留
候様子ニ而立戻り、金谷御殿二枚開之方江駈行候ニ
付、右之所ニ而捕、七拾間御門留置候処、追付津田

治兵衛家来之由三而、若党兩人馬捕罷越、治兵衛門

前二而乗候節取放候而、是迄駈參候間相渡呉候様申

聞候二付、当番大平金太郎罷越相渡可申哉之旨申聞

候二付、則御城河内守殿江相達候所、可相渡旨御

指図有之候二付、則相渡候様申渡候段、組頭金井正

兵衛申聞候二付、右之趣同人申談及言上候、

一二月一八日

幕府、前田治脩の家臣一人に叙爵を認め、次いで本多政成（玄蕃助）、従五位下安房守に叙任される。

201「御家老方若年寄方日記之内抜書」寛政九年一二月二

五日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、八時前、御居間書院江御出於

御前左之通被 仰渡伺公、御家老方内記等七人、

若老大学・主税、

本多玄蕃助

兼而御願置被遊候諸大夫代之義、去十八日御願之通被 仰出、忝御仕合被 思召候、依之玄蕃助儀、叙

寛政九年

爵被 仰付候間、先安房守与相改候様 御意、御請申上退去之事、

一、左之通大隅守演述之事、

兼而御願置被遊候諸大夫代之義、去十八日御願之通

被 仰出、忝仕合被 思召候、依之玄蕃助義、叙爵

被 仰付候、此段可申聞旨 御意二候、

202「政隣記（耳目甄録）」一九

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 拾九』

廿八日 四時頃、歳末御祝詞之御帳二付候処、御弘之趣

有之候条、居残候様申談二付、出仕之人々何も居残

候処、九半時過、柳之御間二一統列居、御年寄衆等

御列座、御用番大炊殿左之通御演述、

諸大夫之義、兼而 御願置被遊候処、今般 御願之

通被 仰出候二付而、本多玄蕃助叙爵被 仰付、名

も安房守与為御改被成候、此段何も江可申聞旨 御

意二候、

右畢而、於横廊下左之覚書披見之義、御横目中申談、

文庫蔵

寛政一〇年（一七九八）

四月四日

前田治脩、金沢を發し、同月二二日、江戸に到着する。次いで七月七日、江戸城に登り、参勤の挨拶をする。

203 「横山氏日記」寛政一〇年四月四日条

金沢市立玉川図書館
加越能文庫蔵

一、今日、御発駕御供揃五時、各六半時々段々登城之事、

（中略）

一、四半時過、益御機嫌能御発駕、年寄中・御家老中并閑随・若老、例々之所へ罷出有之候処、御意有之、御先立主税相勤候事、

（織田家方）

204 「諸事被仰出日記」寛政一〇年四月四日条

文庫蔵

金沢市立玉川
図書館加越能

一、今日五時之御供揃二而五時、御機嫌克、四半時御発駕、石動御泊、

205 「江戸詰中覚帳」寛政一〇年四月二二日条

金沢市立玉川
図書館加越能

一、今朝、蕨駅六時不遲御供揃二而、同所御発駕、御下屋敷御立寄御着府之筈二付、御殿揃刻限、御横目江僉議之上、六時与申渡置、（澤田政本）玄蕃同刻過致出席候事、

一、四時前、戸田川御越被遊候、附人来夫々御下屋鋪江御立寄、御中屋敷之附人来候付、玄蕃義、奥ノ口御白洲江罷出、其外罷出候人々、先達而入御覽候絵図之通罷出、蹲踞仕候事、

但、玄蕃義、奥ノ口御式台々御白洲江罷出候二付、其段先々奥ノ御横目江申聞置、且又玄蕃初頭分等一刀二而罷出、

寿光院様御附之人々并割場奉行ハ兩刀二而罷出候事、

一、九半時過、御着、追分口々中ノ口御門通り被為人、（前田齊広）筑前守様奥ノ口御式台階上江御出、寿光院様附山川儀右衛門等御目見以上之人々、御厩之方江罷出候処、御左右共御意有之、玄蕃江も御意有之候時、御請申上、奥ノ口々被為人候事、

206「筆のまにく」寛政一〇年五月七日条

金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

七日

一、相公様前（前田治脩）月四日、御発駕以来、雨天かちにて所々

二而御逗留有之、同月廿二日午中刻、益御機嫌能

御着府被遊旨、同日発足之江戸中飛脚、今七日到

着、津田玄蕃等より申越、御供横山藏人、

207「江戸幕府日記」寛政一〇年七月七日条

国立公文書館内閣文庫蔵

一、松平加賀守参府後初而登城二付、別段

上意有之、尤居残御礼等者不申上、

208「江戸詰中覚帳」寛政一〇年七月七日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、今朝五時前、御出、両御丸江御登城、御老中

方御勤、肥後守様江御立寄、九半時過、御帰殿之事、

但、当春御出府後御疝邪氣等二而、久々御登

城無之、今日、初而御登城被遊候処、御懇

之被為上意候ニ付、御老中方御勤被遊候事、

209「筆のまにく」寛政一〇年七月二三日条

金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

庫蔵

一、相公様御疝邪等御快、今日、両御丸へ御登城、

御下り之節、御老中方御勤、御帰館以後、御表へ

御出之節、拙者共於御居間書院

御前三被為召、御疝邪等御快、御参府後、今日初

而御登城被成候処、就右御懇之被為蒙

上意、難有被思召候由、御意二候、右之趣、各

へも可申遣旨被仰出候旨、且右之趣、此表頭分

以上之人々江も不急度可申聞旨被仰出候半と申聞、

夫々演述有之候様申談候由、将又明和五年六月朔日、

泰雲院様御病後御登城、被為蒙上意ノ節ハ、於

其表も出仕之面々江被仰聞由二候、就夫前田修理

江者於此表申聞相済候由、七月七日之日付、津田

玄蕃・横山藏人（政寛）以紙面申越、今日到来、

210「諸事被仰出日記」寛政一〇年七月条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、当七日、相公様御参勤以後初而御登城被遊旨申

来、

211「政隣記（耳目甄録）」一九

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
「政隣記 耳目甄録 拾九」

四月

四日 四時頃、御機嫌克御発駕、其節ハ至而微

雨、御供御家老横山藏人・御近習御用人持組石野

主殿助・組頭並勝尾半左衛門等、御筒支配生駒

伝七郎（寛氏）「御近習御持頭」・御弓支配菊池九右衛門（貞行）「物

頭並聞番」・御長柄支配御大小將篠原（篤行）与四郎・御道中奉行兼御行列奉行御小將頭野村伊兵衛（礼喬）・御歩頭兼御用人岡田助右衛門（之龍）・御歩頭中川平膳（忠好）「御道中御近習騎馬」・御大小將御番頭仙石兵馬（久持）「同上」・御大小將横目水原五左衛門（景福）・大脇六郎左衛門（直賢）、

（中略）

（五月）

十五日 月次出仕、四時前年寄衆謁、其節左之通御用番安房守殿左之通御演述、座上より恐悦申述退出、

（本多政行）
（前田治修）

相公様前月廿二日、御着府之処、同廿五日、上使

（氏教）
（正）

戸田采女守殿「附御老中」を以、御懇之被為蒙 上

意、同廿八日 御參勤之御礼可被 仰上旨等、前

日 御奉書之処、御口中御痛ニ付、以御使者御献上

物相済候、此段為承知申達候、

（政本）

附記、御家老津田玄蕃・横山藏人、献上物ハ兩御

丸江持参、御納戸江相納与云々、

（中略）

（月朔日）

同日 月次出仕、四時前御年寄衆等謁、左之通御用番御

演述、座上恐悦申上相済、

相公様御疋邪等御快被成御座、前月七日、御参府

後初而御登 城被遊候処、就右ニ御懇之被為蒙 上
意、難有被 思召候旨、拙者共迄被 仰下候事、

五月二日

前田齊広、帰国を許可される。同月一五日、
江戸城に登る。次いで同月一九日、江戸を發
ち、六月一日、金沢城に到着する。

212 「江戸幕府日記」寛政一〇年五月二一日条

上使本多彈正大卿（忠卿）

（前田治修）
加賀守養子

初而 松平筑前守（前田齊広）

卷物二十

右、御暇被 仰出候付被遣之、

213 「江戸詰中覚帳」寛政一〇年五月二一日条

文庫蔵

金沢市立三川
図書館加越能

一、筑前守様江今日御暇之上使、

（前田齊広）

兩御丸、御台様（広大院）にも有

之事、

214 「江戸幕府日記」寛政一〇年五月一五日程

国立公文書館
内閣文庫蔵

一、今四江式寸五分前、御白書院

出御、

御暇

御鷹被下
御馬

初而松平筑前守

養子御暇之御礼

煩 松平加賀守

215「江戸詰中覚帳」寛政一〇年五月一五日条

金沢市立玉川
図書館加越能

文庫蔵

筑前守様昨日御老中方御連名之依御奉書、御登

城、御暇之御礼被 仰上、

一、筑前守様今日御礼被 仰上候御様子、御前江被

召可被仰聞処、御疝邪ニ付、其御義不被為在由ニ

而、左之通半左衛門を以被 仰出、

筑前守様御国許江之御暇之義、從 相公様御願被成

候処、去十一日、上使本多彈正大弼殿を以御願之

通被 仰出、御卷物御拝領被成、從 大納言様 上

使水野出羽守殿を以御卷物御拝領、從 御台様も

中島伊予守殿を以御卷物御拝受、昨日依御奉書、今

日、御登 城、御礼被 仰上、御懇之 上意、其

上御着座ニ而御鷹・御馬御拝領被成、重畳難有被

思召候、将又 相公様ニも依御奉書、今日、御

登 城、御礼可被 仰上処、御疝邪ニ付御断、御

登 城不被遊候、右之趣、可相達旨被 仰出候、頭

分以上江茂可被申聞旨 御意ニ候、

右御様子、被為 召 御意可有御座処、御疝邪ニ

付、其御義不被為在候、此段も可相達旨被 仰出

候、

五月十五日

筑前守様御拝領之御馬、今日来候ニ付、御用番御老

中々御使者為牽罷越候節、御使者江御使者之間ニお

ゐて玄蕃可及挨拶事、

但、御馬御請取之御用ニ携候人々布上下着用、

216「筆のまに」寛政一〇年五月二三日条

金沢市立玉川
図書館奥村文

庫蔵

廿三日

一、筑前守様、御国許へ之御暇御願置被遊候処、当十一

日、以 上使本多彈正大弼殿御暇被 仰出、御卷物

御拝領、從

大納言様も以 上使水野出羽守殿御拝領物被成、御

台様（大）分以中島伊与守殿御卷物御拝受被成候、同十五

日、為御礼御登城、於御白書院御目見、其上

御着座三而御懇之上意、殊御鷹・御馬御拝領被成、

相公様（前田治修）二も御登城、右御礼可被仰上処、御持病

之御疝邪二付而、其御儀不被為在候、十五日御日付

之御書を以被仰出、今日到来、

217「諸事被仰出日記」寛政一〇年五月二五日条

館加越能文庫蔵

金沢市立
玉川図書館

一、今日、筑前守様（前田齊広）、御国許江御暇之義、被仰出、頭

分以上御弘、為御祝儀、年寄中・御家老中廻勤、

筑前守様御国許江之御暇御願置被成候所、当十一

日、以上使本多弾正大弼殿御暇被仰出、御卷物

御拝領、從

大納言様茂以（徳川家慶）上使水野出羽守殿御卷物御拝領被

成、從御台様中島伊与守殿を以御卷物御拝受、同

十五日、為御礼御登城被成候所、於御白書院

御目見被仰上、其上御着座三而御懇之上意、

殊ニ御鷹・御馬御拝領被成、重疊難有御仕合被

思召候、

相公様（前田治修）二も御登城、右御礼可被仰上所、御持

病之御疝積（癰）二付而、其御儀不被為在候、此等之趣、

何茂江可申聞旨、拙者共迄以御書被仰下候事、

五月

218「筆のまに／＼」寛政一〇年六月初日条

金沢市立玉川図
書館奥村文庫蔵

朔日

一、筑前守様（前田齊広）、前月十九日、江戸御発駕之事、前条之

通にて、御泊附之通御逗留も無之、益御機嫌好、今

昼、金谷御殿へ御着被遊候之事、

219「諸事被仰出日記」寛政一〇年六月初日条

文庫蔵

金沢市立玉川
図書館加越能

一、昨晚津幡御泊三而、筑前守様御機嫌（能脱）、今朔日四時、

金谷御殿江御着被遊、為御礼江戸表江之御使寺社奉

行にて前田修理被遣候事、六月廿日帰着、

220「政隣記（耳目甄録）」一九

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
「政隣記 耳目甄録 拾九」

廿五日 昨夜御用番安房守殿依御廻文、今朝五時致登

城候処、四時頃、柳之御間列居、御年寄衆等御列座、

安房守殿左之通御演述、畢而於横廊下左之覚書披見、

直ニ廻勤ス、

筑前守様御国許へ之御暇御願置被成候処、去十一日、

以上使本多弾正大弼殿御暇被 仰出、御卷物御拝

領、從

大納言様も以上使水野出羽守殿御卷物御拝領被成、

從

御台様も以中島伊予守殿御卷物御拝受、同十五日、

為 御札御登 城被成候処、於御白書院 御目見

被 仰上、其上御着座ニ而 御懇之上意、殊御

鷹・御馬御拝領被成、重畳難有御仕合ニ被 思召候、

相公様（前田治修）も御登 城、右御札可被 仰上処、御持病

之御疝積（癰）ニ付、其御儀不被為在候、此等之趣何もへ

可申聞旨、拙者共迄以 御書被 仰下候事、

六月一五日

金沢城内の下御台所に盜賊が入る。

221 「諸事被仰出日記」寛政一〇年六月一五日程

館加越能文庫蔵

金沢市立
玉川図書

一、夜前、下御台所江盜賊入、銀□□貫目盜取候由、

222 「寛政文化間日記」寛政一〇年六月一六日程

金沢市立
玉川図書

寛政一〇年〜寛政一一年

館加越能文庫蔵

御台所へ賊入、

七月二八日

加賀藩江戸藩邸（本郷邸）に落雷あり。

223 「江戸詰中覚帳」寛政一〇年七月二八日程

文庫蔵

金沢市立玉川
図書館加越能

一、七時過、強雷鳴ニ付、玄蕃・藏人御殿江罷出、以十

左衛門相伺御機嫌候処、何之御障も不被為 在旨、

以同人御意有之候事、

但、雷山引小屋小者小屋江落候へとも人損等無之

事、

右ニ付、御本宅江ハ不罷出候事、

寛政一一年（一七九九）

三月二一日

前田齊広、金沢を發ち、同月二六日、江戸に

到着する。次いで四月一日、江戸城に登り、

参勤の挨拶をする。

三月二九日

前田治脩、帰国を許可される。四月一日、江

戸城に登る。次いで五月七日、江戸を發ち、

同月一八日、金沢城に到着する。

224「筆のまにく」寛政二年三月一日条 金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

十一日

一、今日

(前田齊広) 筑前守様益御機嫌好、金沢 御發駕、御供御家老無

之、御附人持、成瀬監物・横浜善左衛門御供也、

225「江戸幕府日記」寛政二年三月二九日条 国立公文書館内閣文庫蔵

御座間

(中略)

上使松平伊豆守 (信明)

銀百枚
卷物三十

(前田治脩) 松平加賀守

同 中山長門守 (信勝)

(広大院) 御台様より
卷物五

右、御暇被 仰出候付被遣之、

同人

上使松平伊豆守

(前田齊広) 松平筑前守

右、就参府被遣之、

226「江戸詰中覚帳」寛政二年三月二九日条 金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

一、上使松平伊豆守殿御出被成候旨、御小人目付罷越申

聞候由、九時過、聞番申聞候二付、組頭等へ夫々申

聞候事、

227「筆のまにく」寛政二年三月晦日条 金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

晦日 (三〇日)

一、相公様御帰国御暇御例之通被 仰出候へハ、五月七

日 御發駕可被遊旨、当廿一日被 仰出候由、御泊

付も相極候旨、同日急便三伝付申来、

228「江戸幕府日記」寛政二年四月朔日条 国立公文書館内閣文庫蔵

御座間

御暇

御鷹被下

(前田治脩) 松平加賀守

右、御目見、

(中略)

一、今四江式寸五分前、御白書院江

出御、

参府

御太刀一腰
卷物十
銀三十枚

(前田齊広)
松平筑前守

養子参府之御礼

申上候御礼

松平加賀守

(中略)

松平加賀守家来

卷物五

同

(長世)
村井又兵衛
(政寛)
横山藏人

229「江戸詰中覚帳」寛政一一年四月朔日条

金沢市立玉川図書
館加越能文庫蔵

一、今日御暇之御礼等被 仰上候ニ付、六半時前 御出、

御登城、御礼御首尾能被 仰上、御下りニ諏訪

部文右衛門殿江御立寄、夫々御老中方・若御年寄衆

御廻勤、九半時前、御帰殿之事、

但、

(前田齊広)
筑前守様御参府之 御礼被 仰上候ニ付、御同

道、御登城、御廻勤之節も御同道被遊、御老

中方ニ而ハ一度充御立戻有之、

230「筆のまに」寛政一一年四月条

金沢市立玉川図書館奥
村文庫蔵

〇四月

一、筑前守様益御機嫌能御旅行、前月十六日、野尻御

止宿迄者、御道雪深、馬足も不立、御供人足を痛

暫、今日夜八半時過、榊へ御着、翌日四時頃 御発

駕、十九日朝六半時頃、追分御着、同日同駅ニ御逗

留、廿三日夕、江戸 御着之筈之处、廿日、板鼻駅

へ御着之上、御風氣ニ被為在、廿二日迄、同駅ニ御

逗留、尤御風邪一通りニ而、外御替不被為在、廿三

日、同駅 御発駕、本庄御泊、夫々御当日之通ニ而、

廿六日、御着府之旨、廿一日、板鼻駅を江戸へ言上、

右之趣、追々御用番を廻状ニ而承候、

231「筆のまに」寛政一一年四月五日条

金沢市立玉川図書
館奥村文庫蔵

五日

一、筑前守様、前月廿六日巳中刻、御着府、御風氣も

段々御快然之由、今日申来、

232 「筆のまにく」寛政一二年四月九日条

金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

九日

一、筑前守様御参府ニ付、三月廿九日、上使松平

伊豆守殿御出、御懇之被為蒙 上意、且又御参府之

御礼可被仰上旨、晦日御奉書到来、当朔日、御登

城、於 御白書院御礼被 仰上、御懇之被為蒙

上意、相公様ニも依御奉書、御登 城被 仰上候処、

御懇之被為蒙 上意之旨等申来、

一、三月廿九日、上使松平伊豆守殿を以、御国許江之

御暇被進、白銀・御卷物御拝領、從

大納言様水野出羽守殿を以御卷物御拝受、從 御

台様分中山長門守殿を以御卷物御拝受、当朔日、

御登 城之義、前日御奉書、則御登 城、於 御座

之間御礼被 仰上、御懇之被為蒙上意、御手自御の

し鮑御頂戴、御鷹・御馬御拝領之旨等申来、

233 「江戸詰中諸事略留」寛政一二年五月七日条

金沢市立玉川図書館加

越能文庫蔵

一、今日 御発駕ニ付、御殿揃刻限五半時之事、

(中略)

一、今日午ノ中刻、御機嫌能御発駕之段、中飛脚を以年

寄中へ相達候事、

234 「江戸詰中覚帳」寛政一二年五月七日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、益御機嫌能、午ノ中刻 御発駕被遊候、又兵衛・

藏人義、御式台敷附二枚目、織江之上ニ、御勝手之

方江罷出有之候事、

但、直ニ御供いたし候事、

235 「筆のまにく」寛政一二年五月一五日程

金沢市立玉川図書館奥村文

庫蔵

一、相公様益御機嫌好、当月七日午中刻、御発駕之旨、

同日発足中飛脚今日到着、前田織江へ申越、

236 「筆のまにく」寛政一二年五月一七日程

金沢市立玉川図書館奥村文

庫蔵

十七日

一、相公様益御機嫌能御旅行、十五日泊江御着、十七日

夜五時之御供揃ニ而十八日、御着城可被遊旨、同

駅ニ而被 仰出候旨、早飛脚を以今日申来、

237 「江戸詰中諸事略留」寛政一二年五月二五日程

金沢市立玉川

図書館加越能文庫蔵

一、去十八日金沢発足之中飛脚、越後姫川ニ而一日逗留
有之、今日七時前到着、

御前長途益御機嫌能、去十八日申ノ剋 御着城可遊
候段、月番大炊殿(前田孝之)申来事、

238「政隣記〔耳目甄録〕」一九 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記』耳目甄録 拾九
廿二日 夕七時過、板鼻駅(前田齊広)之早飛脚着、左之通申来、

筑前守様、御機嫌克今月十一日金沢 御発駕之处、
御道中雪降、別而関山前後積雪多、荷物・人足・持
乗馬者やうくねこだ越之族(幹方)ニ而、御通行不被为果
敢取、榊駅江曉天七時過御着、追分駅江者朝六時過
御着被成候ニ付、同日一日御逗留、廿一日板鼻可被
遊 御発駕候处、御風氣ニ被為在候ニ付、同日并廿
二日御逗留、廿二日本庄(注記)「増御泊也」御泊、廿四日
熊谷御泊、廿五日蕨御泊、廿六日、御着府之段申
来、夜半頃重而御飛脚来着、御風氣段々御快旨申
来候事、

右三付、御表小将山崎弥次郎(緋佩)へ為見廻早打御使被
仰付、今夜発出、但、廿五日罷帰候事、

廿六日 四半時頃、

筑前守様、益御機嫌克 御着府、御作法御先例之通、
夕方御老中方御廻勤も被遊候、且御待請之御客衆等
二汁五菜之御料理出、

廿九日 上使御老中松平伊豆守殿(信明)を以、御国許へ之御

暇被 仰出、御例之通白銀・御卷物御拝領、御懇之
被為蒙 上意、従水野出羽守殿(忠友)を以、(從脱)

大納言様も御卷物御拝受、被為蒙 上意、従
御台様も御使中山長門守殿(信勝)を以、御卷物御拝受、

筑前守様江も御参府ニ付、御懇之 上意有之候ニ付、
伊豆守殿御送迎者被遊候、出羽守殿・長門守殿江者

相公様御老人御送迎被遊候、但、御口中御痛ニ付、
御相伴且御廻勤者 飛驒守様江御名代御頼被遊候事、
(前田科老)

(中略)

同日 昨日依 御奉書
(四月朔日)

御両殿様御登 城、御暇之御礼、御参府之御礼被
仰上、上意、御拝領物御前例之通、依而於御席

御意之趣又兵衛殿御演述、畢而為御祝詞於竹之間御
帳ニ附候義も前々之通、
(科井長世)

但、御拝領之御馬「栗毛・鹿毛」(注記) 昼過來、御鷹者

夜二入来、

(中略)

七日(五月)

四時之御供揃ニ而九半時頃、大御門今益御機嫌克被遊 御発駕、其節舟之間ニ而篠崎玄順、御通り懸り之御目見、奏者相勤、御勝手通り御先江走拔、幕番所前江出蹲踞、尤与力兩人受取為相詰、御跡御行列通り候而、御門大扉為打候事、

(中略)

廿八日 今度御帰国、十八日、御着城、但、十八日津

幡御泊、十九日御着之日図りニ候処、俄ニ高岡今

御帰城与被仰出、右之通之旨、今日御飛脚着、相知

レ候事、

四月二八日

江戸の前田治脩、法梁院(正姫)。元大聖寺藩主前

田利道の娘)を娶る。

239「江戸詰中覚帳」寛政一二年四月二八日条

文庫藏

金沢市立玉川図書館加越能

一、御婚礼御首尾能御整被遊、恐悦之至奉存旨、又兵衛

(村井長世)

(横山政寛)
・藏人一所ニ以主殿助申上候処、以同人 御意有之、

240「政隣記(耳目甄録)」一九

金沢市立玉川図書館加越能文庫藏
「政隣記 耳目甄録 拾九」

廿四日(四月) 左之通御用所今申談有之、

正姫様御婚礼御整之上、御順之儀左之通、

相公様

正姫様 寿光院様

(前田齊広)

筑前守様与申御順ニ候

事、

付札御横目江

正姫様御婚礼御整之上者、

△

御前様与奉称苦ニ候条、御家中之人々一統承知候様

相触可被申候事、

四月

(中略)

廿七日

(村井長世)
左之通又兵衛殿被仰聞候段、御横目廻状出、

付札御横目江

△

御婚礼相済候為恐悦、御歩並以上之人々、頭・支配人御小屋江廿八日・廿九日之内罷出候様可被申談候事、

四月

廿八日、五半時、

(前田利考)

飛驒守様江今日御婚礼御内祝御整之

為 御祝儀、塩鯛一箱・昆布一箱、桐陽院様へ塩鯛一箱、從

筑前守様も右御両方様江塩鯛一箱宛被進候、御使ニ致参上候処、飛驒守様者御直答、二汁五菜之御料理等被下之、桐陽院様者御附頭を以御答有之候事、

但、夕方自分御小屋へ從 飛驒守様御使者御小將

組市川丈助を以、晒布五疋・包熨斗・御目録被下之、其節御殿詰不在合、家来取次申越候ニ付、其段達 御聴、御用所へも申達、翌日為御礼参上仕候事、

候事、

一、今日御婚禮御内祝御整ニ付、御客 出雲守様・飛驒

守様・前田安房守殿等御内縁有之御出入衆迄、都合

十五人御出、三汁五菜之御料理等壹ツ焼鯛出、飛

驒守様者於御居間書院御祝、夫々御都合克相濟、且

御歩並以上御殿詰合之分一統江御吸物・御酒・御取

肴被下之、足輕・小者江者御酒等被下之、尤是又御

殿詰合之分迄也、但、頂戴席年頭御具足餅・御雑煮

之節之通、

五月一五日

金沢に地震あり。

241「政隣記（耳目甄録）」一九
十五日 晴、申二刻地震、

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 拾九』

五月二六日

金沢に強震あり。金沢城にも被害が出る。

242「筆のまに／＼」寛政一一年五月二六日条

庫蔵
金沢市立玉川図書館奥村文

廿六日

一、今日夕七時過、地大震候故、家内之人々各庭へ避

候、拙者儀、去々年以来、持病之積氣等不出来有

之、不致出席、今日も不宜候故、暫見合候而、暮

頃忍而登 城、石野主殿助を以、先刻者強地震ニ候

処、御容躰御障も不被為在候哉、為伺御機嫌罷出候、

御序ニ宜と申述、二段ニ早速可罷出処、地震故、別

而積氣不出来、暫遂保養、忍而罷出申候、御噂も候

ハ、寔申上度旨、將又別段ニ此義者申達にも不及

候趣、病中以来之御礼も御座候ても、今日ハ態与相

扣不申上段申来候処、達 御聴候上、重而罷出、則申上候処、先刻地震ニ付て相伺御機嫌、御喜悅被思召候、御機嫌伺之御談も不被為在候、右地震ニ付、忍而罷出候段、尤之義、見取候積氣ニ相障不申哉、御用義示談も済候ハ、退出候様 思召之旨御意之由、演述ニ付、御懇之 御意之趣、難有仕合奉存旨申述、

一、右地震ニ付、年寄中・御家老中・若年寄中、各登

城也、大隅守ハ登（長連起）城之処、氣配悪敷、早ク罷帰候

故、保養申談之為、九郎左衛門等一先帰宅、重而登

城也、人持中等も伺御機嫌登 城之人々多、

一、右地震ニ付、御城中御石垣等所々損所在之、大炊者

見分ニ廻り候也、金沢中所々屋敷く 囲之土塀多潰

へ候、拙宅も内囲之土塀多ク潰へ、或ハ庭ニ建候石

灯籠たはれ、或ハ間之内棚ニ置候品落候、金沢之内

ニも小家、岸之上坏ニ有之ハくつかへり、且岸ニハ

くつれ所も多有之故、人死も有之、家来小者之娘も

土下ニ成、一人死去之義、翌廿七日ほり出候上、相

知候也、此検使之事、公事場与力へ家来合聞合候処、

地震ニ而死去之義、慥ニ候へハ不及検使由故、検使与ハ不致也、先年火災之焼死人も検使不乞例アリ、但、先頃以来、朝日赤シ、翌月六日、七日頃迄も小地震、小鳴動毎度アリ、数日を経たルニ、他国ハ左程ニ無之、御領国中ニ而も 御城廻り強キ躰なり、右地震後、宮腰波濤甚穩にて、津浪もたつへきやと、所之者勞心之由なり、いつも小地震ニ而も、波ハ高ク成由也、

「拙者積氣、去々年以来ハ間之内ニ而ハ左程無之

候へとも、外トへ出候へハ、眩暈ニ而歩行難致、

打ひらき候所ハ、弥難義候趣、今日、金谷御門

今松坂通り罷出候也」

「尚寛案、今日之地震、甚しといへとも、寛文

二年五月之地震程ニハ無之候、右之節御城石垣

所々損者、公義へ御届之段、図之扣、今ニ席ニ

あり」

「所ニより平地ニわれめ出来候なり、又土蔵のひ

らき候所も多し、黒津船神主之家ハ、砂山くす

れて山となり、神主等砂下ニ圧死する由なり」

243 「御家老方若年寄方日記之内拔書」 寛政一一年五月二

六日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫藏

一、今夕七半時前、強キ地震ニ而年寄中山城・内匠助、

御家老中・若年寄、段々登城、各直ニ御次江召出、

内記・藏人・圖書・彦三・又五郎以横山引馬御機

嫌相伺、玄蕃村杳右衛門を以、大学林十左衛門を以

相伺候処、内記・圖書・彦三八以関沢安左衛門、玄

蕃以村杳右衛門、藏人・又五郎・横山引馬・大学以

安左衛門、益御機嫌能被為在之段 御意有之事、

一、河内守儀、保養中ニ候へ共、大変ニ而登城、御機

嫌被相伺候事、

一、大隅守儀、登城、御機嫌相伺候得共、脚氣難儀い

たし候付、九郎左衛門同道、暮合退出いたし候処、

九郎左衛門義御用有之、重而登城候事、

但、土佐守保養中ニ付月番迄以紙面非相伺候事、

一、主税儀、登城、奥ノ口合直ニ御次江罷出相伺、夜

九時頃退出之事、

一、隼人保養中、閑随・南郊積氣等ニ付、月番江以紙面

相伺之事、

但、伺之儀為念執筆為申遣事、

一、人持諸頭為伺御機嫌段々登城有之事、

一、田辺五郎左衛門罷出、御細工所相替候儀無御座、土

堀くすれ候而、夫々御縮之義申付置候、且五郎左衛

門義、役引中ニ候得共、大変ニ而罷出候段申聞候事、

一、大学儀、御厩江罷出候処、御厩并御馬相替申儀無之

ニ付、其段以横山引馬達 御聴之事、

一、武田何市罷出、御厩見分仕候処、御馬・御厩共相替

申儀無御座候、御厩囲後土堀くすれ候へとも、御囲

之内之儀ニ付、御脇ニ相済申儀無之段申聞、

一、御納戸奉行飯尾半助等三人罷出、大学江別席ニ而薪

之御丸御土蔵三つ見分仕候処、二つハ戸前明不申、

残り一つハ見分仕候処、先相替申儀無御座候、去共

二つハ御土蔵損しかくまい迄ニ相成候処御座候、御

縮ニ悪キ儀無御座奉存候へ共、右之通ニ付、御番人

切々相廻候様仕度旨申聞候而、其段以執筆御城代方

江はけしく相廻候様申渡有之様ニ達置、

一、御鷹取次広瀬弥平次罷出、御鷹部屋見分仕候処、御

鷹・御鷹部屋共相替申儀無之候、惣廻り土堀多分く

すれ候二而、番人并出番之者も引揚、御縮之儀申渡候旨申聞、大学・横山引馬を以達 御聴候事、

一、右大変ニ而御次〆

寿光院様江早飛脚を以申参り候由之事、

一、年寄中・御家老中・若年寄、夜五半時頃退出、

但、山城・内匠助ハ六時退出也、

244「横山氏日記」寛政一一年五月二六日条 金沢市立玉川図書館蔵
館加越能文庫蔵
(前田直義)

一、夕七半時前、強地震ニ付、年寄中・山城・内匠助・

御家老中・若老、段々登城、各直ニ御次へ罷出、

以御近習頭御機嫌相伺候処、益 御機嫌能被為 在

候段、以御近習頭 御意有之、

但、山城・内匠助六時過退出之事、

一、河内守義、保養中ニ候へとも、大変ニ付、登城、

御機嫌相伺候事、

一、大隅守義、登城いたし、御機嫌相伺、後脚氣難義

いたし候付、九郎左衛門同道、暮合退出いたし候処、

九郎左衛門義、御用有之、重而登城いたし候事、

但、土佐守保中ニ付、月番迄以紙面被為伺候事、

一、主税義、登城、奥ノ口〆直ニ御次江出、御機嫌

相伺、夜九時頃、退出之事、

一、隼人、脚氣ニ而保養中、并閑随積氣、南郊腰痛ニ付、

月番江以紙面相伺候事、

一、人持諸頭為伺 御機嫌、段々登城之事、

一、田辺五郎左衛門罷出、御細工所相替義無御座候、土

堀くすれ候ニ付、夫々御縮之義申付置候、且五郎左

衛門義、役引中ニ御座候得共、あまり大変ニ付罷出

候段申聞候事、

一、大学義、御厩へ罷出候処、御厩并御馬相替申義無之

ニ付、其段以横山引馬達 御聴候事、

一、武田何市罷出、御厩見分仕候処、御馬・御厩とも相

替申義無御座候、御厩囲うしろ土堀くすれ候へとも、

御囲之内之義ニ付、御縮ニ相障申義無之段申聞、

一、御納戸奉行飯尾半助等三人罷出、大学江以別席、薪

之御丸御土蔵三ツ見分仕候処、二ツハ戸前明不申、

残り壱ツハ見分仕候処、先相替申義無御座候得とも、

三ツ共御土蔵損こうまい迄ニ相成候処御座候、御

縮ニあき茂無御座候得とも奉存候得とも、右之通ニ付、

御番人切々相廻候様仕度旨申聞候付、其段以執筆御

城代方へ申達、はけしく相廻候様申渡有之様達、

但、尤平日御番人相廻り候得とも、猶更はけ敷相

廻候様ニ仕度旨申聞、

一、御鷹方取次広瀬弥平次罷出、御鷹部屋見分仕候処、

御鷹部屋御鷹共相替申義無之候、惣廻り土塀多分く

すれ候付、番人并非番之者も引揚御縮之義申渡候旨

申聞、大学・横山引馬を以、御鷹并御鷹部屋共相替

申義無之段、取次申聞候旨達 御聴候事、

一、右大変ニ付、御次々

寿光院様江早飛脚を以、右之様申参り候由之事、

一、年寄中・御家老中・若年寄、夜五半時比、退出之事、

但、山城・内匠助ハ六時過退出、

245 前田直養「覚書」寛政一一年五月二六日条

松幸香「前田土佐守家連代前田直養の日記」(寛書) (翻刻) 五一

前田土佐守家
資料館蔵 竹

一、五月廿六日七ツ時過、大地震ニ付、即刻歩ニテ甚右

衛門坂通り登城、御近習頭関沢安左衛門ヲ以御機嫌

伺、御障不被為在旨、同人ヲ以テ被仰出、恐悦奉存

旨御請申上、年寄中初何茂登城、暫ク退出見合候様

ニト申儀ニテ、六ツ時過退出候而も可宜旨、村井申

聞、退出スル、御城石垣等損所数ヶ所也、七ツ時過

故、羽織袴也、篠井文左衛門宅へ罷出、早速罷出可

然旨申聞、相伺登城ノ所、何茂大方登城也、加様ノ

大変ノ節ハ檜垣ノ間ノ御杉戸明居候得ば、桐ノ御

間迄直ニ罷越、御近習頭ヲ以テ御機嫌伺候而も宜由

某ハ少シ程有テ出候故、檜垣ノ間ノ御縁カワニテ申

上ル也、某シテ跡ニ出候故ハ席ニテ被申上、某モ年

寄中席見習ノ所ニ着座スル、

(中略)

一、五月廿六日ノ地震ニ金沢御城ヲ初メ、其外所々土

堀・土蔵等損所有之、死人モ有之事、

246 「日記等拔書」寛政一一年五月二六日条

寛政一一年

金沢市立玉川図書
館加越能文庫蔵

同年五月廿六日、強地震ニ付早速登城、御機嫌相伺

候事、

247 「寛政文化間日記」寛政一一年五月二六日条

越能文庫蔵

金沢市立玉
川図書館加

大地震、各登城、○黒津舟出火、

248 「諸事被仰出日記」寛政一一年五月二六日条

越能文庫蔵

金沢市立玉
川図書館加

一、今日七時過、大地震、百年ニも無之大地震、屋栋石も落、土屏^(土)所々崩、御城内ニも所々石垣崩候、辰巳御櫓下石垣等茂崩候、御家中并町共大形土屏^(土)・土蔵披損、小立野カケ辺者家をも潰シ候所も有之、右ニ付、諸頭并諸役人登城、御機嫌茂相窺候事、無役之人持も登城、伺御機嫌候事、

249「横山氏日記」寛政一一年五月二七日条

金沢市立玉川図書館
館加越能文庫蔵

一、御居間書院江御出日ニ付、御家老方・若年寄方共罷出可申上、御用無御座旨、中村才兵衛^(直二)を以申上候事、明日野田 御参詣御延引之段、野村伊兵衛^(礼商)申聞候事、御船小屋四筋共、少々かたかり申候得共、危義ハ無御座段、御船小屋才許申聞候付、見分不仕候段、湯浅友右衛門^(勝損)申聞承置候事、但、友右衛門義、伊藤権五郎^(勝損)転役いたし候付、代被 仰付候迄、宮腰町奉行兼帶いたし候様、申渡有之ニ付、本文之通届候事、

一、三十人頭何茂罷出、蓮池御庭惣廻り御囲土塀百三十拾間余りもくすれ、不縮ニ付、夜前令三十人組小頭等御縮之義申渡候、其外御露地廻り土塀所々くすれ申

候旨申聞、尤御次 御城代方江相達候旨申聞承置候事、

一、御書物奉行中村勘兵衛^(之書)罷出、金谷御文庫御土蔵三ツ共少々損申候、内ノ御道具先相替申義無御座候、先相届候旨申聞候ニ付、其段以石野主殿助^(寛氏)達 御聴候事、

一、御武具土蔵見分仕候处、棚ニ置候品并懸置候品相替不申、仍而箱之内御道具ハ相替申義有御座間敷義、右奉行申聞、且亦鉄炮方少々損物御座候牀之由、御家老方江届、^(前田貞)圖書以石野主殿助達 御聴候事、

一、御弓矢方并火矢方損候品無御座段、右奉行夫々申聞、圖書以主殿助達 御聴候事、

一、御納戸奉行中村弥左衛門^(守苗)罷出、薪御丸御土蔵二ツ戸明不申分、御大工罷出、明ケ申ニ付、内見分仕候处、棚ニ置候品并懸置候品等相替不申候間、箱之内御道具者多分相替申分無御座哉与奉存候旨申聞候ニ付、其段大学主殿助^(前田直英)を以申上候事、

一、御城中損所、大手石垣・石川御門左右石垣くすれ、其外石垣都合拾八ヶ所崩、土塀所々崩、其内ニも外

と廻之土塀多分崩、且高石垣ハ不殘所々はらミ候事、

250「寛政文化間日記」寛政一一年五月二七日条 金沢市立玉川図書館蔵

越能文庫蔵

御居間書院へ被召、地震ニ付、御意有之、鐘樓損候付、鶴丸鐘撞候コト、

251「諸事被仰出日記」寛政一一年五月二八日条 金沢市立玉川図書館蔵

越能文庫蔵

一、御宮ノ高時鐘（鐘樓）シユロウ披損ニ付、今晚六時々三ノ御

丸御番所後ノ早鐘ヲ時鐘ニ被仰渡、則飯番所出来、

252「寛政文化間日記」寛政一一年六月三日条 金沢市立玉川図書館蔵

文庫蔵

地震ニ付、材木等高料ニ売候義触ノコト、同ニ付、石引町等々人足上度願ノコト、

253「江戸詰中諸事略留」寛政一一年六月四日条 金沢市立玉川図書館蔵

越能文庫蔵

同四日 昨夕々雨天

一、去月廿六日夜、石野主殿助等々不時立町飛脚早飛脚

歩二大炊殿々伝付之状、今日四時前到来、左之通、

此表今廿六日夕七時過甚嚴敷地震ニ而、御城廻御

囲等少々損所有之候へ共、御城中無御別条、

（前田治郎）相公様何之御障も不被為在、御機嫌能被成御座、此

段 寿光院様始可有御申上候、今晚石野主殿助等々

不時立町飛脚早飛脚步指出之候付伝付、此段申進候、

以上、

五月廿六日 （抹消）前田織江大炊判

追而七日各登 城相伺御機嫌申候、此段為御承知申

進候、以上、

一、右夫々申上、且伺御機嫌之紙面席へ差出事、

但、文段別帳へ記、

一、右金沢表廿六日地震之様子、委相知兼候得共大變

之由、御家中侍中居屋敷囲長屋并町家所々数軒破損、

所ニより地面われ人損等も有之由、取々坪有之事、（評方）

254「江戸詰中諸事略留」寛政一一年六月五日条 金沢市立玉川図書館蔵

越能文庫蔵

同五日 晴

一、今般御国表大變之様子ニ付、

（前田齊広）筑前守様より御見廻として御使被進置段被 仰出、

義義之上井上勘右衛門被 仰付候旨ニ付、其段勘右

衛門へ申渡、道中往来指急キ罷越候趣之事、

一、前月廿七日金沢発足の早飛脚、御用所へ差出候付、

(前田孝友)

御用番大炊殿よりの伝付状、今日八半時頃到来、去

廿六日大地震ニ而、

御城中并御櫓ハ無御別条候へ共、所々御囲等ハ損所有之、其外武士方・町家等も破損有之、怪我人茂有之躰候、委細之儀者未相知不申候、先加様之節御届も有之趣ニ候哉、猶更聞番詮義之上、的当之義も不承知候ハ、御益等承合候様可申渡旨申来事、

飛脚之者評ニ大変至極之儀、町家人々途中ニ相集

(愛宕)

面々声を發スルノミ、或ハあたこ山辺ハ山鳴動ニ

付、人々家を明退散いたし、其外所々地面われ、

其内江おち入即死等有之、或ハ小立野新坂等崩レ

数軒破損、或ハ池あな藏毀込騒動人有之、前代未

聞之由、扨又浜手へ御使番見定ニ被遣候処、八田

潟ノ内ニ百間ニ三百間計成波ヲ来、浜辺ハ洲入候

様ニ相成、黒津舟辺ハ一向相見不申步行、或成外

海うしつ一里半計引塩ニ相成、定而追而ツナミ可

有之沙汰之由、且大聖持辺も同様大変之由、区々

取沙汰之事、

255「江戸詰中諸事略留」寛政一一年六月六日条

越能文庫藏

金沢市立玉川図書館加

同六日 朝曇昼過分晴

一、今般御国表大地震ニ付、於此表詰合頭分以上席江罷出、伺御機嫌候事、

但、於金沢表頭分以上分而伺御機嫌之義ハ無之、

何も即日早馬ニ而罷出、於御次相伺候躰之由、右

ニ付、此表ニ罷出候面々も不相伺かと如何敷ニ付

罷出、相伺候様一統申談旨、水野次郎(武矩)大夫申聞候

事、

256「江戸詰中諸事略留」寛政一一年六月七日条

越能文庫藏

金沢市立玉川図書館加

同七日 天氣よし

一、今日御届書

(信明)

御用番松平伊豆守殿へ聞番恒川七兵衛

持参、役人関屋次郎五郎江申述相渡候処、御承知被

成御受取之由、御添書七兵衛指出候事、

御届書左之通、

今廿六日申之刻、国許大地震ニ而、金沢城中并櫓者

無別条候得共、所々圀等損所有之、其外城下侍屋敷・町家等茂破損所多、怪我人等茂有之跡ニ奉存候、委細之儀者未相知不申候間、追而御届可仕候、先右之趣御届申達候、以上、

五月廿六日 御名

257 「寛政文化間日記」寛政一一年六月一五日条 金沢市立玉川図書館蔵

越能文庫蔵

地震ニ付、自江戸 (前田齊広) 筑前守様御使者井上勘右衛門来、

258 「寛政文化間日記」寛政一一年八月一日条 金沢市立玉川図書館蔵

越能文庫蔵

五月ノ地震ニ付、御届コト、

259 「政隣記(耳目甄録)」一九 金沢市立玉川図書館蔵 越能文庫蔵

(六月)

『政隣記 耳目甄録 拾五』

四日 四時頃、前月廿六日夕七半時頃、金沢強地震之由

相知ル、委曲者今月末ニ記之、

(中略)

今年五月廿六日、申三刻頃、加州金沢強地震有之、続

而弱地震三度有之、御城内石垣等初所々損じ、御

殿者 御別条無之、御城下武士町等町家損所多有之、

二之御丸昼番組頭高田新左衛門羌種 (注記)「御小將頭二百

五十石」、泊番宮井典膳直掇 (注記)「御馬廻頭六百石」茂新

左衛門公為交代罷出有之ニ付、兩人共御次へ参、格

別之強地震ニ付、当番御近習頭有沢采女右衛門有貞

(注記)「物頭並二百石」まで奉伺御機嫌候処、何之御障茂不

被為在ニ而申聞、然処人持組并諸頭追々登 城、何

茂御近習頭を以奉伺御機嫌、依之御馬廻頭兼御儉約

奉行、領千三百石、江守平馬值房より御用番江申達

候者、御表向相勤候者共者、御用番より被仰渡も

無之候処、遮而奉伺御機嫌候儀如何敷奉存候得共、

人持中等追々登 城、御近習頭を以奉伺御機嫌候間、

同席共ニも同様ニ仕候、此段御達申置候段申述、依

而宮井・高田茂一統之通、重而御次へ出、御近習頭

を以奉伺御機嫌候旨申演、

今月御月番日御城代も御用番也

一、御城代、領壹万八千五百石、前田大炊孝友、即刻

登 城、直ニ 御次江被出、夫より御席へ被参候上、

御大小将横目当番堀左兵衛秀親 (注記)「四百五十石」を被

呼、御本丸等損所見分可致旨被仰聞、泊番御横目

追付可罷出時刻、其上宮井・高田兩人罷在候ニ付、

左兵衛儀も一所ニ見分ニ罷出、暫御横目所明候趣等、

大炊殿も被申上候趣取計、宮井の采女右衛門を以達 御聴、御大小將横目四百五十石、坂井甚右衛門直謨無程泊番ニ出、御横目所久敷者明不申、尤地震ニ付差統追々御横目中登 城有之、且又定番御馬廻御番頭四百五十石、吉田八郎大夫兼忠茂大炊殿跡の見分へ罷越、

一、御城代一万七千石、奥村河内守尚寛、乍病中押而登城、其外御年寄中等追々登 城、暮過各退出、御用番大炊殿者夜五半時頃退出、

一、前記之通、人持組等以下役儀御免等之頭分も罷出、奉伺御機嫌候段、於 御次御近習頭を以申上候事、
一、江守平馬等の外御用も無之哉之旨、御年寄衆等退出ニ付、御用番へ御尋申候處、一統相待罷在候様被仰聞候ニ付、各在合之分相待有之候得共、宅々門前囲等及大破候人々者有之儀ニ付、夫々縮方指図等も仕度段及御示談候處、門前等及大破候人々者可罷帰候、併御呼出之義も可有之候間、其心得ニ而可罷在旨被仰聞候ニ付、大破之人々迄罷帰候、其後何等之御用も無之、夜五時前ニも至候ニ付、御様子承度段、

執筆役組外小竹直右衛門を以御尋申候處、先御用も無之旨ニ付、当番之外一統致退出候、

一、同夜半頃迄ニ七度震申候得共、強き地震ニ而者無之候事、

一、同夜御次辺御仕廻無之、翌朝迄直ニ詰切之事、

一、同夜六時過火事沙汰有之、大浦辺出火与申事ニ而暫有之鎮候、但、右火事者黒津船神主家等地震ニ而震り潰し、火事ニ相成候事也、其節之委曲末ニ記之、

一、右強地震後、御使番二百三十石、渡瀬七郎大夫政勝を小立野辺并三社辺為見分被差遣、但、七郎大夫野袴・布羽織着用罷越、

一、廿七日曉八時過少々、七時過二度、朝六半時過二度、昼之内も少々宛三度震、同日曇蒸暑、昼後少々風立、
一、昨廿六日も曇蒸暑候事、

一、廿七日、宮腰江御使番二百石、堀兵馬善勝為見分ニ遣候處、潰れ家ニ拾軒計、大損家百軒計有之段、其上粟ヶ崎黒津船江御使番五百石、津田権五郎居方為見分ニ遣候處、粟ヶ崎之潰れ家十三軒計有之、黒津船江者砂沈ミ難罷越、根生迄罷越承合候處、黒津船

御宮坂下神主等之家潰れ、砂山も湧へつき出し候由、同所御宮も潰れ候由云々、

一、廿八日曉八時過、朝五時前少々宛地震、昼八時過微雨、無程霽、

一、同日昼、宮坂へ渡瀬七郎大夫、栗ヶ崎辺江堀兵馬、再為見分被遣、附、今日雨晴候後大暑ニ相成、

一、同日、從大聖寺飛驒守様御家老山崎権丞を以、強地震ニ付、為御見廻御登城ニ成度 思召候、先以御使者被 仰上旨ニ候处、御登城御断被 仰進、

一、時鐘所^{甚右衛門坂高也}、此度地震ニ而石垣等及大破候ニ付、

今廿八日ハ鶴之丸ニ有之鐘を時鐘ニ被 仰付、暮六時ハ撞之、依而鐘撞足輕詰所出来迄、当分三之御丸御馬廻組番所次之間ニ相詰候、昼式人、夜三人、小者老人宛相詰候事、

一、廿九日曉七半時過、少々一度震候事、

一、同月廿四日、日色出入共如朱雲、色も久敷赤く、大風ニても有らんと評区、廿五日・廿六日も同様、廿六日昼曇西真風ニ而常に無之けしからぬ空也、其頃燕子巢立之折なるに燕共子を喰へて何地不知飛去行

しと云々、

又、三太郎船とて二千五百石積の船、宮腰浦へ先日以來参り居候处、水主梶取等廿五日之気色を見て、是只事ならでと不敢逗留中之指引方をもそこくニして、早速帆を上て乗帰候事、

一、今年より七十三ヶ年以前、強地震有之、其節ハ能州震強し、駄荷馬地面之割レ目江入、不得動キ程之為艱ニ候由、鳥屋吉右衛門^{（注記）}一関助馬場町居住、小鳥商売人、今年九十七歳」申聞候事、

一、金沢町奉行七百石、香林坊橋上川縁居住、富永右近

右衛門助有「前鬼之末孫也与云々」屋敷者古キ普請ニ

而損所多、圉之土塀なども古く損し有之候处、右地

震之節ハ一向損所無之、無難至極なる事、於金沢只

此一家而已也、于時此月廿五日、廻国之旅僧来り申

ハ、於旅中異僧ハ伝附之由ニ而^{（注記）}霽平峰夕雲如斯札

を荅枚持参、是を何卒早く届候様被頼候由申聞、指

置泊候旨也、此札之守護ゆへカ、右近右衛門屋敷ニ

限り家ハ勿論、塀壁ニ至迄少しの損じも無之候、右

異僧ハ先祖之前鬼坎与云々、

一、能州輪島産之由ニ而、乞食白子与云者、金沢ニ在候
 処、同月廿五日ニ明廿六日ハ強地震可有之と申候
 処、果而符合、又六月十一日ニハ火災可有之与申ゆ
 へ、金沢中嚴重ニ致用心候故カ無別条候、右白子を
 盜賊改方役所ニ而相糺候処、九才之時ハ江戸ニ在之、
 易学致稽古ニ付、右之變相考候段申聞候事、

一、御持弓頭兼御異風才許二百石、彦三五番町、窪田
 左平秀政、右地震之夜、家内何も夜半迄庭ニ居候処、
 虚空を大きなる鳥飛行、羽を広め候所者十間計と見
 へ、形ち青鷺の如く、毛色ハ夜陰之事ゆへ不相分、
 至て靜成羽つかいにて候旨、其後一日ハ失念、^(注記)同人
 庭にて昼過之事なるに大なる鴨飛行、真鴨程の大サ
 にて有之候旨、又其後一日失念、^(注記)庭ニ而耳有之蛇石
 垣江入候、長サ二尺計之小蛇ニて耳ハ余程長ニも有
 之と見受候由、六月十八日、御持方頭寄合宿、御持
 弓頭兼御近習頭、百八十石、不破五郎兵衛「^(注記)光保」
 宅ニて左平話、各承之候旨之事、

一、御堀石垣七歩之損シ与穴生方言上、但、辰巳之方
 ハ損シ薄く候由之事、

一、河北郡第一損じ、黒津船神主并せかれ・娘・家来二
 人、砂山之崩れに圧れ絶命、右神主齊藤近江、居間
 ニ父隱居と致物語有之、妻ハ台子之側ニ嫡子并二男
 七才・女子六歳咄居候処、砂山崩れ人々外へ出、近
 江も出候得共、子共ハ就不出、重而家内江入候処ニ
 て砂の下ニ相成候、其人々ハ近江并嫡子・娘・家来
 男女五人也、妻ハ庭へ出候処、砂岩に乗ながら湖
 上へ数丁出候処、引波ニて又陸江打戻々候ゆへ助
 命、隱居并嫡子并妻、是又砂山高ニ遊び居候女子五
 才助命、右嫡子之乳母當時外ニ居候処、重而參宅有
 之、三才の子を抱き出むとして砂山之下ニ成候得共、
 大指物の間に挟まれ候ゆへ圧れず、併潰れ候家の上
 へ砂高く懸り、中々難出候処、遙か向ニ少々明りす
 るを目当として潰れ家の木・竹・畳等の間々を潜り、
 ついに外へ出助命、其後右潰れ家ハ出火之処、上に
 砂山覆ひ候故、消す事不能、然処

^{前田重教}御先代様之御判物等有之ニ付、嫡子者潰家之端之方
 可有之与存、当り之方ハ潜り入て 御判物等取出之、
 少々焼焦候得共形有之、誠ニ是者奇妙与云々、

一、宮坂^通獵師家八軒有之処、六軒砂山之下ニ成、五人即

死、妻子之死骸深く埋れ取出得不申由之事、

但、右生残之者共者、翌廿七日朝手繰網之漁リニ出て、其日之飢を嘗む産業なから哀れ成る共与云々、

一、小立野がけ片原町家過半下江倒れ落、或ハ大二傾き、依之当分毎日三百人余之三度宛賄、町会所ノ近辺於寺院等拵之被下之、中ニも塩屋三右衛門土藏者谷へ落候て名物・珍器微塵ニ相成、其外町方土藏無難なるハ無之、或ハ倒れ、或ハ開き、又ハ曲り、近江町魚店穴藏も多分崩れ、折節用事有之人居者者皆々即死、

一、武士屋敷等・寺社家杯も右同断、損所多、土藏も皆々右同断、

一、廿六日以後、毎日昼夜二三度宛、才川上之方ニ当り山鳴有之、又海も鳴候与云々、

一、黒津舟前大崎辺潟中ニ、百七十間ニ五十間計之島出来、此外ニも右様之島ニヶ所、右続之潟ニ出来、是ハ砂山を水中へ突出し候ゆへ也、都而右辺之浜ス水入イリして歩行危く、砂中之股迄落入所多し、

一、前記の如く、廿六日強地震後、小地震度々昼夜共有

之、此次洪水之沙汰、御儒者新井升平（注記）「新井白蛾嗣

息、易学ニ長ス」茂出水与考之、今来月於無之者、八

九月之内与云々、

一、同月廿六日、強地震以前ニ黒津船向海ニ黒色長サ數十丈見へ、其内何やらん空へ登る舩也、天氣宜く龍卷ニも非ずと各見居たる処、右之黒色形空へ上ると等敷地震に及ぶ与云々、

一、加州ニてハ諸家壁の不切所一軒も無之、尤境塀の不倒所も無之、然るに前記ニ委記する如く、富永右近左衛門屋敷迄無別条、

一、右地震、上ハ小松辺迄大抵同様、御城ハ少々之損シ之由也、京都江之町飛脚之者、江州木の本与長浜之間ニ而震ニ合ふ、少々之地震ニ候旨也、江戸江之町飛脚之者ハ越後雅楽駅と外波駅之間ニ而合ふ処、是又少々之地震与云々、

一、連日才川縁渚之高崩れ落、此響ニ而彼筋川縁・堀縁ハ地面ニ破れ多く、歩行心配与云々、

一、六月朔日山鳴、二日ハ曇り細雨、

一、都而川縁住居ハ洪水之手当、其外雜説共区ニ而人心不穩、

一、怪我人・潰れ家ハ家来末々迄可書出旨御触有之、

一、日雇賃并縄・蔣等^(通)之値、俄ニ引上候ニ付、其族買人

可書出旨、急度町奉行・御郡奉行へ被仰渡有之、

一、才川辺町人岡屋茂兵衛与申者、五月廿六日薬師村本

興寺^(注記)「日蓮宗」江参詣、帰路往還大樋町端ハ一丁計

之所ニ而地震ニ合ひ倒れ候処、暫起上り不得、田毎

之水東西江五、七尺計程宛傾く内ニ、田木板の如く

成て空江三、四尺計上り、並松五、六尺計震れ候を

見受候旨、漸無難ニ令帰宅与云々、

一、石灯笼、的場或ハ築山などニ有之分ハ、竿石之俣ニ

而六尺計飛上り、落る時四方へ飛倒候由、尤所々ニ

よりて差別有之、大同小異也、

一、地面割レ候所江、其後之雨ニ而口広く成、四寸五寸

程宛も明キ有之、御城内ニ而ハ坂下御門内ハ石川御

門前迄之地面ニ数ヶ所割レ出来、其外も所々同様、

一、強地震之節、不崩土塀等、六月朔日・二日迄之連日

之震ニ追々倒れ、途中往来甚危く、人々心配歩行之

為牀ニ候事、

一、御城損シ候御様子承り、町人共ハ為冥加日雇指上度

願ひ、或ハ亭主・せかれ杯出度願も有之、六月二日

迄三三千人余も出候旨、其願書之内、三百人木倉屋

長右衛門、百人宮竹屋伊右衛門、百人堂後屋三郎右

衛門、夫ハ応分限段々有之、

御城内外損所大概

一、尾坂口御石垣崩レ、御櫓下大石・太鼓塀共落、大手

之通りも崩れ落、

一、御作事所・越後屋敷御囲不残倒レ、

一、河北・石川両御門石垣、橋爪五拾間御長屋台石垣崩

レ者無之候得共、右孕ミ出或ハ割レ又ハ欠落候也、

一、松坂之御居間先キ御馬場ひゞり強く、松坂江落懸り、

同所御土藏右之方江傾がり、下通り道亀甲の如く割

レ、其外御土藏共多分損ス、

一、御城中地面所々ひゞり出来、

一、橋爪御門之外地割レ、舁形之内石垣大ニ孕ミ出、御

門潜り之辺石垣孕ミ出、切合セ之両角欠ケ、御玄関

前腰懸之辺も石垣大ニ孕ミ出、

一、石川頼当之外、地割レ、長サ番所際迄二筋、左堀之方者少し地面下リ、右之方御堀際蓮池之押廻シハ半分余二間余リ欠ケ候而御堀江落、やらい半分計ハ其俣有之、右之辺地面不残ひゞり、或ハ地面落入候所も有之、蓮池御門ハ紺屋坂番所前迄之土塀不残倒レ、蓮池前も割レ落入所も有之、御堀之高土塀大高崩レ、中程二ヶ所石垣共崩レ候、柵御門之方蓮池懸塀も新敷所者残リ、其外ハ皆々倒レ、松坂者高石垣崩レ、下通り候事危く、左之方御堀際ハ割レ候而落入候様ニ相成、

一、薪丸御土藏別而大ニ損ス、

一、学校御囲不残倒レ、

一、堂形御囲も多分倒レ、

右地震之節、大山も崩るか如く鳴動し、樹木ハ幣を振か如く、家ハ何方此方へ傾き、屋根石ハ壹尺計も飛揚リ、地面ハ大波の如く、此間之刻限ハ至而暫時也、^(注記)「たはこ三ふく計吞候間与云々」震中者砂煙リニテ四方難見分、家之内の塵芥飛乱し、震後むさき事、足之踏所も無之為躰与云々、

一、御家老役壹万四千石、居邸高岡町、今枝内記易直、下邸長町ニ居候家来息男子壹人、人持組四千石、居邸木之新保、三田村内匠定保、下邸白髭前ニ居候家来之娘二人、浅野町之家之娘一人・下女一人、小立野ニ壹人、震之刻塀等に圧レ死ス、其外半死等之者夥敷有之、

但、近江町之分前記ニ有、

一、野田山御廟損、別而

^{前田新築}高德院様 御廟崩れ多く、御手洗石・御灯笼倒レ、

其外野田一山之墳墓・石塔多分倒レ、中ニも甚キは折レ候、但、越前石者折レ、戸室石者不折レ候事、

一、寺院寺町筋ハ損所少く、門前之見分左而已目立候事

無之候、墓所者大方倒レ、或者折候事等如野田山、

卯辰筋ハ損所多く、墓所等之大破寺町筋ハ大に強し、或者石塔谷江落、寺庵等破損過分也、

一、必死を遁れ候者其数難算へ、土塀之下ハ堀出され助

命之者等夥敷有之、御馬廻組四百石、八坂下居邸鷹

栖^(明包)左門嫡伴吉娘も、守女共土塀下ハ穿り出し助命、

一、大小之怪我人難枚挙、

一、小立野欠原町辺谷へ落候家数二十軒計、小立野大乗寺坂高二も六軒、其外新坂・嫁坂等ニも有之、然処地震よりハ崩れ之間ハ有之候哉、皆々逃出、人損シ僕一人、馬坂者追而崩レ家二軒也、百々女鬼橋落退路無之、右家崩れ落候者共三百十九人也、於慶恩寺等二町会所より賄也、前記互見、

一、当座之御用金坎、町家ハ銀五十貫目御借上有之、
一、御城中損所御囲、まづ当分簀垣或ハ松板並べ打ニて出来、

一、右強地震同刻、越中富山御米藏焼失、

一、右強震、越中川上・今石動辺者厳く、津幡竹之橋も同断、

一、能登者高松辺より奥、左のミ厳敷者震り不申、

一、上口者松任辺迄ハ厳く、浜手震後塩干有之、二三日にて如常、

一、大聖寺者不嚴震之由、

一、幼年御年寄役列三万石、居邸材木町、横山山城隆盛邸内、其外浅之川筋・田井筋・小立野筋暨 御城内石川御門外辺、強地震之刻地割レ強く、ふかくと

割レ目二三度も開きてハ合ひ致候事、足輕番所其外も所々者等見受、往来人もよく見請候、田井筋・鶴間谷など者別て三尺余も地割レ、其中ハ水吹出し候所を見受候者共多く有之、其内吹水一丈余も空へ上り候所も有之候由之事、

一、三社筋等家、縁柱倒れ候所も所々ニ有之、

一、御馬廻組加州御郡奉行五百石、居邸ハ瓢箪町堀端、

梅喜^(談恭)左衛門家ハ大損シ居住難成、依之家内何も類門

杉江長八郎^(邦政)宅へ引移令同居、右家者当分明ケ置、其

外修理不加してハ当冬住居危キ家共者所々ニ多ク有

之、惣躰家損之強弱甚有之、隣家者大破、此方ハ左

程ニ不損とて類ひ夥し、土藏・土塀之損シ者大抵一

統なれ共、是又甚強弱あり、町中土藏平均八步通り

之損じにて一円手入ニ不及与申土藏ハ、武家町家等

ニ至迄一円無之、就中四面土等震ひ落し、一向用事

ニ難立土藏も数多有之、

一、枯木橋高、尾張町入口右之方、新町江之小路惣構川

縁之家共、多分惣川之方へ傾く、別而同所錢商売人

小松屋小右衛門家座敷并土藏共惣川へ崩れ込、右之

外惣而惣川等之高、或者坂之方ニ有之家共者多分傾き、或者崩れ落、

一、尾坂之下、大家者長屋等之損、別而甚く候事、

一、浅野川橋場町、銭商売人羽步屋伊右衛門（注記）「借家也、家主ハ荒木屋八左衛門といふ」、土藏後之惣川へ崩れ落、此並ニ家多く破損、

一、新町福井土佐旅屋等統之後地、石垣崩れ、地面も欠ケ落、母衣町・主計町之町家等へ落重り、家共ハ悉く大破ニ及候得共、怪我人ハ無之、

一、尾張町・今町等之町家土藏多分壁割レ落、或者ゆがミ、戸前開閉難成分多し、

一、前記ニも有如く、近江町魚肆之穴藏多分崩レ、隣家之穴藏と一つニ成候処も有之、家共天秤釣ニ致置候所も又多し、然るに井戸者一円崩レ不申、方円之違故坎と云々、其外所々ニも井戸之崩レハ至而少キ由也、

一、全躰浅野川より北、才川より南之方ハ損シ薄く候事、

一、強地震後、所々井戸水三尺計も増、翌日今如元に減少、且川水悉く二三日も濁ル、是山崩レ故と云々、

一、小立野ハ、材木町高之方統ハ損シ薄く候事、

一、大樋口、地面之割レ目今焰出候、所有之由之事、

一、小松今上、越中筋も強地震とハいへ共、金沢之震ニ競べ候てハ半ニも無之由候事、

一、第一浜手震強し、宮腰道之大石辺ニ休居たりし者之話ニ、大石地中へ埋入候様ニ見へ、並松ハ倒れ候様ニ見へ候由云々、宮腰町家潰れ家夥敷、栗ヶ崎宮之左右崩れ、其下ニ有之百姓家不殘押倒し、併死人者無之、

一、強震暫前、宮之腰等之海波立けしからぬ事三度有之、無程震之節、数多之蟹類・諸魚共水面江浮出候由也、
一、栗ヶ崎筋、砂地八角ニ割レ、其割レ口今皆水吹出候処有之、其中ニハ四五間も統て割レ候処有之、其底ニも又割目今水見得候事、

銀六十五貫目 人夫六万五千人代 新川郡今
同三十五貫目 同 三万五千人代 砺波郡

射水郡今

右者 御城損所等為御用人夫ニ可罷出処、遠所且農業ニ付、代銀を以上納相願、御聞届候事、

但、忝人ニ付忝死宛之図り也、

御届書左之通

今廿六日申刻、国許大地震ニ而金沢城中并櫓者無別条
候得共、所々之囲等損所有之、其外城下侍屋敷・町
家等も破損所多、怪我人等も有之牀ニ御座候、委細之
儀者未相知不申候間、追而御届可仕候、先右之趣御届
申達候、以上、

五月廿六日

御名

右八六月中旬当日之日付ニ而御届有之、追而左之通、八
月中旬頃、委曲之御届書被出之、

加州金沢城中を初、地震ニ而損所等之覚

一、本丸之内石垣孕所 七ヶ所

一、二之丸之内石垣孕所 六ヶ所

一、同 石垣崩所 四ヶ所

一、三之丸之内石垣孕所 七ヶ所

一、同 石垣口開所 壹ヶ所

一、大手口石垣崩所 壹ヶ所

一、玉泉院丸之内石垣孕所 二ヶ所

右之外惣囲土塀大半崩レ損申候、

一、四千百六拾九軒

内

貳千三百五拾七軒

侍并歩足輕小者暨

家来召仕之者

貳百六拾軒

寺社

千五百五拾貳軒

町家

一、貳拾六軒

同潰家数

内

壹軒

社家

廿五軒

町家

一、九百九拾貳

同損土蔵数

内

三ツ

潰土蔵

一、千九百六拾七軒

加州能美郡・石川郡・河北

郡損家等数

内

千三軒

損家

九百六拾四軒

潰家

一、八ツ

石川郡・河北郡之内損土蔵

内

壹ツ

潰土蔵

一、拾五人

死人

内六人女

一、拾式人

怪我人

内五人女

一、牛馬別条無御座候、

右当五月廿六日、国許大地震ニ付、先達而金沢城中并
櫓者無別条候得共、囲等損所有之、其外城下侍屋敷を
初、破損所等有之候段御届御達申候処、其後も少々
宛地震有之、元来初発之強地震ニ城中石垣ゆるミ候
牀ニ而追々損所出来、且又城下侍屋敷を初損所等如斯
御座候、右之外家来之者等居屋敷囲土塀大半崩申候、
以上、

未八月

御名

260「亀田家旧記」四

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵『日本都市生活史料集成』五

一、五月廿六日昼七ツ時、大地震いたし、石川・河北両

郡別而甚敷由、家々・土蔵・壁等皆々裂落、

御城石垣等崩レ、所々地裂候所茂有之、川筋・堤之

類不残崩落、町在損家等多、其夜ハ町々自身番被
仰渡候、

但シ、此方役義ニ而自身番等不仕候ニ付、手代を
以夜中町内一、二度も相廻候事、

一、六月二日、御城塀・石垣等崩レ候ニ付、町内ハ為
冥加人歩指上旨、一統願出候ニ付、此方別願ニ而百
人之人歩指出度相願候事、

一、五月廿七日、御奉行ハ御用有之旨申来、罷出候処、
今般大変ニ而町家損家等多有之に付、御救銀御用有
之三付、調達人等相撰候様被仰渡、即刻相撰指出候
処、御奉行所ニも御撰之分有之、其分被 仰渡候、
委細ハ役所留帳ニ記置、

261「筆のまに」寛政一一年六月二四日条

庫藏

金沢市立玉川
図書館奥村文

廿四日

一、前月廿六日之地震ニ付御届之義、江戸へ申遣、江戸
ニても尚更しらへ候処、的当無之、享保十四年能州
珠洲郡・鳳至郡地震之節御届有之、宝暦九年御城御
類焼之砌、天明九年御領国洪水之砌、先御届有之、

河北郡遺家等数

〔朱書〕後
内 九百六拾四軒

〔朱書〕前
千三軒

潰家
損家

一、八ツ

石川郡・河北郡之内

内 壺ツ

損土蔵

潰土蔵

一、拾五人

死人

内 六人女

一、拾式人

怪我人

内 内五人女

〔朱書〕
一、牛馬別条無召御座候、

右当五月廿六日、申之刻地震ニ付、〔朱書〕「○先達而金沢」
城中損所

等究、左之通ニ御座候、右之外家来之者等居屋敷囲

土塀大半崩申候、以上、

未八月

〔朱書〕
「御名」――

〔朱書〕
「并櫓ハ無別条候へとも、囲等損所有之、其外城下

侍屋敷を初、破損所等有之候段御届申達候処、其

後も少々宛地震有之、元来初発之強地震ニ城中石

垣ゆるミ候牀ニ而追々損所出来、且又城中・侍屋

敷を初損所等如斯御座候、右之外――」

263 「三守御譜」三 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

〔寛政二年五月〕
同廿四日 旭日赤キ事火ノ如シ、廿六日地震、城

垣破壊、人民屋室損スル事頗多シ、山崩死十余人、

累日止マス、加州尤甚シク、越中是ニ次ク、能州漸微

ナリト云、湯○此時金沢廿六日夕七時過大地震ナリ、

264 森田柿園「北国地震記」

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵『金沢市史』資料編六

寛政十一己未年五月大地震記

五月廿六日夕七時過、大地震、誠ニ古来未曾有之

地震ニ而、加越能三州殊ニ甚シ、金沢御城石垣を初、

所々之塀共破損多ク、其外武士屋敷・町家ニ至ル迄

多少損さるハ無之、見聞之処荒増左ニ記載す、

一、御城大手石垣右之方崩ル、同続石垣余程崩ル、同塀

同断、但、左之方ハ近年積替被 仰付故無別条、

一、石川御門前通左右石垣大半崩ル、

一、蓮池御堀御城之方石垣ニヶ所余程崩ル、

一、同御庭囲塀・石垣共御門ノ東之方不殘崩ル、

一、松坂高石垣余程崩ル、

一、時鐘所石垣崩レ危相成候ニ付、三ノ丸早鐘ヲ時鐘ニ

被用、足輕詰所仮ニ出来、右出来迄ハ三ノ丸御番所次之間ニ時計を置、足輕相詰候由、

一、三階御櫓台石垣崩ル、

一、石川・河北兩御門台石垣并橋爪御櫓台石垣等切合石喰違出来、

一、御城惣牀石垣孕石等出来之处所々有之由、

一、御屋形ニ損所無之由、

一、大手先及近江町・彦三町・味噌蔵町辺、小立野筋地震殊ニ強しと云、

一、土堀多崩候ケ所、学校安房守殿向之堀少シ残ル、安房守殿表門分坂之方江懸不殘崩ル、同家中并味噌蔵町所々、前田大炊殿横通不殘、津田玄蕃殿横不殘、

奥村左膳前横不殘、成瀬・富田・佐藤横通過半、長町六番町より織田之辺、穴町今枝家中之辺、安房守殿屋敷内長屋之前往来横ニ破目出来、かた／＼ハ少々卑く段付候、か様之处外ニも有之由、

右ハ殊ニ甚敷处、其外毎町崩レさる处無之、崩さる处迎も石垣、或ハ土堀破損せさる处甚少シ、

一、小立野大乘寺坂・新坂・中坂等家屋甚損シ居住難成、

中ニモ新坂高大乗寺坂迄之間、片原之かけ家共余程崩落、或ハ家下半分程も崩候様成处多し、右之辺都而危ク居住難成家百軒計有之、人数三百人計町会所取計ニて三ヶ寺之御坊江分候て入、男女とも都て壱合宛のつくね飯三度宛被下、日数十日計之間也、家居危キ处仮修覆被 仰付、夫々如元致居住候、潰家之者ハ一類等之内江同居いたし埒立候由、

一、侍家潰家ハ無之、少宛かたかり等出来不致处無之候へとも、中ニハ及大破候处も有之由、強キハ鴨居・天井之落たる处も有之、

一、井戸崩候处無之、一、二軒も聞及候へとも其外ニも有之候哉不聞、常々危き井も有之候へとも崩れず、如何なる理ニヤ不審、

一、土蔵古キハ土四方共披キ、或ハかたかり、或ハ破レ等出来せさるハ壱ツもなしと商人ニ聞けり、甚吟味して拵し土蔵も披、戸之能立付候ハなし、少シけづりなとして立合すよし云り、

一、死人ハ四、五人も有之哉、多キ事なし、慥不聞及、

一、河北郡宮坂村・荒屋村・^(根布)祢ぶ村別而地震甚シ、都而

右之続キ粟ヶ崎・大野・宮腰強シ、黒津舟神主齋藤氏宮坂ニ居住、此家砂山之下ニ成、二男・娘并下女・小者兩人死ス、嫡子ハ宮江行居候内ニ而別条なし、妻ハ幼少人を懷ニ入漸ク逃去、其外家来モ逃出、此屋敷辺所々破レ、一尺或ハ二、三尺も破、内ニ泥水たまり有之よし、宮坂村ハ家数十一軒之内九軒潰レ、其外荒屋・柵ぶ等も潰家多有之由、湧之内江柵ぶ・荒屋・宮坂之向辺三ヶ所ニ島吹出し、何れも百間計、或ハ式百間計も有之、幅ハ狭シ、各今度地震ニ付て出来す、

一、今度之地震、金沢ハ浜手江懸て甚強シ、上ハ小松之あなたハ輕シ、下口ハ俱利伽羅峠を越て越中ハ輕シ、能州ハ至て輕シ、越中も泊境辺ハ猶輕シと云、

一、越前路・近江路次第ニ輕シト云、

一、同日、京・大坂辺少々地震有之由、江戸何之事も無之由、但、江戸ハ廿二日ニ地震有之と云、

一、廿六日、大地震之後夜中数度有之、其内廿七日之曉七ツ時頃、余程強シ、夫ハ六月十日頃迄ハ昼夜四、五度、或ハ二、三度宛毎日地震ス、去とも余リ強キ

ハなし、其後々も折々有之、

一、五月廿四日、日ノ出甚赤ク人恠之、是大地震之前兆坎、

一、廿六日地震之頃、ごうと鳴響と其俣地震す、其音西北より来ルと覺ゆ、右地震之内暫ク空暗ク相成、其外雜説・怪談有之といへとも不足信故ニ不記、

一、金沢町怪我人等、

下近江町 升屋七右衛門妻

觀音町 町医師金丸養伯妻

木綿町 新保屋伊右衛門妻

四丁木町 能登屋伊助妻

中島町 斎田屋又吉妻

下近江町 魚商人升屋七右衛門下人佐兵衛

右佐兵衛、七右衛門方穴藏用事有之人罷在候処、

石垣崩相果申候、

中島町 斎田屋次助

右之者近辺土塀倒レ、右下ニ相成相果申候、

以上、町奉行公言上也、

一、忝人 奥村河内守殿家来小者伝四郎妹

右、小立野欠原町途中ニ而石垣崩下ニ相成果申候、

一、忤人 浅野町平田次右衛門孫次三郎 三才

一、忤人 今枝内記中^(易也)小将和田庄兵衛娘 六才

右、兩人共死、

一、寺社方門前地潰家三拾軒、内小立野欠原町五軒皆潰、

一、黒津舟神主斎藤近江并二男熊之助・四番目娘及下

女・同人忤、家下ニ相成果申候、同夜六時過、右櫃^(櫃)

家焼失、近江死骸二丈計砂下^(掘)出、又地内ニ有

之喜右衛門妻・同人忤、同地内ニ有之七右衛門与申

者之遣候下人伊三郎、家下ニ相成果申候、

一、町奉行支配之潰家拾忤軒、橋場町等土蔵五ツ、

一、宮腰潰家、皆潰忤拾八軒、半潰六拾忤軒、大損三百

忤拾五軒、

一、粟ヶ崎村二十軒、内三軒皆潰、外半潰土蔵十六、外

ニ拾忤軒、家忤尺計地かたかり、地割レ砂吹出シ、

今以水流出、居住難成、あま等ニ住居致シ候由、

一、七月三日朝五半時頃、及九半時頃、地震、両度共少

シ強シ、夜中も両度有之由、寝入、様子不知、

同四日夜、又地震、金沢ハ為指事もなし、湯涌谷ハ

余程強しと云、

265「先祖由緒一類附帳」

金沢市立玉川図書館後藤文庫蔵『金沢城郭史料』

本国播州 御国出生 歳六十七

一、知行高八拾石

後藤彦三郎和睦^{マサチカ}

(中略)

(寛政)

同十一年就地震御城中御石垣数十ヶ所破損仕候ニ

付、公边御届絵図御用被仰渡相勤、同年令御普請

被 仰付、同十二年令定御普請ニ被 仰付、文化七

年迄日勤同様相勤、外手合御用茂被仰渡、数十ヶ所

相勤申候、(下略)

266「御城高石垣之事等」

金沢市立玉川図書館後藤文庫蔵『金沢城郭史料』

一、鶴御丸南御門台左右積方大キニ不宜故、明和年中出

来之所寛政十一年大損ニ相成、積方弱キ故也、兎角

石ノ合せ目曲り候故強ミなく其上不具之切合様ニ候、

夫故年限も不立中ニ大損と相成候ハ此いはれと心得

へし、

(中略)

一、薪丸高金場取残積、此切合様も大かた切合目タツ曲

り居切合様廉相ニ候哉、地震之節余程痛候、金場積

ハ此所沓ケ所ニテ候、宜積方ニ候、積石之内ニ手水鉢ニ相成居候石積有之、右御普請之節積候哉、此手水鉢石ハ往古御本丸ニ下間法橋等住居之節、参詣人之手洗水之由承ル、御本丸ニ式ツ有之内之沓ツ也、

(中略)

一、安永三年鼠多御門続御櫓台積直シ被仰付候処、出来無間茂孕、地震ニ大孕、文化年中崩申候、右積直之節積様甚不宜、角石ハ石垣之柱ニ候、然所角石之外面ニテ石口持せ内ノ方ハかき取、或ハ栗石ヲ指直候故、丈夫ニ持申所なく故右のことくニ候、ケ様ニ弱キヲ好候事根元不知故ニ候、木ニ而致候ても堪申程も有之候、御上ハ難有ものニテ御せんさくもなき物也、(下略)

【解説】寛政一二年(一七九九)五月二六日の夕刻に発生した大地震に関する文献史料を収録した。このほか「金沢城石垣破損絵図」(金沢市立玉川図書館後藤文庫蔵)に、安政三年(一八五六)時点での未修復箇所に限るが、当該地震による被災状況の記載がある。

七月二日・三日

金沢に地震あり。

267「横山氏日記」寛政一二年七月二日条

金沢市立玉川図書館
加越能文庫蔵

二日 天気吉 四半時前地震 夕七半時頃地震

268「政隣記(耳目甄録)」一九

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 拾九』

二日 金沢強地震二度、翌三日も一度有之、最初之地震

者余程強、人々竹藪等江逃入、御近習向者伺 御機嫌罷出候程之由、尤去月廿六日ニ競へ候而者微少与云々、

269「横山氏日記」寛政一二年七月三日条

金沢市立玉川図書館
加越能文庫蔵

三日 天気吉 五時過地震

八月二八日

金沢に地震あり。

270「横山氏日記」寛政一二年八月二八日条

金沢市立玉川図書館
加越能文庫蔵

廿八日 天気吉 夕六ツ時過少々地震

271「高島厚定職事日記」寛政一二年八月二八日条

金沢市
立玉川

図書館加越能文庫蔵

廿八日 快晴 後曇出ル 夜六時地震余程震ル

文庫蔵

272 「政隣記（耳目瓢録）」一九
金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記』耳目瓢録 拾九

同日 金沢、暮頃地震、所ニよりにて強し、
（八月八日）

九月一日

金沢に地震あり。

273 「高島厚定職事日記」寛政一一年九月一日条
金沢市立
玉川図書
館加越能文庫蔵

朔日 五時前小キ地震 村雲出 気色宜 夜宜

九月一九日

金沢に地震あり。

274 「高島厚定職事日記」寛政一一年九月一九日条
金沢市
立玉川
図書館加越能文庫蔵

十九日 朝六時前小キ地震 後降 夜強降

一〇月二四日

年寄役横山隆盛（山城）ら、紅葉見物のため蓮
池庭を訪れる。

275 「横山氏日記」寛政一一年一〇月二四日条
金沢市立玉川
図書館加越能

一、今日、年寄中初而蓮池紅葉見物罷出候処、天氣ハ宜
候得共、未道あしき所も有之、依之蓮池之内下駄

御免被成候段、月番迄被 仰出候旨、演述有之候事、

一、年寄中山城・内匠助・御家老中・若年寄、何茂八
（横山隆盛）（前田直寛）

時退出今直ニ蓮池へ罷越、先御亭江罷出、夫今玉川
（成方）

七兵衛誘引、御庭之内見物いたし、相済、御亭江罷
（信次）

越候処、以勝尾半左衛門緩与見物可仕旨、且被 召

上候御菓子之御残御有合ニ付被下候段、御意有之、

御餅菓子・御薄茶頂戴之、給事坊主、

但、御庭見物之内、刀ハ御亭ニ指置候事、

御餅菓子 よふかん

白葛卷

紅薄皮餅

御猪口ニ砂糖

御煮染 焼魚 椎茸 花卵

焼豆腐 素羅漬瓜

右御礼ハ明日、御用番引取ニ申上筈ニ付、当座之

御礼七兵衛迄申演、七時過、直ニ退出之事、

但、彦三・隼人・太学、暨閑随・南郊ニハ当病

等に而不罷出候事、

276 「諸事被仰出日記」寛政一二年一〇月二四日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

立玉川

一、今日、蓮池 御殿ニ而紅葉 御覽被遊ニ付、年寄中横

山城・前田内匠助并御家老・若年寄暨本多閑随・

大音南校被為 召、御菓子・御吸物・御酒被下、

但、閑随・南校義、不行歩ニ付御断申上、

寛政一二年（一八〇〇）

正月一日

金沢に強震あり。

277 「高島厚定職事日記」寛政一二年正月一日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

立玉川

元日 今曉寅下刻地震強、風荒、夜明テヨリ雪降、八

時過分散ラく降ニ相成、夜雪少、宵ハ宜也、

278 「筆のまにく」寛政一二年正月三日条

金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

三日

一、旧臘以来少々御風氣ニ被為在、今日御寺御参詣御延

引、御礼之義不被 仰付、

但、元日曉七半時過地震、其後雪降、寒氣はけし、

去年五月廿六日之地震後十一月迄も折々地震あり、

279 「諸事被仰出日記」寛政一二年正月朔日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、今曉七半過、大地震、早朝分雪降り候事、

但、年内寒入、且夫前分も例年無之、暖気雪も一

向降り不申事、十二月十二日分寒入、

四月一七日

前田治脩、金谷御殿において草鹿を行う。

280 「筆のまにく」寛政一二年四月一七日条

金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

十七日

一、今日、金谷 御庭ニおいて草鹿被 仰付候付、年

寄中・御家老中・若年寄中望次見物被 仰付候

旨、昨日以織田主税被 仰出候付、今日八半時頃、

〔奥村尚寛〕（本多政成）〔前田孝友〕〔奥村貞也〕〔横山隆盛〕〔前田直亮〕
河内守・安房守・大炊・左京・山城・内匠助・津田

〔政本〕〔政寛〕〔貞一〕〔直央〕
玄蕃・横山藏人・前田図書・織田主税・前田大学、

二御丸（金谷御庭へ鼠多御門橋之向之小口へ罷出、御見物所次之間江罷出、

281「寛政文化間日記」寛政二年四月一七日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

草鹿拜見、年寄中等子弟モ拜見、

四月二五日

前田治脩、金沢を發ち、閏四月七日、江戸に到着する。次いで五月一日、江戸城に登り、参勤の挨拶をする。

282「筆のまに／＼」寛政二二年四月二五日条 金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

一、九半時前、御発駕、各階下御左之方出ル、御家老中等ハ御右之方、山城等ハ橋爪へ罷出ル、階下ニ而近ク御寄被遊、今日ハ天氣も宜と 御意、御機嫌能御発駕被遊奉忍悦旨、河内守（奥村尚寛）ハ御請申上候処、随分無事と 御意有之、平伏仕、但、此御意はきと拝聴不

仕故、御請ハ不得申上候也、

283「御家老方若年寄方日記之内拔書」寛政二二年四月二五日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、今日御発駕御供揃四時、各例剋（中略）登城之事、

一、九半時 御発駕、御先立大学、年寄中・御家老中・若年寄御式台鏡板江罷出候処 御意有之事、

284「諸事被仰出日記」寛政二二年四月二五日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、今日四時之御供揃ニ而、九つ半頃、御機嫌克御發駕被遊、今石動御泊相成候事、

285「諸事被仰出日記」寛政二二年閏四月条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
一、当七日九時頃、御機嫌克御着之旨、如例中飛脚到來、

286「政隣記（耳目甄録）」一九 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
同廿五日 去十一日被 仰出候通、今日益御機嫌克金

沢 御發駕、
（中略）
同日 月次出仕、四時頃、御年寄衆等謁、其節左之通御

用番村井又兵衛殿御演述、畢而退出、

相公様益御機嫌克前月七日、御着府、同十一

日、上使松平伊豆守殿を以、被為蒙 上意、将又

同十五日、御參勤之御礼可被 仰上旨、前日御老

中方（龜）御奉書致到来候得共、御風氣且御持病之御

疳積氣ニ被為在候ニ付、御登 城御断、御參勤ニ付

而之御献上物、御使者を以被指上候処、御用番戸田

采女正殿御受取、御披露可被成旨被仰聞、西丸江も

御献上相済申候、且又奥村左京・前田織江献上物、

同日両 御丸へ持参、御納戸江相納候旨從左京等申

来候、此段為承知申達候事、

（中略）

十五日 月次出仕四時頃相済、其節左之通御用番又兵衛

殿御演述、

相公様御疳積等御快被成御座、去朔日、御参府後

初而 御登 城被遊候処、就右 御懇之被為蒙 上

意、難有被 思召候旨、拙者共迄被 仰下候事、

閏四月二一日

寛政二二年

前田齊広、帰国を許可され、同月一五日、江戸城に登る。次いで同月二一日、江戸を発ち、五月六日、金沢城に到着する。

287「江戸幕府日記」寛政二二年閏四月二一日条

文庫蔵

国立公文書館内閣

上使松平伊豆守（信明）

大納言様より（徳川家康）

同 同人

御台様より（広大院）

同 中山長門守（信勝）

松平筑前守（前田齊広）

公方様（徳川家茂）

卷物二十
大納言様（同十）

御台様（同三）

右、御暇被 仰出候付被遣之、

288「江戸幕府日記」寛政二二年閏四月二五日条

文庫蔵

国立公文書館内閣

一、今已后刻、御白書院 出御、

御暇

御鷹被下
御馬被下

松平筑前守（前田齊広）

一〇五

289「筆のまにく」寛政一二年閏四月二九日条

金沢市立
玉川図書館蔵

廿九日

一、筑前守様、当廿一日午中刻過、益御機嫌能江戸

御発駕被遊候旨、同日発足中飛脚步、今日昼到着、

左京等々申越、御供者前田織江也、

290「諸事被仰出日記」寛政一二年閏四月条

金沢市立玉川
図書館加越能文庫蔵

蔵

一、当十一日、御参勤ニ付、上使西丸々茂御兼帯ニ而、

老中松平伊豆守殿御出、如御例被蒙 上意、畢而

筑前守様御国江之御暇被進、御卷物二拾卷御鷹、西
御馬

丸々御卷物拾卷、将又従 御台様御用人御卷物三卷

御拝領之段申来、

291「筆のまにく」寛政一二年五月六日条

金沢市立玉川
図書館蔵

一、今日六時御供揃ニ而、四時前後ニ金沢御着之筈之旨、

御道中々申来候付、諸役人六半時揃、年寄中五時頃

々段々金谷江罷出、

一、御着之時分、年寄中等御式台之外、二枚開之方罷出

義、御作法書之通也、何も罷出居候処ニ而、御馬御

留メ、河内守々益御機嫌能 御着被遊奉忍悦旨申上

候処、各無事と御意ニ付、蒙 御意難有仕合奉存旨、

御請申上、

一、溜り被罷越候上、以藤田求馬忍悦申上、其後桐之御

間ニおいて御旅装束之俣、年寄中山城・内匠助、御

家老・若年寄、三切ニ 御前へ被召御意有之、

292「政隣記（耳目甄録）」一九

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 拾九』

六日 九時前、

筑前守様益御機嫌克 御着、永原久兵衛 御目見等

御例之通相済、八時前発足「附六月廿三日帰」、且前

記有之通、為忍悦又兵衛殿御宅江参出候事、

五月八日

加賀藩、金沢城大手の石垣修復のため、この

日以降、尾坂門の往来を禁止する。

293「政隣記（耳目甄録）」一九

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 拾九』

五日 端午、為御祝詞出仕、御年寄衆等謁、四時過相済、

付札御横目江

大手御石垣御普請就被 仰付候、当月八日々尾坂御

門往来指留候条、此段夫々可被申談候事、

右、御城代前田大炊殿被仰聞旨等御横目廻状出、此

次九月廿二日、

八月

加賀藩、河北門外・越後屋敷の横に桐木門の造営を命じる。

294 「諸事被仰出日記」寛政一二年八月条

金沢市立玉川図書館
加越能文庫蔵

一、此度河北御門之外、越後屋敷ノ横ニ、如先規桐木御門被仰付、

九月二三日

加賀藩、石川門外・紺屋坂上「鑑留番所脇御門」の造営を命じ、この日以降、同所の往来を禁止する。

295 「諸事被仰出日記」寛政一二年九月二三日条

館加越能文庫蔵

金沢市立
玉川図書館

一、石川御門之外紺屋坂ノ高鑑留番所脇御門、如先規被仰付、今日迄往来留、

寛政一二年

296 「政隣記（耳目甄録）」一九

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
「政隣記 耳目甄録 拾九」

（九月）
九日（中略）

付札御横目江

紺屋坂上腰懸脇御門就被 仰付候、当月廿三日迄

紺屋坂御門往来指留候条、此段夫々可被申談候事、

九月十五日 附、此次十一月四日互見、

右、御城代河内守殿被仰聞候旨等御横目廻状出、

九月二六日

加賀藩、金沢城尾坂門脇の石垣普請完了にともない、この日以降、尾坂門の往来を許可する。

297 「諸事被仰出日記」寛政一二年九月二六日条

越能文庫蔵

金沢市立玉
川図書館

一、今日迄尾坂御門脇大石垣御普請出来、往来仕候事、

298 「政隣記（耳目甄録）」一九

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
「政隣記 耳目甄録 拾九」

（九月）
廿二日（中略）

△ 尾坂御門往来、今月廿六日迄不指支旨、廿二日御横目廻状出、前記五月五日互見、

一一月一日

この日以前、金沢城外紺屋坂上「腰懸御門」が竣工する。次いでこの日以降、紺屋坂門の往来を許可する。あわせて石川門外「水御門」普請のため、この日以降、坂下門の往来を禁止する。

299「政隣記（耳目甄録）」一九
〔二月〕
 四日（中略）
 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
 『政隣記 耳目甄録 拾九』

付札御横目江

△紺屋坂上腰懸御門致出来候ニ付、当月十一日ハ紺屋坂御門往来不指支候事、

一、石川御門外水御門就被 仰付候、当月十一日ハ坂下御門往来指留候事、但、蓮池上之御屋敷并堂形御馬場等江罷出候人々ハ右往来不指支候事、
 右之趣夫々可被申談候事、

十一月三日 附、前記九月九日互見、此次十
 二月十六日互見、
 右、御城代被仰聞候旨等御横目廻伏出、

一一月一日

前田利命（裕次郎。治脩の子）、金谷御殿にて生まれる。

300「筆のまにく」寛政二年一月一日条
 金沢市立玉川図書館蔵
 館奥村文庫蔵

十一日

一、今日、二御丸御広式懷孕之婦人出産、

御男子様御誕生之旨、八時過、織田主税（益方）ハ案内有之、
 今夕ハ脇を除、十七日迄、暮目相勤、委曲別帳ニアリ、

301「諸事被仰出日記」寛政二年一月一日条
 金沢市立玉川図書館蔵
 図書館加越能文庫蔵

一、今日、於金谷御殿御男子様御出生、御生母組外武村大九郎妹、御乳付岩田内蔵助妻罷出候由、午刻御名奉称、

302「筆のまにく」寛政二年一月二三日条
 金沢市立玉川図書館蔵
 館奥村文庫蔵

十三日

一、右御誕生之義、今日織田主税（益方）を以、御用番へ被仰

出、依之各退出、直ニ金谷 御殿江罷出、

筑前守様江御祝詞申上、

相公様

寿光院様

御前様・松寿院様江ハ今日之日付ニ而昨夜江戸へ申上、

但、河内守者臺目御用有之ニ付、

筑前守様へ以紙面申上、

一二月一六日

幕府、前田齊広の家臣一人に叙爵を認め、次いで長連愛（九郎左衛門）、従五位下甲斐守に叙任される。

303 「諸事被仰出日記」寛政一二年二月二八日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、今日、江戸表へ御使之振を以、御使番堀兵馬を

以、年寄中江今般諸大夫御願之通被仰出ニ付、長

九郎左衛門義、甲斐守江被仰付旨被 仰下、頭分以

上為御祝義、来正月二日ハ十五日迄之内、年寄中・

御家老中江相勤答、

寛政一二年

304 「政隣記（耳目甄録）」一九 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
廿八日 歳末為御祝詞例月出仕之人々、登 城、御帳ニ

附扣罷在候処、九時頃、柳之御間列居、申談有之

候上、御年寄衆等御列座、左之通安房守殿「諸大夫

一件之義ニ付、今日ハ都而来正月御用番之安房守殿御懸り

也」御演述、畢而左之通、恐悦之覚書於横廊下披見

申談有之、退出之事、

但、右御弘以前、歳末ニ付而之御触有之、一先御

引、重而御列座有之、御弘有之、

去十五日、御老中方依御奉書、翌十六日、御登

城可被遊候処、御疋積氣ニ付、

御名代飛驒守様御登 城被成候処、於御白書院御

老中方御列座、御願之通御家来諸大夫被 仰付旨、

御用番戸田采女正殿被仰述、誠以難有御仕合被

思召候、依之長九郎左衛門義、甲斐守江御改被成候、

此段何も江可申聞旨 御意ニ候、

諸大夫代御願之通被 仰出候、為御祝詞安房守殿

宅江今日可罷越候、幼少・病氣等ニ而今日登 城

無之人々ハ、向寄ハ伝達、為御祝詞安房守宅江以

使者申越候様可被申談候事、

一二月二二日

この日以前、金沢城石川門外「水御門」の普請が完了する。加賀藩、この日以降、坂下門の往来を許可する。

305「政隣記（耳目甄録）」一九
〔二月〕
金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
 『政隣記 耳目甄録 拾九』

十五日 月次出仕、四時相済、

付札御横目江

△ 石川御門外水御門致出来候ニ付、当月廿二日夕坂下御門往来不指支候事、右之趣夫々可被申談候事、

十二月十六日

右、御城代大炊殿被仰聞候旨御横目廻状出、

享和元年（寛政一三年。一八〇二）

正月一〇日

加賀藩、金沢城西町口門の倒壊につき、同所

の往来を禁止する。次いで修復完了にともない、二月二六日以降、同所の往来を許可する。

306「政隣記（耳目甄録）」二〇
〔正月〕
金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
 『政隣記 耳目甄録 廿・廿一』
 八日（中略）

西丁口御門、今晚之風ニ而吹倒候ニ付、今日夕御修覆中右御門往来指留候条、此段夫々可被申談候事、

正月十日 附、右御修覆出来二月廿六日夕往来有、

右、御城代大炊殿被仰聞候旨等、例之通御横目廻状出、

三月一三日

前田斉広、金沢を発し、同月二六日、江戸に到着、四月一五日、江戸城に登り、参勤の挨拶をする。

307「筆のまに／＼」享和元年三月一三日条

金沢市立玉川図書館史料文庫蔵

十三日

一、今日

〔前田斉広〕
 筑前守様益御機嫌好、金沢 御発駕被遊、御供御家

老津田玄蕃、

308「筆のまにく」享和元年四月五日条

金沢市立玉川図書館
奥村文庫蔵

五日

一、筑前守様、前月廿四日、浦和御泊、翌廿五日、江

戸 御着之筈之処、廿五日王子筋御成ニ付、同日浦

和御逗留、廿六日御着被遊候様從

相公様被 仰遣、廿五日同駅御逗留ニ而、廿六日午

中刻、江戸御着、同日中飛脚、今五日到着、其段申

来、

309「江戸幕府日記」享和元年四月一五日条

国立公文書館内
閣文庫蔵

一、今五半打式寸五分廻り、御黒書院江

出御、

参府

松平筑前守

御太刀一腰
銀三十枚
巻物十

310「政隣記（耳目甄録）」二〇

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿・廿』

十三日 前記之通

筑前守様、五時御供揃ニ而四時過、益御機嫌克御発

駕、今夜今石動御泊之事、

右ニ付、前記之通為御祝詞、御用番内匠助殿御宅

江参出、但、御日図之通御旅行之処、御成ニ而戸田
川舟留ニ付、浦和駅二一日御逗留、今月廿六日、江
戸 御着府、

四月二一日

幕府、前田治脩の帰国を許可する。

311「筆のまにく」享和元年四月二六日条

金沢市立玉川
書館奥村文庫蔵

廿六日

一、当月十三日、於江戸石野主殿助を以被 仰出候趣、

左京等々以紙面申越、左之通、

去十一日、上使安藤对馬守殿を以、御国許へ之御

暇被蒙 仰、御例之通、御拝領物被成、

大納言様も 上使水野出羽守殿を以、御拝領物被

成、從

御台様も御使中島伊与守殿を以、御拝領物被成候、

然処、此節御持病御疝積氣御不出来ニ付、近日之内

御暇御礼之御沙汰有之候へとも、御登 城難被成

候、御快次第御届可有御座旨、今日御用番へ被仰置

候、依而此段被 仰聞候、金沢年寄中へも可被申遣

旨被 仰出候、

四月十三日

312 「政隣記（耳目甄録）」二〇 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿・廿二』
廿六日 （四月） 去十四日江戸発之町飛脚来着、左之趣申来、

去十一日、以上使御老中安藤（信成）对馬守殿、

相公様御国許江之御暇被 仰出、御例之通白銀・御

卷物御拝領、從

大納言様も以上使御老中水野出羽守殿、被蒙 上意、

御卷物御拝領、從

御台様も以上使御老中水野出羽守殿、御卷物

御拝受、夫々御都合克相済、

筑前守様ニも就御参府ニ、以上使安藤对馬守殿、被

為蒙 上意候事、

四月一七日

金沢に地震あり。

313 「補忘録」 享和元年四月一七日条 金沢市立玉川図書館加越能
文庫蔵

一、十七日、雨天、

朝六時過地震、昼八時地震、此時大分震、

314 「政隣記（耳目甄録）」二〇 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿・廿二』

十七日 （四月） 晴陰、卯二刻・丑上刻・午五刻、三度地震、

五月一日

加賀藩、前田利命（裕次郎。治脩の子）のために、

この日から同月五日まで金沢城土橋門外に幟
を立てる。

315 「政隣記（耳目甄録）」二〇 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿・廿二』

同日 （中略）

裕次郎殿御幟、土橋御門外堀端ニ相建候、来月朔日

迄、御家中并町方男女拝見之義可被申渡候、

五月一〇日

加賀藩、金沢城二ノ丸御居間先柵下の石垣修

復につき、この日以降、数寄屋屋敷・唐門・

松坂門の往来を禁止する。

316 「政隣記（耳目甄録）」二〇 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿・廿二』

五日 （五月） 端午為御祝詞例月出仕之面々登 城、如例、

二之御丸御居間先柵下御石垣御普請就被 仰付候、

御数寄屋々敷唐御門并松坂御門往来、当月十日分指
留候条、此段夫々可被申談候事、

右、御城代大炊殿被仰聞候旨等御横目廻状如例出、

一〇月二日

加賀藩、金沢城石川門石垣修復につき、この
日以降、同所の往来を禁止する。次いで同月
二五日から往来を許可する。

317「政隣記（耳目甄録）」二〇
（九月）
九日（中略）
金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿・廿一』

付札

御横目江

石川御門続御櫓下石垣孕所御普請有之候ニ付、右御
櫓取除被 仰付候間、来月二日分往来指留候条、御
城中御番人且又就御用罷出候人々、河北御門分往来
之筈ニ候、火事之節者石川御門往来不指支候、此段
一統不相洩様可被申談候事、

九月廿五日 附、十月廿五日分往来不支段重而廻状、

別紙御城代大炊殿被仰聞候旨等御横目廻状出、

享和元年（寛政一三年）

318「寛政文化間日記」享和元年一〇月二日条
文庫蔵

金沢市立玉川
図書館加越能

石川後御櫓御普請ニ付、河北往来、

319「寛政文化間日記」享和元年一〇月二五日条
越能文庫蔵

金沢市立玉
川図書館加

今日分石川往来、

*この年

加賀藩、金沢城内松坂門続櫓台の石垣、修復
する。

【解説】以下二点の絵図に拠る。すなわち松坂門続の櫓台石垣に
関する絵図「石垣東南角根水之図」（金沢市立玉川図書館後藤
文庫蔵）に「享和元辛酉年十月吉日」とあり。また、「松坂御
門続御櫓台御石垣出来指図絵図」（同上）は右とほぼ同様の絵
図（図面）である。この二点の絵図の存在から、享和元年に松
坂門続櫓台の石垣修復が行われた可能性が認められる。

享和二年（一八〇二）

三月九日

前田治脩の隠居が許可され、前田斉広が家督を相続する。四月一五日、斉広、御礼のため江戸城に登る。

320 「江戸幕府日記」 享和二年三月九日条

国立公文書館内閣文庫蔵

一、今九半時過、

大納言様（徳川家慶）ニも御同所江被為 成、

御座間

養子

松平筑前守（前田 斉広）

右、加賀守病氣付、願之通隠居被 仰付、家督無相

違養子筑前守江被下旨、於

御前被 仰出、御懇之上意有之、

松平筑前守

右、居殘御礼申上之、於御白書院縁頼謁老中、

321 「御家老方若年寄方日記之内拔書」 享和二年三月九日

条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、九半時過、早乗ニ而辻平之丞（彰 信） 御城へ罷帰、

相公様御願之通御隠居、

筑前守様江御家督被 仰出候段被 仰進、内匠助・（前田直憲）

玄蕃江茂右之御様子被仰下、於平之丞席江罷出演述

候、同人江先及御請、

（中略）

一、相公様御名代前田信濃守殿（長 禰）、六半時前御越、今日於

御座之間御願之通御隠居、

筑前守様江御家督被 仰出候趣、一通り御客方組頭

中川平膳を以被 仰上、以同人御挨拶被仰進、追（忠 奸）

而御小書院溜ニおゐて二汁六菜之御料理出、御饗応

有之、相済、勝尾半左衛門を以、兼而ハ御逢被成

候而 上意之趣御拝聴可申成思召候処、気候ニ御触、

今日ハ別而御持病御不出来ニ付、其御儀不被為在候、

依之上意之趣委細御書取御封し被指上候様申成度旨

被仰達、則御調御封し、以半左衛門被上候処、委

細 上意之趣御書取 御拝見被成、段々御懇之御儀
忝御仕合被思召、且又後剋ハ御老中方等御廻勤之
御名代も 同様申成、御大義ニ被思召候旨、以同人
被 仰入、重而御請御申上相済、御退出る直ニ御老
中・若年寄衆御廻勤之由之事、

一、筑前守様御城御下りる直ニ西ノ御丸江御登城、御下
り、諏訪文右衛門殿へ御立寄、夫々御老中方・若年
寄衆御勤、八半時ノ前 御帰殿、中ノ口御式台へ被
為入、

322「筆のまにく」享和二年三月一七日条
金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

一、当九日江戸発足之早飛脚、道中川支ニ而逗留故、今
日到着、今月八日、御老中方御奉書三付、翌九日、
相公様御名代 前田信濃守殿并
筑前守様御登 城被成候処、於御座之間
御願之通

相公様御隠居

筑前守様御家督之被蒙 仰、段々御懇之被蒙 上意
之旨、前田内匠助等々申越、其紙各河内守・安房守・

享和二年

（奥村實也）（横山監盛）（前田貞一）（横山政賢）
左京・山城・図書・又五郎、奥之間ニおいて也、披見之
後、布上下着用、席ニ如例列座候而、各恐悦互申述、
右三付、先昨日頭分以上へ申聞候付、御用番々振狀
出之、追而委曲者御使者以被 仰出候筈也、

323「江戸幕府日記」享和二年四月一五日条
国立公文書館内閣文庫蔵

御黒書院

御太刀一腰
銀百枚

卷物二十
綿五十把

御馬裸背二疋
御刀備前国師光

代金二十枚

御太刀一腰
銀三十枚

卷物五

右御札相済而

一、御白書院江 出御、

（中略）

隠居之御札

松平肥前守
（前田治修）

名代前田信濃守
（長頼）

家督之御札

松平加賀守
（前田齊広）

松平加賀守家来

長甲斐守
（連愛）

前田内匠助
（直義）

忌 今枝内記

卷物五
銀馬代
同

卷物三
銀馬代

津田玄蕃^(政本)
前田織衛^(道清)
忌

卷物三
銀馬代

不破彦三^(為章)
織田主税^(益方)

同

324「御家老方若年寄方日記之内拔書」享和二年四月一五

日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫藏

一、今日御家督之御礼被 仰上候付、六時不遲御供揃、
依之甲斐守等五人、六時前長袴着用、御殿江相揃
候事、
^(長連愛)

(中略)

一、加賀守様御登城、於御黒書院御礼、御首尾能被 仰
^(前田齊広)

上、御懇之被為蒙 上意、御手自御熨斗鮑御頂戴、
於御白書院甲斐守等五人御目見被 仰付、
^(前田治勝) 相公様御隠居之御礼、御名代前田信濃守^(長禰) 御登
城、御首尾能被 仰上、

加賀守様西ノ丸御戻、諏訪文右衛門殿へ御立寄、
^{(部脱)(定昭)}

御装束被召替、御老中・若年寄御勤、九時過御帰殿
被遊候付、内記・織江儀御礼御首尾能被 仰上、
^{(今枝易也)(前田通清)}

相公様御名代を以御首尾能被仰上候、恐悦以与右衛
^(青木貞幹)

門申上候所、以同人御意有之、

相公様江 以半左衛門追而御名代を以御礼、御首尾
^(勝尾信勉)

能被 仰上候、

加賀守様御礼御首尾能被仰上候、恐悦申上候処、以
同人 御意在之、

325「筆のまにく」享和二年四月二四日条

金沢市立玉川図
書館奥村文庫藏

廿四日

一、当十五日、

加賀守様御家督之御礼可被 仰上旨、御老中方御連
^(前田齊広) 名之御奉書并御家来七人 御目見被仰出候間可被召
連旨、御別紙前日到来、則御登 城、於 御黒書
院 御礼被 仰上、御懇之被為蒙 上意、御手自御
^(連愛)

のし蛇御頂戴、長甲斐守・前田内匠助・津田玄蕃・
^(為章) 不破彦三・織田主税^(益方)主税^(為章)八若
^(年寄也) 御目見被 仰付、右之
趣、甲斐守等

趣、甲斐守等

御前へ被召 御意、頭分以上へも可申聞旨

御意、
^(前田治勝) 相公様御隠居之御礼、以 御名代可被 仰上旨、御
老中方御連名之御奉書二付、為御名代前田信濃守殿
^(長禰)

御登 城、御首尾能御礼被仰上候旨等、十五日中飛脚、今晚到着、甲斐守等令申来、

但、今枝内記(易直)・前田織江八忌中二付、不被召連、

忌明ニ献上物可仕哉之旨、御用番牧野備前守殿へ(忠精)

聞番伺候処、不及献上旨御指図有之旨茂申来、

326「政隣記(耳目甄録)」二〇金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

十八日 昨日御用番左京殿依御廻文、今朝五半時令頭分(三月)

以上登 城、於表御式台御帳ニ附、四半時頃、柳之

御間ニ一統列居之处、御年寄衆等御列座、左京殿左

之通り御演述、畢而各退出、

相公様近年御持病之御疝積等度々御指発、去夏以来(前田治修)

御勝不被成、色々被遂御保養候得共、御全快可被遊

御様子無御座、依之御隠居、

筑前守様江御家督御相続之義、御願被成候処、御老(前田齊広)

中方依御奉書、去九日、

相公様御名代前田信濃守殿并(長福)

筑前守様御登 城被成候処、於御座之間

相公様御願之通御隠居、

筑前守様江御家督被 仰出、段々御懇之被為蒙上意

享和二年

候旨、前田内匠助等令以早飛脚申来候、先以恐悦之(直業)

御事ニ候、此段先為承知申達候、御祝詞被申上候儀

者、追而委細之御様子被 仰下候上可申達候事、

今日頭分以上上江申聞候趣、当病等ニ而不罷出人々

江者筆頭又者向寄令伝達有之様、夫々可被申談候

事、

三月十八日

右、左京殿被仰聞候旨、御横目中申談候事、

(中略)

同日 於江戸御家督御礼被 仰上候ニ付、御表向御勝(四月一日)

手共御目見以上熨斗目・布上下、其外者服紗袷・

布上下着用、翌十六日者一統服紗袷・布上下着用、

但、前々者御当日令三ヶ日布上下着用、平詰ニ候得

共、十七日御日柄三付、右之通兩日之旨等昨十四日

御横目を以内匠助殿等被仰聞、且今日頭分以上上江御

弘「於金沢廿五日御弘之趣与同断ニ付記略」之趣於御席(注記)

内匠助殿御演述、畢而於竹之間ニ御祝詞之御帳ニ附

夫令今日・翌十六日之内、在江戸年寄衆等六人之御

小屋江為御祝詞相勤候様被仰聞候旨、御横目中申談

候事、

同十五日、頭分以上於船之間二年寄衆等一席ニ而御祝之御吸物・御酒・御肴一種被下之、給事御大小將、指引同御番頭・御横目、取持御表之物頭、且御近習頭を以 御意有之候、猶御歩並以上江も御台所辺ニ而御吸物・御酒被下之、

三月一日

前田齊広が筑前守から加賀守、前藩主前田治脩が加賀守から肥前守に改める。

327 「御家老方若年寄方日記之内拔書」 享和二年三月二

日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、左之通表方江被仰出、

加賀守様与御名替之儀、

相公様(前田治脩)御願被成置候処、御願之通今日被 仰出候、

三月十一日

一、御横目江左之通申渡、

相公様御名

肥前守様与御改、

(前田齊広)
筑前守様御名

加賀守様与御改被成候条、一統可被申談事、

三月十一日

328 「筆のまにく」 享和二年三月二三日条

金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

廿三日

一、当月十四日江戸発足町飛脚・早飛脚步ニ伝附来状之内、

(前田治脩)
相公様御名

肥前守様与御改被成度、

(前田齊広)
筑前守様御名

加賀守様与御改被成度旨、從

相公様御願之通、今十一日被 仰出候付、一統申談

候様、御横目へ申渡候条、於其表も可被仰触候、則

右写一通指進申候、以上、

三月十一日

(直業)
前田内匠助・津田玄蕃判

(尚寛)
奥村河内守等十二人様

追而於此表者、前々之振を以

御両殿様へ恐悦申上候筈ニ御座候、以上、

右写とハ御横目へ申渡候趣之写也、爰ニ略之、

六月一三日

前田齊広、左近衛權中將に昇進する。

329「御家老方若年寄方日記之内拔書」享和二年六月一三

日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、昨日依御奉書五時過御登城、八時前 御帰殿、

一、加賀守様被任 (前田齊広) 中将候段御様子、九時耆部、御左

右聞御使戸田伝太郎 (貞幹) 御城へ罷帰、右之趣青木

与右衛門席へ罷出、甲斐守等へ申聞候付、各布上下

ニ改候事、

(中略)

一、御弘之趣左之通、頭分江織江申渡、(前田通清)

昨日 御老中方御連名之御奉書ニより今日 御登城

被成候処、於御白書院被任 中将候段、御老中方御

列座、御用番安藤对馬守殿御演述、難有被 思召候、

此段何茂可申聞旨 御意ニ候、

右為恐悦、頭分之面々今日明後十五日兩日之内、甲

斐守・織江御貸長屋江相勤候様可申談旨、御横目へ

表方ニ而申渡有之、

享和二年

330「筆のまにく」享和二年六月二日条 廿一日

金沢市立玉川
図書館奥村文庫蔵

一、左之 御書、昨夜到来、今日各拝戴之折者不致出席

候故、与力神戸直次郎 御書御本紙持参之、拝戴之

使、同人へ従家来為渡之遣候、

但、受取候も家来ニ為受取候、此義ニ付、直次郎申

聞候義有之、夫々相糺候へとも此記ニハ略之、

猶以、左之趣西尾隼人江茂可被申聞候、以上、

御老中方連名之奉書到来付而、今日令登 城候

処、手前儀、中将被 仰付候由、御老中列座、安藤

对馬守殿被仰渡、難有仕合候、右、為可申聞以飛札

申達候、頭分以上江茂可被申聞候、謹言、

(前田齊広)
中将

六月十三日

御実名御判

奥村河内守殿 (尚寛)

本多安房守殿 (政成)

前田大炊殿 (孝友)

村井又兵衛殿 (長世)

奥村左京殿 (實世)

横山山城殿（隆盛）
（直義）

前田内匠助殿

今枝内記殿（易直）

津田玄蕃殿（政本）
（貞一）

前田図書殿

不破彦三殿（為章）

横山又五郎殿（政賢）

331「政隣記（耳目甄録）」二一〇

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿・廿一』

廿二日 昨日御用番依御廻状、今日頭分以上登城、如

例御帳二附、四半時過、柳之御間列居之处、御年寄

衆等御列座、御用番安房守殿左之通御演述、

当月十三日御登城被成候様、前日御老中方御連名

之御奉書到来、則御登城被成候处、被任中將候

段、御老中方御列座、安藤对馬守殿被仰渡、難有

御仕合被思召候、此段何も江可申聞旨、拙者共迄

以御書被仰下候事、

右相済、御同間於横廊下安房守殿御渡之由二而、左

之御覚書披見候様、御横目中申談有之、

七月二五日

前田斉広、帰国を許可され、同月二八日、江

戸城に登る。次いで八月一三日、江戸を發ち、

同月二五日、金沢城に到着する。

332「江戸幕府日記」享和二年七月二五日条

国立公文書館内閣
文庫蔵

上使安藤对馬守（信成）

大納言様（徳川家慶）

同 水野出羽守（忠友）

御台様（広大院）

銀百枚
卷物三十
大納言様（信成）

卷物二十
御台様（信成）

右、御暇被仰出候付被遣之、

333「御家老方若年寄方日記之内拔書」享和二年七月二五

日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、御本丸 上使安藤对馬守殿、西丸 上使水野出羽守（忠友）

殿、御出候由、九時過御小人目付罷越之由聞番申聞

候事、

一、九半時頃、安藤对馬守殿御城下り附人来候二付、

甲斐守・織江・主税、大御門外へ出、頭分御白洲江

罷出、聞番御門外へ罷出有之、上使御下乗合聞番御先立、御前大御門外迄御出向、御誘引、御大書院江御迎、

上意之趣御拝聴、御例之通御拝領物御頂戴相濟、

上使御座被致候上御挨拶被遊、御勝手へ被為入、御

熨斗三方出之、重而御前御出、御小書院へ御誘引、

御挨拶之上、御勝手方二御着座、追付御料理^{二汁六菜}塗木具

出之、御前御相伴向詰御持參、御酒之上御引蓋、

飛驒守様御持參、御吸物出、御土器御盃事有之、

御返盃之節、御刀^{美濃守氏房}御取持御先手武藤^{代金拾五枚}

庄兵衛殿御持參被進之、御饗応相濟、御供茶御

前御持參、御薄茶被出相濟、上使御座被致候上、

御前御出御請被仰述、八時頃御退出二付、御前

御誘引、最前之通御送被遊、甲斐守等も最前之通

罷出候事、

(中略)

一、甲斐守等三人、今日以上使御国江之御暇被進、御

例之通御拝領物有之、御首尾能相濟、恐悦奉存候段

以金三郎申上候处、御意有之、

相公様江以助四郎申上候所、以同人御意有之事、

334「江戸幕府日記」享和二年七月二八日条

国立公文書館内閣文庫蔵

御黒書院

御刀

関兼光
代金二十枚

御暇

御鷹
御馬被下

初而松平加賀守^(前田齊広)

一、今四江五分前、御白書院江出御、

(中略)

松平加賀守家来

卷物五

長甲斐守^(通愛)

同

前田織江^(通清)

335「御家老方若年寄方日記之内拔書」享和二年七月二八

日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、今日御暇之御礼被仰上候二付、主税儀布上下着用、^(龜田益方)

六時過出席、神戸金三郎を以相伺御機嫌候处、益御

機嫌能被成御座候段等御意有之、追付致退出、重

而寅剋二出席之事、

一、御暇之為御礼六半時前御出、而御丸へ御登城、

甲斐守・織江御供被召連、御下城合御老中方并水^(長通愛)
^(前田通清)

野出羽守殿・若年寄中御勤、九半時前御帰殿之事、^(忠友)

336「筆のまにく」享和二年八月二日条 金沢市立玉川図書館
奥村文庫蔵

二日

一、前月廿五日、上使安藤対馬守殿を以、初而御国許

へ之御暇被 仰出、如御例御拝領物有之、

大納言様（徳川家慶）も水野出羽守殿を以 上意御拝領物、從

御台様（徳川家慶）も御用人小笠原大隅守殿を以御拝受物御座

候旨、同日発足早飛脚步、今二日到着、甲斐守等（長連愛）も

申来、

337「筆のまにく」享和二年八月六日条 金沢市立玉川図書館
奥村文庫蔵

六日

一、右 御書到来ニ付、今日各不時出席拜戴之、拙者義

積氣等不出来ニ付不罷出、宅へ留書与力渡辺沢石衛

門を以 御書到来、常服着用、拜戴之、其 御書左

之通、

猶以左之趣、前田修理（知周）・西尾隼人江茂可被申聞候、

以上、

去廿五日、以 上使安藤対馬守殿初而国許江之御暇

被 仰出、白銀・巻物拝領之、從

大納言様茂以 上使水野出羽守殿致拝領物、将又從

御台様（広大院）以小笠原大隅守殿巻物致拝受、今日為右御札

登 城候処、於御黒書院御懇之上意、殊御腰物・

御鷹・御馬被下置之、長甲斐守・前田織江（連愛）

御前江被 召出、其上巻物拜戴之、重畳難有仕合候、

此等之趣為可申聞、以飛札申達候、頭分以上江茂可

被申聞候、謹言、

中將

七月廿八日

奥村河内守殿（尚寛）

本多安房守殿（政成）

前田大炊殿（孝友）

村井又兵衛殿（長世）

奥村左京殿（實直）

横山山城殿（隆盛）

前田内匠助殿（直義）

今枝内記殿（易直）

津田玄蕃殿（政本）

前田図書殿（貞）

不破彦三殿（為幸）

齊広御判（前田）

横山又五郎殿^(政賢)

338 「御家老方若年寄方日記之内拔書」享和二年八月一二

日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、明日 御発駕ニ付、甲斐守^(長連愛)・織江^(前田通清)・主税一所二十郎^(織田益方)

左衛門を以御機嫌相伺、

339 「筆のまにく」享和二年八月二〇日条

金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

廿日

一、当十三日、江戸発足中飛脚、今日到着、

中將様益御機嫌好、十三日午ノ后刻、御発駕之旨^(前田齊広)

織田主税^(益方)申来、且又同日天氣も宜敷、同夜六時頃、

浦和駅 御止宿之旨、甲斐守^(長連愛)・織江^(前田通清)申来、御泊所

左之通、御供長甲斐守・前田織江、

340 「御家老方若年寄方日記之内拔書」享和二年八月二五

日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、今朝六時之御供揃ニ而同剋過津幡駅 御発駕、森下

ニ而御小休有之、九七部 御着城、三ノ御丸橋ノへ

年寄中罷出、同所引離、人持・頭分各罷出候処、

御意有之、表御式台階下江 御城代河内守罷出、同^(奥村尚寛)

御勝手之方へ御家老中罷出候処、御意有之、階上

若年寄^(前田重光)大学御先立、実檢之御間入口前、飛驒守^(前田利考)

様等御使者罷出、御奏者番披露、御居間書院入口筋

違御席下之内ノ関屋中務御先立被為入候事、^(政良)

一、甲斐守^(長連愛)・織江^(前田通清)義、御供直ニ登城、御近習頭を以

御着之御祝詞、且御機嫌も相伺候事、

一、今日御着城之為御祝儀、御肴一種代金百疋目録を以

年寄中等献上、甲斐守・織江義、檜垣之御間御縁類

ニ而渡辺久兵衛^(幸)を以指上候処 御喜悦之旨以同人

御意有之、

341 「筆のまにく」享和二年八月二五日条

金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

廿五日

一、昨夜津幡 御泊ニ而六時不遲御供揃之旨、從御道中

先達而申来候付、何も六時揃、同席中等ハ六半時

前後段々登城、

但、拙者義積^(重)氣等未宜、当四日出席後遂保養、今

日ハ押而罷出候付、遅刻ニ成可申と、其段御用番

へ前廉相達置、今曉津幡迄兩人附人遣し、御供廻

り候ハ、及案内候様申付置、右附人者未罷越候へ

とも六半時過、登城、

〔^{（頭注）}人持中以下、今日下乗所遠候へとも年寄中・

御家老中・若年寄中者常之通也〕

一、御鈴之封印見届ニ罷越、不支候ハ、及案内候様、

大炊^{（前田孝友）}与力へ申付置、五半時過見届ニ罷越、不支旨

申聞候故、河内守^{（奥村尚寛）}・大炊共罷越、檜垣之御間御縁類

与御近習頭中村才兵衛^{（直一）}先へ立案、御鈴御廊下通ニ

関屋中務并御近習頭相詰、河内守等兩人共御鈴御杉

戸前ニ着座、与力角尾金左衛門封ノ上巻を取候上、

河内守見届之、^{（立候而封付居候 処を見届候也）}

其頃大炊も見届之旨、直ニ退去、^{（此時者御居間書院之邊 迄才兵衛先へ案内）}

御着城之旨、右封中村才兵衛を以被渡下置、受取候

而火中之、

一、大樋へ被為入候附人参り候上、安房守^{（本多政成）}・大炊・

左京・山城・内匠助、橋爪へ罷出、追付河内守御

玄関階上迄罷越、板之処ニ着座、御家老中等も同様

也、四半時過、御先三追御玄関前へ参り候節、階下

へ河内守罷出、御前御右之方也、御左之方へ御家老

中罷出、若年寄前田大学^{（直史）}卜御先立衆・御家老中末座

横山又五郎^{（政賢）}之次ニ引離、少シ進ミ出着座、追付栗毛

之御馬ニ被為召候而被為入、河内守着座之前ニ而

御中座被遊候処を見上候而、益御機嫌能御着 城被

遊、恐悦之至奉存旨申上候処、今日ハ天氣も宜と

御意ニ付、恐悦仕旨申上候処、城中替ル義も無之哉

と 御意ニ付、御別条無御座旨及御請、次ニ御家老

中へ 御意有之、被為人 御着、午上刻也、

342「政隣記（耳目甄録）」二〇 ^{（八月）} ^{〔政隣記 耳目甄録 廿・廿一〕} ^{〔金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵〕}

今月廿五日 以上使初而御国許江之御暇被蒙 仰、同

廿八日、御暇之御礼等被 仰上、

（中略）

十五日 月次出仕、例之通四時相済、

今般御入国、今月六日江戸 御発駕、同十九日御着

城与先達而被 仰出候処、少々時氣ニ御触御勝レ不

被遊ニ付、六日御発駕御延引之処、段々御快然ニ付、

今月十三日江戸御発駕、同廿五日 御着城与被 仰

出候段、去八日立之早飛脚今日来着申来候事、

（中略）

廿五日、津幡駅朝六時不遲御供揃ニ而御発駕、森下御中

休、昼九時頃、益御機嫌克 御着城被遊候、前記

御用番山城殿御廻文之通三之御丸江奉出迎候処、

御意（注記）一出マシタカ与「有之、夫を御祝詞於御式台ニ

御帳ニ附、夫々御用方相済、八時頃致退出候事、附、

同役一人宛毎日四時を八時迄詰之事、

八月六日

加賀藩、金沢城二ノ丸・金谷御殿広式の「御
双方御移り替」を行ったという。

343 赤井直喜「藩公歴伝」五（斉広様御伝略等之内書抜）

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

（享和二年八月）

是ノ月六日、二之御丸金谷御殿御広式御双方御移り

替ニ相成ナリ、

九月四日

加賀藩、江戸藩邸（本郷邸）に新築した寿光院

（前田重教の正室）の居館を「梅之御殿」と称さ

せる。次いで一〇月一日、寿光院、同所へ移

徙する。

344 「袖裏雑記零余後録」享和二年九月四日条

金沢市立玉川
図書館奥村文

庫蔵

四日

○左之覚書、御横目笹島頼太郎江渡之、

御横目江

今般御普請被 仰付候

寿光院様 御殿、是以後梅之 御殿と相唱候様從

相公様被 仰出候条、此段寄々一統可被申談候事、

345 「筆のまに／＼」享和二年一〇月一〇日条

庫蔵

金沢市立玉川
図書館奥村文

十日

一、梅之 御殿

御本宅統下ノ御馬場、御造営成就、当月
辺ニ新出来之御殿也

朔日、

寿光院様御移徙之旨、江戸へ申来候付、今日、各

中將様へ恐悦申上様子、積氣等不出来不罷出故、紙

面を以申上、

相公様御途中迄 御前へ飛脚を以被 仰進
候趣有之、それニ伝附して申上、

寿光院様

御前様へも以紙面申上、

346 「政隣記（耳目甄録）」二〇

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿・廿一』

廿一日（二〇月） 去四日出江戸御用状来着、左之趣告来、

（中略）

寿光院様、今月朔日辰之中刻、御供揃木御行列（本）二て

御本宅御広式御玄関へ御出、長塀通り梅之 御殿江

御移、御供人侍以上熨斗目・上下着用、

御道筋警固足輕相建候事、

九月一日

前藩主前田治脩、湯治のため帰国を許可され、

一〇月六日、江戸を發ち、同月二五日、金沢

城に到着する。

347「筆のまにく」享和二年九月一八日条

金沢市立玉川図
書館奥村文庫藏

十八日

一、去十一日、江戸発足町飛脚步（偏敦）二伝附二而、今十一日、

上使御奏者番内藤豊（偏敦）前守殿を以、

相公様御湯治之義、從

（前田治脩）

中将様御願置被成候処、御願之通被 仰出、御料

理者御断二而、御菓子等出、万端御首尾能相済申候、

御持病氣御不出来二付、御名代（長姉）前田信濃守殿御願（札方）

上意御拜聴、御老中方も御同人御勤被成候旨等、同
日前田修理（知周）へ申来、

348「御家老方若年寄方日記之内抜書」享和二年九月一九

日条 金沢市立玉川図書館加藏能文庫藏

一、相公様御湯治御願之通被 仰出候、御祝詞各於席御

近習頭を以申上、両御広式へも罷出、御祝詞申上候

事、

349「筆のまにく」享和二年一〇月一五日条

庫藏

金沢市立玉川
図書館奥村文

十五日

一、相公様当六日申ノ上刻、益御機嫌能、江戸 御発

駕之旨、同日前田修理（知周）中飛脚を以申越、今夕到

着、御供ニハ今枝内記、前月廿一日、金沢発足、江

戸へ馳付候而御供仕、兼而者織田主税被 仰付置候

処、痢病後浮腫有之不宜御暇被下、前月廿六日帰着

之処、次第二不宜也、

但、今般冬向（方）二成、御道中御疝種等二御障りて可

被遊と

（前田治脩）
中将様御案被遊候而、東海道通り御通行之義被停

止御聞届也、

350「御家老方若年寄方日記之内拔書」享和二年一〇月一

六日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、相公様(前田治脩)当月六日申ノ刻、御発駕之段、同日江戸出立

之中飛脚を以申来事、

351「筆のまにく」享和二年一〇月二五日条 金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

廿五日

一、相公様御途中迄為御機嫌伺惣代飛脚横山又五郎(政賢)分指

出候、今庄駅ニ而紙面上之、金津御泊にて返書渡り、

昨夜帰着、

一、今廿五日、

相公様御着ニ付、一統五半時揃、年寄中等ハ例之通

四時頃登城、

一、河内守儀(奥村尚寛)、積氣未宜、今日不致登城、昼々金谷 御

殿へ罷出候付、松任上之方町端迄、自分ニ附人遣し、

被為入候を見受、為及案内、九半時過、右附人罷

帰、只今被為入候を見受罷帰候旨申ニ付、追付布上

下着用、直ニ金谷 御殿へ罷出、安房守(本多政成)・甲斐守(長連愛)・

享和二年

(前田孝友) 大炊・又兵衛・左京・山城・内匠助・津田玄蕃・
(村井長世) (奥村賢直) (横山隆盛) (前田直兼)

前田織江・横山又五郎・前田大学者御城ニ而、松任
(道濟) (政賢) (直央)

へ 御着之附人承之旨、金谷御殿へ罷出、河内守分

暫、跡ニ各罷出、前田図書者、從
(貞一)

中将様為御使者松任迄被遣候、於同所御使相勤、

但、御前へ被召、且御菓子・直ニ登城、其段申上候而、
(前田齊広) 御吸物被下候由、給事坊主、
(給事坊主)

右 御殿へ罷出、是も大方同時刻ニ成候也、土佐守
(為章) (前田直方)

疝痛、不破彦三者手痛等不宜不罷出、大音南郊も老
(厚豐)

病ニ而不罷出、

一、野々市御立被遊候附人ニ而

中将様金谷 御殿へ被為入候由ニ而、七時前頃被為

入、無程野町々端へ附人来り候故、各七拾間御門前

へ罷出、出方龜図左通、

(*図略)

右之通罷出居候処、七時頃、御乗物ニ而被為入、何

も罷出候所ニ而御乗物留り、御戸明候節、益御機嫌

能御着被遊奉恐悦旨、河内守分申上候処、今日ハ天

氣も宜と 御意、奉恐悦旨申上、被為入、御供今枝

内記、
(易直)

352 「御家老方若年寄方日記之内拔書」享和二年一〇月二

五日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、相公様去六日江戸 御発駕、東海道御通行、昨廿四

日小松 御泊、今曉八半時御供揃、益御機嫌能 御

着、七拾間御長屋御門外柵御門際御左之方江御大小

将横目罷出居、夫々同所腰懸前ニ御奏者番并諸頭罷

出居、右御門内向方御左之方へ懸ヶ、年寄中・御家

老中・若年寄中罷出居候所、御意有之、金谷御殿

御玄関台御右之方へ定番頭・御留守居物頭・定番頭

馬廻御番頭

御前様御附使者罷出、御意有之、御玄関鏡板江

中将様御出被遊、夫々石野主殿助御先立被為人、

但、御馬奉行等絵図之通罷出候事、

353 「政隣記（耳目甄録）」二一〇 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

同日 去ル十日江戸発之早飛脚来着、今般

相公様為御湯治御帰国、十月六日江戸 御発駕可被

遊旨被 仰渡候段申来、且左之通東海道十九御泊ニ

而同月廿五日 御着国之段も申来、

（中略）

同日 月次出仕、如御例一統 御目見、目出度与御意有

之、御取合等年寄中座上方言上、右相洛左之通御用

番又兵衛殿御演述、畢而於横御廊下左之御覚書披見、

四時頃、一統退出、

相公様御国許温泉江御入湯御暇之義、從

中将様御願置被成候処、去十一日 上使内藤豊前守

殿「私記御奏者」を以御願之通被 仰出、且又同十

五日、御登城、御湯治御暇之御礼可被 仰上候、若

御病氣候者御礼被 仰上三不及、御名代指出候様前

日御老中方連名之御奉書到来之处、御持病御勝不被

成候ニ付、

御名代飛驒守様御登 城被成候処、於御白書院御縁

類御老中方御列座、就御病氣ニ 御目見候者不被

仰付候、御拝領物「私記御羽織五ツ也」被 仰付候旨、

松平伊豆守殿御演述、御羽織御拝領被成、難有御仕

合 思召候段、御両殿様方拙者共迄被 仰出候事、

（中略）

廿五日 七時暫前、但、御待請刻限者五半時揃也、

相公様益御機嫌克御着、前記十七日ニ有之通、七十

間御門外江為御迎罷出列居蹲踞之处。御駕籠之戸明之、御例之通出マシタカ与 御意有之、夫々一昨日記之通、二之御丸江罷出、於御式台御帳ニ付、御祝詞等申上退出候事、

一一月二五日

金沢に地震あり。

354「御家老方若年寄方日記之内拔書」享和二年二月一

五日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

同十五日 晴 四半時頃、九半時過、地震、

享和三年（一八〇三）

二月七日

加賀藩、金沢城七十間長屋門統の石垣修復のため、付近の往来につき、同所柵門外にて下馬・下乗するよう通達する。次いで修復完了にともない、四月二四日以降、従来通りの往

来を許可する。

355「御家老方若年寄方日記之内拔書」享和三年二月七日

条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、左之通御城方々演述、

付札御横目江

七拾間御長屋御門統御石垣御普請有之二付、往来道幅狭ク候間、可致混雑候条、同所柵御門外ニ而下馬・下乗有之候様夫々可被申談候事、

二月七日

356「御家老方若年寄方日記之内拔書」享和三年四月二四

日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、左之通御城方々演述、

附札御横目

七拾間御長屋御門統御石垣御普請中、同所柵御門外ニ而下馬・下乗有之候様申渡置候得共、右御普請相済候間、当廿四日々下乗所御平生之通不指支候条、此段夫々可被申談候事、

四月廿三日

357「政隣記（耳目甄録）」二二

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿・廿一』

(三月)
五日 (中略)

△
七拾間御長屋御門統御石垣御普請有之候ニ付、往
来道幅狭候間、可致混雜候条、同所柵御門外ニ而下
馬・下乗有之候様夫々可申談候事、

二月七日

右、御城代駿河殿被仰聞候旨、如例御横目廻状出、
(前田孝友)

(中略)

(四月)
廿一日 (中略)

付札

御横目江

△
七拾間御長屋御門統御石垣御普請中、同所柵御門外
ニ而下馬・下乗有之候様申渡置候得共、右御普請相
濟候間、当廿四日〆下乗所御平生之通不差支候条、

此段夫々可被申談候事、

四月廿三日

三月一六日

前田齊広、村井長世 (又兵衛) を金沢城代に任
命する。

358 「政隣記 (耳目甄録)」 一一一

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿・廿一』

(三月)
十六日 左之通被 仰付、

御城方御用

学校惣御奉行

学校惣御奉行御用多ニ付 御免

△
村井又兵衛 (長世)
奥村左京 (質直)
本多安房守 (政成)
前田駿河 (孝友)
村井又兵衛

三月一八日

法梁院 (前田治脩の正室)、加賀藩江戸藩邸 (本
郷邸) の「梅之御殿」へ移徙する。

359 「政隣記 (耳目甄録)」 一二一

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿・廿一』

(三月一八日)
同日 江戸御邸内梅之御殿江

御前様御引移、

三月二四日

加賀藩江戸藩邸 (本郷邸) の物見櫓、類焼する。

360 「政隣記 (耳目甄録)」 一二二

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿・廿一』

(三月)
廿四日 江戸表北風強吹候処、昼九時頃指違町〆出火、

九月一三日

前田齊広、金沢を發し、同月二六日、江戸に到着、一〇月一日、江戸城に登り、参勤の挨拶をする。

361「筆のまにく」享和三年九月一三日条
金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

一、今日昼九時前、益御機嫌能 御発駕被遊候事、

但、御供前田駿河、(孝友)今日も不罷出候故、以紙面夫々

御祝詞申上候事、

○御入国後初而之 御参勤故、先例を以惣代飛脚を以

泊之御泊迄伺御機嫌、右飛脚者内匠助を指出之、
前田直業

享和三年

362「御家老方若年寄方日記之内拔書」享和三年九月一三

日条
金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、九時前、益御機嫌能 御発駕被遊、御先立大学、
(前田直実)

年寄中御式台内々左之方罷出、御家老中・若年寄ハ
内々右 罷出、右之御会釈有之事、
之方

363「江戸幕府日記」享和三年一〇月朔日条
国立公文書館内閣文庫蔵

一、今四江五分前、御黒書院江

出御、

参勤

御太刀一腰
銀五十枚
巻物二十

(前田齊広)
松平加賀守

右、相済而御白書院江 出御、

(中略)

松平加賀守家来

經二十筋
銀馬代

(孝友)
前田駿河
(知周)
前田修理

364「筆のまにく」享和三年一〇月七日条

金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

七日

一、前月廿六日午下刻、江戸 御着被遊旨、今日申来、

泊一日御逗留故也、

365「筆のまにく」享和三年一〇月八日条

金沢市立玉川図書館奥村文庫蔵

八日

一、左之紙面写之儀、今夕御用番より以跡紙面到来、御書も致到来候間、追而御達書申旨申来、

前月廿八日、上使土井大炊頭殿御出、御懇之被為

蒙 上意、且又御参勤之御礼可被 仰上旨、翌廿九

日御老中方御連名之御奉書到来、朔日、御登 城、

以御黒書院御礼被 仰上、御懇之被為蒙 上意、前

田駿河・前田修理御供被 召連候処、御白書院にお

いて 御目見被仰付候旨、朔日之日付、駿河等紙面、

366「政隣記（耳目甄録）」一二

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿・廿』

十三日 陰、四時頃微雨、今日九時前、御機嫌克御登駕

自分御中休津幡ヨリ御近習騎馬御供ニ付、五半時

御城へ出、四時頃三品押出以前発出、津幡ニ御待受

之上御供、御小休くりから長楽寺江上り献上物披

露、御先立御用等勤之、

（中略）

廿六日 快天、曉七時、御供揃ニ而同刻前御立、藏御中

休、御下邸江御立寄、御浴・御髪月代等被為 成、

九時頃、御機嫌克御上邸江 御着、御供騎馬追分口

御門乗通シ、梅之 御殿角ニ而下馬等之義、於金沢

御横目中申渡有之候通也、

（中略）

朔日 快天、今日御参勤之御礼ニ付、六時御供揃ニ而、

同半時頃、御登城、右御礼被 仰上、直ニ御老中方

御廻勤、九半時頃、御帰館、右ニ付、服紗小袖・布

上下着用平詰、且今朝、於 殿中水戸様・紀州様

御対顔之处、御懇之趣有之候、為御礼使拙者義、右

御両家江参上、

（中略）

同日 御帰館後、頭分以上四、五人宛御席江御呼立、左

之通駿河殿御演述、

今般 御参勤ニ付、前月廿八日、上使土井大炊頭

殿を以、被蒙 上意、且又今日、御参勤之御礼可

被 仰上旨、昨日御老中方御奉書到来ニ付、御登

城被遊候処、於御黒書院 御参勤之御礼被 仰

上、御懇之 上意、其上駿河・修理 御目見被

仰付、重疊難有被 思召候、此段可申聞旨 御意ニ候、

右ニ付、於竹之間ニ御帳ニ附、為恐悅駿河殿・修理殿御小屋へ相勤候事、

但、右御弘ニ前々相勤候事無之候得共、此度者

御家督後初而之就 御参府ニ、僉義之上相勤申事ニ相極り候事、

一一月二八日

加賀藩、江戸藩邸（本郷邸）の「梅之御殿」を「梅之御居宅」、「北之御殿」を「北之御居宅」と改める。

367「政隣記（耳目甄録）」二二

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿・廿一』

廿八日 左之御覚書、駿河殿御渡之旨等、御横目永原

（孝建）

治九郎分例文之廻状を以到来之事、附、於金沢者十

二月廿八日於御横目所寄々一統可申談旨、御用番御渡之覚書諸頭等江披見、申談有之候事、

付札御横目江

梅之御殿之事 梅之御居宅

享和三年

北之御殿之事 北之御居宅

右両御殿、是以後右之通相唱候様被 仰出候条、此段一統可申談候事、

亥十一月

一二月一日

江戸の前田齊広、琴姫（尾張藩主徳川宗睦の養女）を娶る。

368「政隣記（耳目甄録）」二二

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿・廿二』

同日 就吉辰、前記御作法書等之通ニ而、八時過 御出

輿之段御附人追々告来、七時過、御入輿、御輿渡

滝川豊後守勤之、請取前田駿河勤之、御具桶渡御家

老代大寄合高橋司書勤之、請取前田隼人助勤之、御

門下江本多勘解由、各羯子持筋熨斗目・長袴着用之

諸頭御白洲等江罷出、御表向御客御惣様、夜五時前

御披、夫分御結納之節同断、御作法ニ而赤飯等頂戴被 仰付、四時頃各相披候事、

但、年寄中・御家老中江今日者御重肴被下ニ付、

最初ニ御頂戴、右相済、頭分二建ニ頂戴御吸物

なよし
ふきのと

369 「三守御譜」三 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

(享和二年)
十二月朔日 琴姫君 御入輿アリ、

一二月一六日

幕府、前田齊広の家臣一人に叙爵を認め、次いで前田孝友(駿河)、従五位下伊勢守に叙任される。

370 「政隣記(耳目甄録)」一二 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

(二月)
十六日 昨日御老中方御連名之依 御奉書、今朝五時前

御供揃ニ而同刻過、御登城、九時頃、御帰殿之上、左之通於御席頭分以上上江勘解由殿御演述、一先退重而罷出、恐悦申上候事、

但、布上下着用罷出様御横目申談ニ付、各着改御席江罷出、

昨日御老中方御連名之依 御奉書、今日御登城被成候処、於御白書院御老中方御列座、兼而御願置被成候通、御家来忝人諸大夫被仰付候旨、土井(利厚)大炊頭殿被仰渡、難有被思召候、此段何茂江可申

聞旨 御意ニ候、

右畢而、右ニ付、前田駿河叙爵被仰付、伊勢守ニ

被成候旨為承知、是又勘解由殿御申聞候事、

右ニ付、西 御丸江も御登城被遊候、御老中・若

御年寄衆江之 御廻勤者、御名代飛騨守様江御頼

候事、

文化元年(享和四年。一八〇四)

三月四日

加賀藩、金沢城二ノ丸裏式台前御鋸番所続き台所入口門造営のため、この日以降、同月二七日まで付近の往来を禁止する。

371 「政隣記(耳目甄録)」一二 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

(二月)
今月廿八日(中略)

付札御横目江

△ 二之 御丸裏御式台前御鋸番所続御台所入口御門御造営就被仰付候、来月四日今往来指留候条、御台

所奥之口并松坂御門通り、金谷 御殿江罷出候人々、
鶴之丸通り、埋御門へ往来之筈ニ候条、此段不相洩
様夫々可被申談候事、【頭注】「△三月廿七日へ往来不支旨本文
同趣之廻状、同月廿五日ニ有之」

但、三之御丸御番所左右入口へ供之人數、二之御
丸之通召連可申事、

二月廿八日

右、御城代又兵衛殿被仰聞候旨等、例之通御横目廻
状有之、【科井長世】

三月一三日

前田斉広、帰国を許可され、同月一五日、江
戸城に登る。次いで同月一八日、江戸を發し、
四月二日、金沢城に到着する。

372 「江戸幕府日記」文化元年三月二三日条 国立公文書館内閣
文庫蔵

上使牧野備前守（忠精）

銀百枚
卷物三十
松平加賀守（前田斉広）

右、御暇被 仰出候付被遣之、

373 「江戸幕府日記」文化元年三月二五日程 国立公文書館内閣
文庫蔵

享和三年（文化元年（享和四年）

一、今四打四半廻り、御黒書院江 出御、

御暇

御鷹被下
御馬被下

松平加賀守（前田斉広）

（中略）

松平加賀守家来

卷物五

前田伊勢守（孝友）

同 五

本多勘解由（政業）

374 「御家老方若年寄方日記之内拔書」文化元年四月二日

条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、今日御着城ニ付、年寄中・御家老中・若年寄六半時

へ五時迄ニ追々登城、諸役人揃六半時之事、

一、前月十八日江戸 御發駕、夜前津幡駅御止宿、今朝

右駅 御發駕与御附人五時過來候事、

一、四時過、大樋江被為入、附人来ニ付年寄中・主殿・（本多政礼）

義十郎・役懸之人持・頭分之面々、三ノ御丸江罷出、（奥村榮光）

御城代又兵衛、御家老中・若年寄御式台階下、表（科井長世）

御式台之方、後ニいたし罷在候処、四半時益 御機

嫌能御着被遊、夫々 御意有之、（前田龍光） 大学儀進出罷在、

御先立相勤候事、

一、年寄中・御家老中・若年寄一列、表方席ニおゐて池

田勝左衛門^(景福)を以 御着城之御祝詞申上^(條)□事、

375「政隣記(耳目甄録)」一二一 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿二』

十三日 上使御老中牧野備前守殿を以、御国許江之御

暇被 仰出、御例之通御卷物三十・白銀百枚御拝領、

從

大納言様も御老中安藤^(徳川家慶)对馬守殿を以被為蒙 上意、

御卷物二十御拝領、從

御台様も御使御広式御用人小笠原大隅守殿を以、御

卷物五御拝受、八時頃、万端御都合克段々被為済候、

但、对馬守殿与者 御盃事有之、其外者御断、尤

二汁六菜之御料理等被出之、向話 御持参、大隅

守殿者御餅菓子等被出之、御重引 御持参、其外

御作法都而前々之通ニ付略ス、

(中略)

十五日^(三月) 昨日御老中方依御奉書、今朝六時過、御供揃

ニ而御登 城、御下り御老中方并若御年寄衆御廻勤、

九時過、御帰殿、左之通於御席頭分以上江伊勢守^(前田孝友)

殿御演述、畢而於竹之間恐悦之御帳ニ附、

一昨十三日、上使牧野備前守殿を以、御国許江之
御暇被進、白銀・御卷物御頂戴、從

大納言様安藤对馬守殿を以、御卷物御拝領、從

御台様も小笠原大隅守殿を以、御卷物御拝受被成候、

昨日依御奉書今日御登 城被成候処、於御黒書院御

礼被 仰上、御懇之被為蒙 上意、御鷹・御馬御拝

領、次ニ伊勢守・勘解由^(本多政美) 御目見、拝領物も被 仰

付、重畳難有被 思召候、此段何茂江可申聞旨 御

意ニ候、

(中略)

十八日^(三月) 陰、今朝六半時、御供揃ニ而五半時頃、御発駕、

八時過浦輪駄御着、自分御昼蔵駄(津田政隆)御近習騎馬、但、

六時過御小屋出立、蔵ニ而奉待請御供、且旅中食物

等如例別録ニ有、

(中略)

二日^(四月) 雨天、今朝六時過、御供揃ニ而同刻頃 御立、森

下ニ而時刻御見合等有之、四半時前、益御機嫌克

御着城、自分今日ハ本役御供所へ加り、御供帰着、

御用番内匠助殿江於御席恐悦申述帰宅之事、
(前田直寛)

六月二七日

加賀藩、金沢城二ノ丸広式の橋の間の修復を命じる。

376 「御勝手方諸事覚書」文化元年六月二七日条

館加越能文庫蔵

金沢市立
玉川図書

一、二之御丸御広式橋之御間之内、柱根朽損候ニ付、御

補理可被 仰付旨、去暮江戸表より被 仰出候処、

段々申上候趣有之、御猶予可被遊旨重而被 仰出候、

然処右御間ハ兼而相公様被為入候節之御座之御間ニ

〔前田出陣〕

御補理被 仰付度、且

御同人様ハ被 仰進候趣も有之、御意味合も御座候

旁、此度弥御普請可被 仰付候間、為承知被 仰出

旨、中務申聞候事、

〔四原政良〕

右之趣ニ付、御入用方手当之儀有之ニ付、水野次郎

〔武〕

〔矩〕
大夫江為承知申聞事、

但、惣御入用三拾貫左之通之由也、

七月九日

金沢に地震あり。

文化元年（享和四年）

377 「政隣記（耳目甄録）」二二二
〔七月〕
九日 曉寅上刻地震、属晴、

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
「政隣記 耳目甄録 廿二」

九月二日

加賀藩、金沢城土橋門修復のため、この日以
降、同所の往来を禁止する。

378 「御家老方若年寄方日記之内拔書」文化元年八月二六

日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

付札御横目江

土橋御門御普請就被 仰付候、来月二日ハ右御門往

来指留候条、二之御丸御広式江罷出候人々、河北御

門通り可致往来候、右御広式江可出候女之分者、七

拾間御長屋御門ハ 玉泉院様丸通御数寄屋々敷唐御

門往来之筈ニ候条、此段一統不相洩様可被申談候事、

八月

十一月二日

加賀藩、「省略」のため内作事所・外作事所の
作事を当分差し留める。

379 「御家老方若年寄方日記之内拔書」文化元年二月二

日条 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

一、御作事所御仕法御改被 仰付ニ付、左之通表方ニ而申渡有之、

御作事奉行江

今般万端御省略ニ付、旧例古格不拘、万事事輕ニ而御入用減方等僉義有之候様申渡置候処、各心付之趣帳面被指出候ニ付、則入 御覽候処、各僉義之通可申渡旨被 仰出候、依而御作事内役所数被相減、内作事奉行・外作事奉行・木藏才許・鉄荒物才許并御歩横目、当分被指止、暨図り所役所茂被指止候、内作事方御用者地遠共、寺社方修理才許与力々相兼候様申渡候条、被得其意、御材木・鉄荒物茂其手合々々江直ニ買上可申候、尤御省略之儀諸事無油断、綿密遂詮義候様可被申談候事、

子十月

内作事奉行 金谷佐大夫（建尚）

内作事奉行加人并外作事

奉行兼帶 加須屋団藏（孝意）

二月一五日

幕府、前田齊広の家臣一人に叙爵を認め、次いで本多政礼（主殿）、従五位下安房守に叙任される。

380 「政隣記（耳目甄録）」二二二

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
「政隣記 耳目甄録 廿二」

廿八日（二月）

歳末為御祝詞、今日出仕以上之人々登城

「去十五日互見」、御在国如御例於御式台御帳ニ附可（注記）

罷歸処、御弘之趣有之候間、各居残候様甲斐守殿（長連愛）

被仰聞候旨、於御帳前申談ニ付居残候処、九半時頃、

柳之御間列居、年寄中・御家老中列居、左之通甲斐

守殿御演述、畢而同所於横廊下左之通披見退出之事、

諸大夫之儀、兼而御願置被成候処、今般御願之通

被 仰出候ニ付而、本多主殿（政礼） 叙爵被 仰付、名

も安房守与為御改被成候、此段何もへ可申聞旨

御意ニ候、

二月二二日

金沢城東ノ丸の大銀土蔵に賊が侵入する。

381「寛政文化間日記」文化元年二月二二日条
金沢市立
玉川図書
館加越能文庫蔵

大かね御土蔵へ賊入候事、

この年

加賀藩、金谷御殿「御小間」の普請を行う。

382「先祖由緒并一類附帳」秩二二三（篠田和憲）
金沢市
立玉川
図書館加越能文庫蔵

一、父

篠田故弥三兵衛和之
（中略）

（中略）

文化元年、金谷 御殿御小間御普請主附、（下略）

文化二年（一八〇五）

三月一日

前田斉広、金沢を發ち、同月二六日、江戸に到着する。次いで四月一日、江戸城に登り、参勤の挨拶をする。

文化元年（享和四年）～文化二年

383「廻状留」文化二年四月朔日条
国立公文書館内閣文庫蔵
一、公方様
（徳川家歴）
（徳川家歴）

大納言様御一同

出御、月次之御札相濟、

御黒書院

参勤

上使老中

安芸

縹紗二十卷
銀五十枚

（前田斉広）
松平加賀守

御白書院

（中略）

松平加賀守家来

二人

沓岐

（經二十筋）
銀馬代

（賀直）
奥村左京

因幡

同断

（政業）
本多勘解由

384「政隣記（耳目甄録）」二二二

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿二』

（三月）十一日 御見立揃刻限六半時過二付、同刻ろ登 城、御

供揃八五半時也、且五時御供揃二而金谷 御殿江被

為入、四時過、御帰殿、九時頃、益御機嫌能 御

発駕、御作法前々之通、三之御丸へ罷出（注記）「草履捕一

人召連」候処、御例之通 御意有之、夫より御席へ

出、御用番又（村井長世）兵衛殿江恐悦申述退出、但、今日式日

者無之旨御横目中（實直）申談有之、

一、御供人奥村左京殿・本多勘解由殿等夫々無異義

発出、今夜今石動御泊、去々年秋之通御泊附二

而廿三日江戸 御着之御日図リ二候事、

（中略）

当月廿六日 益御機嫌克江戸 御着、追付之御供揃二而

御出、御老中御廻勤有之候段等、同日江戸発之飛脚、

四月六日来着告来候事、

（中略）

四月朔日 前日御老中方御連名之依御奉書御登 城、御

参府之御礼被 仰上、随駕之臣奥村左京・本多勘解

由 御目見惣而御先例之通被為済、

385 「三守御譜」三 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

文化二乙丑年三月十一日 金沢 御発駕、同廿六日、

江戸 御着被遊、同廿八日、上使青山下野守、四月

朔日、右御礼 御登城、御供奥村左京、（實直）

三月二六日

加賀藩、金沢城石川門櫓下の石垣修復のため、

この日以降、同所の往来を禁止する。

386 「御家老方諸事覚書」文化二年三月一六日条

越能文庫蔵

金沢市立玉川図書館加

一、左之通 御城代方々演述、

付札

御横目江

石川御門統御櫓下等石垣御普請就被 仰付候、当廿

六日右御門往来指留候条、御城中御番人、且又

就 御用罷出候人々、河北御門々往来之筈三候、若

火事等之節ハ石川御門往来不指支候、尤御普請所之

儀二候間、往来人不込合様可相心得候、此段夫々一

統不相洩様可被申談候事、

丑三月十六日

387 「政隣記（耳目甄録）」二二二 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

（三月） 十九日（中略）

付札御横目へ

石川御門統御櫓下等石垣御普請就被 仰付候、当廿六日ヨリ右御門往来指留候条、御城中御番人且又就御用罷出候人々、河北御門へ往来之筈ニ候、若火事等之節者石川御門往来不指支候、尤御普請所儀ニ候間、往来人不込合様可相心得候、此段夫々一統不相洩様可被申談候事、

丑三月十六日

右、御城代又兵衛殿被仰聞旨等例之通御横目廻状有之、

四月二四日

前田治脩、金谷御殿において草鹿を行う。

388 「御家老方諸事覚書」文化二年四月二四日条

金沢市立玉川図書館加

越能文庫蔵

同廿四日 天氣好

一、今日天氣宜候付、草鹿為見物甲斐守・又兵衛・

安房守・助右衛門・織江・兵部、八半時過ニ金谷御

殿江罷出、御書院二之間ニ相溜、七時前御庭へ相廻

候様、山口清太夫申談付、各二枚開る御文庫通罷越、

文化二年

御馬見所ニおゐて見物、七半時過相済、即席江筆頭甲斐守迄何茂御札申述、直ニ退出候事、
但、中將様江之御札ハ無之事、

閏八月四日

加賀藩、金沢城石川門櫓下の石垣修復が三、四年かかるため、この日以降、同所の往来を許可する。

389 「御家老方諸事覚書」文化二年八月二八日条

金沢市立玉川図書館加

越能文庫蔵

一、左之通御城代方へ演述之事、

付札御横目江

石川御門統御櫓下石垣御普請被 仰付、当春右御

門往来指留置候、然処右石垣御普請今三、四年相懸

候ニ附、右御門往来も急ニ難相弁由ニ候、左候而者

右御門向寄之諸役人等、短日之砌杯相廻候而者指急

候御用有之節、おのつから差支も可有之義ニ付、格

別御普請奉行遂詮議、来月四日右石川御門先往来不

指支候、乍去右之通御普請所江囲取道幅も無之候間、

往来之人々ハ心得ニ而罷通、猶更從者等末々迄込合

不申相通候様可申渡候、且又下馬・下乗も右准シ、

仮囲外ニ而可致候、併佳節・朔望并御弘等ニ而出仕

之面々ハ、人多被召連、致混雜候条、是迄之通河北

御門ノ登 城可有之候、

右之通一統不相洩様可被申談候事、

八月廿八日

一一月一日

この日以前、金沢城土橋門が竣工する。加賀藩、この日以降、同所の往来を許可する。

390 「御家老方諸事覚書」文化二年一〇月二八日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

金沢市立玉川

一、左之通御城代方ノ演述、

付札御横目江

土橋御門御造営就出来、来月朔日巳ノ刻ノ如最前右

御門往来不指支候条、夫々一統不相洩様可被申談候

事、

十月廿八日

391 「高島厚定職事日記」文化三年二月九日条

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

金沢市立玉川図書館加越能

御作事奉行加人

長谷川三九郎（一久）

右私組三九郎儀、御用御座候条、今四日四時、二之

御丸へ罷出候様申渡、私義も可致登 城旨、昨日

又兵衛殿内依御紙面三九郎江申渡、則罷出候処、檜垣

之御間於二御間伊勢守殿・又兵衛殿御出席、御横目

中指引三而致誘引候所、今度土橋御門御造営被仰付候

段、宜致出来 御喜悅 被思召候、依而御目録之通被

下候而、又兵衛殿御演述ニ而生絹二疋御目録、御用人

庄田要人相渡候ニ付、御取合御札申述候、拝領物被

仰付忝義奉存候、右為御知如此御座候、御廻達留（御返脱力）合

可被下候、以上、

二月四日 同九日富永氏（直經）来、中村氏へ送、

同役中拾人様

宮井典膳

一一月

加賀藩の穴生後藤睦友（小十郎）、金沢城代村

井長世（又兵衛）の指示により、金沢城内の石垣間数を調査し、絵図に仕立てて提出する。

392 「金沢城中御石垣間数附絵図」付記

金沢市立玉川図書館後藤文庫蔵

往古御石垣間数附絵図不分明に付、御城代又兵衛殿思召を以、間数等相改、詳図に仕立指出候様、御普請奉行中江被仰渡候二付、歩々を以間数改め計、旧図大形に引直、漏たるを補ひ、粗其要を糺し、至当月上旬、御成図となして指上之候事、

文化二年十一月

後藤小十郎藤原睦友謹記

【解説】「金沢城中御石垣間数附絵図」は、石垣の高さ・長さなどを詳細に記した金沢城全域図。右はその付記。

文化三年（一八〇六）

三月一三日

前田斉広、帰国を許可され、同月一五日、江戸城に登る。次いで同月一六日、江戸を発ち、同月二八日、金沢城に到着する。

393 「江戸幕府日記」文化三年三月一三日条

国立公文書館内閣文庫蔵

上使青山下野守

銀百枚
巻物三十

松平加賀守

（中略）

右、御暇被 仰出候付被遣之、

394 「江戸幕府日記」文化三年三月一五日程

国立公文書館内閣文庫蔵

一、今四半打五寸廻り、御黒書院江

公方様・大納言様御一同 出御、

御暇

御鷹被下

松平加賀守

（中略）

松平加賀守家来

（巻物）
同五

（賀直）
奥村左京

同

（致業）
本多勘解由

395 「御家老方諸事覚書」文化三年三月二五日程

館加越能文庫蔵

金沢市立玉川図書

一、当月十五日、江戸不時立早飛脚步、昨夕到着、去十

三日、上使青山下野守殿を以御国許江之御暇被

仰出、白銀・御巻物御拝領、従

(徳川家慶) 大納言様、安藤対馬守殿を以御巻物御拝領、從

(信成) 御台様茂小笠原大隅守殿を以御巻物御拝受、且当十

(義武) 五日、御登城被成候様、前日御老中方御連名之御

奉書ニより御登城被遊候処、於 御黒書院御礼被

仰上、御懇之被為蒙 上意、御鷹・御馬御拝領被成、

重畳仕極成御儀候、委細之儀ハ以 御書被仰出候御

様子ニ候、將又左京・勘解由御供被召連候処、於

御黒書院 御目見被 仰付候段、左京等々申来事、

396 「御家老方諸事覚書」文化三年三月二六日条 金沢市立 玉川図書 館加越能文庫蔵

一、当十六日辰刻、江戸御発駕被遊、兼而被 仰出候御

泊附之通ニ候処、廿一日才川満水ニ而御通行不被為

成、依之榊駅へ一日御逗留、同廿二日減水いたし御

通行被遊、御日凶之通御旅行、廿七日津幡御泊被

指止、高岡御泊々直ニ而御着可被遊旨被 仰出候段、

(奥村實直) 左京等々追々申来事、

397 「御家老方諸事覚書」文化三年三月二八日条 金沢市立 玉川図書 館加越能文庫蔵

一、今日 御着城ニ付、諸役人五半時揃、年寄中・御家

老中・若年寄四時頃迄ニ段々登 城之事、

但、夜前津幡御泊ニ而御着之筈ニ候処、榊駅ニ而

一日御逗留有之ニ付、津幡御泊被指止、高岡より

昨夜九時之御供揃ニ而直ニ御着之事、

(横山政賢) 一、又五郎儀、気配未宜、今日も難致登城、及御断之旨

被申越、主付々水越八郎左衛門江御着之上申上候様

申合候事、

一、九半時頃、津幡江被為 入候附人来、八半時頃、森

下御発駕之附人罷越暫有之、大樋江被為 入候附人

罷歸事、

一、右附人来候而、年寄中・助右衛門三之御丸江罷出、

重而浅野川大橋之附人来候而、御城代伊勢守・御家

老中・若年寄、御玄関江罷出、七時過、御着、伊

勢守・御家老中江御意有之、夫々及御請、掃部義

近々出有之、御先立相勤候事、

但、伊勢守ハ御右之方、御家老中ハ御左、裏御式

台之方江罷出、掃部ハ御家老中末座候所ニ近々出

有之、御先立伊勢守等江御会釈之節、階下ニ中座

之事、

398「政隣記（耳目甄録）」一二三 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿三・廿四』

廿八日 昨夜九時御供揃ニ而同刻前、高岡 御発駕、益

御機嫌能今日七時過、御帰城、但、為御待請今朝五
半時分罷出候処、八半時頃、森下御小休御立之御
附人来候ニ付、三之御丸江出蹲踞之處、御例之通
御意有之、其外御年寄衆者、大樋御附人ニ而橋爪御
門外迄被罷出候儀等、都而御作法前々之通、且右三
之御丸江罷出候節、如前々草履捕一人召連、手傘ニ
而出、御通行之節傘後口之方へ指置之蹲踞、御帰
城之刻ハ雨晴有之、附、今日路地滑至極ニ付歩行
遅々、御着城御遅有之候由云々、

四月七日

加賀藩、櫓下石垣普請中の金沢城石川門にお
いて、佳節・朔望等出仕時の通行を許可する。

399「御家老方諸事覚書」文化三年四月七日条 金沢市立玉川
図書館加越能
文庫蔵

一、左之通御城方々演述、

御横目江

文化三年

石川御門統御櫓下石垣御普請中道幅無之ニ分、佳
節・朔望等出仕之面々、河北御門一方々往来申渡置
候へ共、年限も相懸候御普請ニ付、格別遂詮義、召
連候従者末々作法能込合不申様、其主人々々々厳重
ニ申付、佳節・朔望等石川御門分も一統出仕往来有
之候様可申渡候、併右御普請中ハ仮囲外ニ而可致下
馬・下乗候、此段夫々不相洩様可被申談候事、

四月七日

400「政隣記（耳目甄録）」一二三 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿三・廿四』

八月（中略）

付札御横目江

石川御門統御櫓下石垣御普請中道幅無之ニ付、佳
節・朔望等出仕之面々、河北御門一方々往来申渡置
候得共、年限も相懸候御普請ニ付、格別遂詮義、召

連候従者末々作法能込合不申様、其主人々々々厳重
ニ申付、佳節・朔望等石川御門分も一統出仕往来有
之候様可申渡候、併右御普請中ハ仮囲外ニ而可致下
馬・下乗候、此段夫々不相洩様可被申談候事、

四月七日

別紙之通夫々可申談旨、御城代又兵衛殿被仰聞候条、
(村井長世)

御承知被成、御同役御伝達、御組江支配御申談可被
成候、且又御組等之内才許有之面々者、其支配江も
不相洩様御申談可被成候、以上、

四月八日

御歩頭衆中

御横目

四月

金沢城石川門櫓下の石垣、修復完了する。

401「石川御櫓下等御石垣積直絵図」

金沢市立玉川図書館後藤文庫蔵

石川御櫓下等御石垣積直絵図

但、自分扣出来迄全図不赦他見、

(※図・注釈略)

右之通出来、猶応其時々可指図者也、

文化三丙寅年四月 後藤小十郎 (朱印)

五月一六日

金沢に地震あり。

402「高島厚定職事日記」文化三年五月一六日条

金沢市立玉川図書館蔵

館加越能文庫蔵

十六日 降、夕方晴、

夜曇、八時地震強也、

八月一二日

幕府、前田齊広と正室琴姫(尾張藩主徳川宗睦の
養女)との離縁を許可する。

403「御家老方諸事覚書」文化三年八月二二日条

館加越能文庫蔵

金沢市立玉川図書館蔵

一、御前様御儀、去秋一ヶ谷(市谷)御屋敷江被為人、御積氣御

気色御勝不被遊、種々御療養御座候得共、御全快之

御様子無之、無御抱趣ニ而御和談を以、御離縁被成

候段、御双方様今月十三日、御用番牧野備前守(忠精)

殿御届有之候処、御所旁ニ而御登城無之、依之松平

伊豆守殿江御用番御達被成候ニ付、伊豆守殿江可被

及御届旨、御指図ニ付、則聞番御使を以右御届書御

指出候処、首尾能御請取被成候、右之趣同日尾張様

おも御届有之候旨、御使者頭並山口清兵衛を以為御

知有之、此方様おも尾張様江聞番大地縫殿左衛門

(徳川齊朝)

を以為御知之御使者相済候趣、当十四日出江戸発足
之早飛脚步を以申来事、

404「政隣記（耳目甄録）」一三三 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿三・廿四』

（八月）廿二日 去十四日出江戸御用状来着、左之趣申来、前記

去年八月廿二日互見、

付札御横目江

御前様御病氣ニ而、去秋以来市ヶ谷御広式江御逗留

之处、急ニ御全快之牀無之ニ付、尾張様（徳川斉朝）被仰進候

趣有之、御双方御熟談を以御離縁ニ相成、公辺御

届も相済候、尾張様江通路之儀者是迄之通ニ候、此

段一統可被申談候事、

八月十三日

右、於御横目所披見申談有之候事、

405「三守御譜」一三 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
（文化三年）

八月十三日 小君尾張侯女 琴姫君御離別被成、

九月

加賀藩、江戸藩邸（本郷邸）「梅之御居室」の

呼称を、以前の「梅之御殿」に戻す。

406「御家老方諸事覚書」文化三年九月八日条 金沢市立玉川
図書館加越能
文庫蔵

一、江戸表梅之御居室、最前之通、梅之御殿与相唱候様

被 仰出由、

（中略）

一、梅之御居室之事、

梅之御殿

右最前之通、梅之御殿与相唱候様、夫々可被申談旨

被 仰出、

九月

407「寛政文化間日記」文化三年九月一七日条 金沢市立玉川
図書館加越能
文庫蔵

梅ノ御居室、以来 御殿卜唱候様、此比被 仰出、

408「政隣記（耳目甄録）」一三三 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿三・廿四』

（九月）九日 重陽為御祝詞登 城、於柳之御間御年寄衆謁、四

時頃退出、且於御帳前左之通披見申談有之候事、

付札御横目江

梅之御居室之事、最前之通梅之 御殿与相唱候様

被 仰出候条、此段寄々一統可被申談候事、

九月

一一月二三日

この日以前、金沢城本丸三十間長屋が竣工する。

409 「文化雑誌」二 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

文化三年十一月

一、御本丸三拾間御長屋御普請出来ニ付、昨廿三日、御城代御見分被成候筈之处、御兩人共御不快ニ付、御出不被成候ニ付、定番頭等罷出見分有之候様申渡候旨、其節前々之通拙者共之内忝人可罷出旨、又兵衛殿御城方与力を以被仰聞、揃刻限四時ニ候条、定番頭等何茂相揃候者、御城方江可相達旨被仰聞候ニ付、不殘相揃候旨相達候处、御城代御出不被成、御城方与力何茂罷出、其節^(朱書)加藤氏被罷出見分有之、九時前相濟、相替義無之旨被申聞候事、

一二月二二日

前田齊広、金沢城石川・河北兩門の与力番人に年寄等の往来時の作法について下問する。

410 「政隣記（耳目甄録）」二三

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
「政隣記 耳目甄録」廿三・廿四

兩御門与力御番人、年寄中等往来之節、當時会釈方緩怠之躰被 聞召候、御火災已前者、板之上江罷出ツクハイ慇懃会釈仕候由、如何之訳ニ而當時之身躰ニ罷成候哉、此段相糺可申上旨被 仰出候事、

寅十二月

右、今月廿一日於御次閑屋中務を以被^(政良) 仰出、依之寺社奉行御用番前田式部宅^(孝始)江河北・石川兩御門御番人与力壹組五人宛召出被 仰出之趣申渡之、左之紙面取立之、

私共御年寄衆等御往来之節、御番所江御会釈之節、身躰當時緩怠罷成候躰被 聞召、御火災以前与當時之様子被 仰出之趣を以御糺被成奉得其意候、元来御番所建方、往古者三之御丸御番所之通掾御座候而^(縁)據江罷出着座仕候由、其後御番所板足輕番所下座板与同様之趣ニ相成候ニ付、當時之身躰ニ押移リ申候様承伝申候、御火災以前者ツクハイ候与申義、旧記伝承之趣存居申者無御座候、乍然當時之身躰不宜義も御座候哉、緩怠之躰被 聞召奉迷惑候、右等之趣

ニ御座候間、宜御達被下候様仕度奉存候、以上、

寅十二月廿二日

河北御門等御番人

与力連名 判

染物二端宛

但、一組合宛

前田式部様

中川清六郎様
(頭忠)

竹田掃部様
(忠問)

金二百正宛

御医師

内山覚中

関玄迪

御外科

有沢了長

堀周庵

御大工頭

清水治左衛門

西田甚右衛門

主付御大工

中村八十右衛門

同断

井上庄右衛門

清水又十郎

御壁塗

長谷川三九郎
(一久)

同所御横目

高山伊左衛門
(定功)

山崎茂兵衛
(水保)

一二月二二日

加賀藩、金沢城本丸三十間長屋の普請完了に
ともない、普請関係者に金品を与える。

41「政隣記（耳目甄録）」一三三

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録』 廿三・廿四

今度御本丸三拾間御長屋御普請出来ニ付、一昨廿二日

左之通拝領物被 仰付、

物頭並御作事奉行

浅加作左衛門
(中職)

御作事奉行

杉浦逸角
(守正)

江守要人
(隱屋)

金五百正

小判三両宛

白銀一枚宛

金二百足宛

堀越左源次

金百足

於越後屋敷鉛吹分

辻権左衛門

請負人

御壁塗

白銀一枚宛

御城代方与力六人

金三百足宛

堀内吉右衛門

右、御目録浅加作左衛門江者御城代又兵衛殿御

(村井長世)

堀越兵之助

渡、御意之趣御演述、御作事奉行等江者於同所御

同

同百足

堀越吉大夫

目録御用人渡之、御城代方与力・御大工頭江者於御

同二百足

主付御扶持方大工壱人

用所御目録御用人渡之、御大工等江之目録者於同所

同千百足

同棟梁大工十人

御作事奉行江御用人渡之、

同七百足

御扶持方大工等七人

同貳両

御算用方・屋根方

文化四年（一八〇七）

大工肝煎等九人

同千五百足

御普請所入口番

三月一二日

并於越後屋敷等

前田斉広、金沢を發し、同月二五日、江戸に

鉛取扱縮方足輕共

到着する。次いで四月一日、江戸城に登り、

同百足宛

御作事所鉛才許足輕四人

参勤の挨拶をする。

鳥目四貫文

御普請所并御作事所

412 「御家老方諸事覚書」文化四年三月一二日条

内作事方小遣八人

館加越能文庫蔵

金沢市立
玉川図書館

同三貫五百文

右同断割場附小者十人

一、今日御發駕二付、各五時過登城、

(中略)

一、九時前、益御機嫌能御発駕、御先立掃部、年寄中御

式台^{内ノ左方}伺公、御家老中^{内ノ右方}裏御式台之方二伺

公、御意有之、筆頭^ハ御請申上事、

413「江戸幕府日記」文化四年四月朔日条 国立公文書館内閣文庫蔵

一、今四江式寸前、御黒書院江

出御、

但、

大納言様 (徳川家慶) 出御無之、天氣相付御差留、

参勤

御太刀一腰
銀五十枚
巻物二十

(前田齊広)
松平加賀守

右、御札相済而、御白書院江

渡御、

(中略)

松平加賀守家来

纏二十筋
銀馬代

同

(連愛)
長甲斐守

(政義)
本多勘解由

414「御触并御返書留」四九

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

前月廿五日、御機嫌能 御着府、同廿九日、上使青

山下野守殿を以、被為蒙 (忠裕) 上意、当朔日、御登

城、於御黒書院御札被 仰上、殊御懇之上意、長

甲斐守・本多勘解由 (通愛) 御目見被 仰付、重疊難有御

仕合被 思召候段、以 御書被 仰下候事、

尚以、御廻状之節、尤拙者方御省キ申入候、以上、

今日於 御城御用番安房守殿御渡之別紙、為持進申

候、以上、

四月十五日

今枝内記様 (易也)

御名

此日、今枝様御登 城無之、

且又、前々^ハ御当座之忍悦二而

相済由、

415「政隣記(耳目甄録)」二四 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

(三月) 十三日 一昨十一日記之通三付、為御見立六半時過^ハ分

登 城之处、五時御供揃二而金谷 御殿江被為入、

四時過、御帰殿、同半時頃、御供廻被 仰出、九時

前、益御機嫌克 御発駕、其節御式台鏡板江 御城

代前田伊勢守殿・村井又兵衛殿・年寄中・御家老中 (孝友) (長世)

等左右江被罷出、御意有之、御白洲江定番頭・同

御番頭、菱御櫓続御長屋下之方江

相公様・貞琳院様御附使者罷出、御意有之、橋

爪御門外橋爪江奥村助^(榮実)右衛門殿被罷出、三之御丸江

前々罷出候役儀之人持・頭分罷出、夫々御意有之、

其外前々之通ニ付略ス、御供人旧冬十一月十五日以

来追々前記之通り長甲斐守殿・本多勘解由殿^(政業)・御道

中奉行并兼御行列奉行村杳^(神救)右衛門・安達弥兵衛^(政純)、御

筒支配牧昌左衛門^(忠輔)、御弓支配津田権五郎^(居方)「前記正月

十八日被仰渡者、御筒支配牧昌左衛門義者御弓支配与有之候

得共、権五郎義御持弓頭ニ付、前例之趣御達申触、暨本文之

通相勤之、御長柄支配水野庄五郎、御大小将御番頭

岸忠兵衛^(肅道)、同御横目寺西平左衛門^(秀実)・飯田外記、御近

習関屋中務・水越八郎左衛門等^(政良)、夫々御供或御先拔

ニ而発足、委曲前記ニ有之ニ付爰ニ略記ス、前記互

見、

(中略)

九日^(四月) 去四日江戸発之御用状来着、左之趣共申来、

三月廿九日、就今度御参府、上使御老中青山

^(忠裕)下野守殿を以、御懇之被為蒙 上意、同晦日御老

中方御連名之依御奉書、今月朔日、御登城、御

参勤之御礼被仰上、御例之通長甲斐守・本多勘解

由御目見被仰付、

附、前月廿五日、戸田筋御成ニ付、浦和駅ニ御

逗留、廿六日御着府与被仰出候処、右御成

就御延引ニ、俄ニ廿五日御着府与被仰出、依

而同日七半時頃、御着府、追付之御供揃ニ而御

老中方御廻勤、

【解説】『金沢城総合年表』後編では、前田齊広の着府日を三月二

九日としたが、右の通り、三月二五日と訂正する。

五月二七日

金沢に地震あり。

416 「高島厚定職事日記」文化四年五月二七日条

金沢市立
玉川図書
館加越能文庫蔵

廿七日 曇、四半時過地震、九時時分又地震、

夜雨天、

八月三〇日

加賀藩、金沢城石川門櫓下石垣普請の完了に
ともない、この日以降、同所の往来を許可する。

417「政隣記（耳目甄録）」二四 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿三・廿四』
(九月)

十三日（中略）
付札御横目江

石川御門続御櫓下等石垣御普請中、佳節・朔望等出
仕之面々仮囲外ニ而可致下馬・下乗旨申渡置候得共、

右御普請相済仮囲取払候条、最前之通致下馬・下乗
可申事、

一、若火事之節右御門へ罷出候人々、御普請所入口仮囲
外ニ作法能人数相立候様申渡置候得共、是又最前之
通可相心得事、

右之趣、夫々不相洩様可被申談候事、

八月晦日

右、御城代被仰聞候旨等、今月三日例之通御横目廻
状有之、

418「高島厚定職事日記」文化四年九月三日条 金沢市立玉川
図書館加越能
文庫蔵

文化四年

(九月)
三日（中略）

一、石川御門続御石垣御普請出来、都テ最前之通心得候
様、御横目所触来ル也、

九月二一日

金沢城下長連愛（甲斐守）の屋敷に落雷あり。

419「政隣記（耳目甄録）」二四 金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
『政隣記 耳目甄録 廿三・廿四』
(九月)
廿一日 雨天如疇昔、未中刻頃、大雷一声大二響、此雷

長甲斐守殿玄関高箱棟之上江落、余程破損、又学校
御囲之内江落、椎之木破裂、又堀川町御大小将伴造
酒門前江も落、門柱并囲之内松大木下ろ梢迄裂跡有
之、都合三ヶ所へ雷落、

一二月一八日

江戸の前田斉広、真龍院（夙姫。鷹司政熙の娘）
を娶る。

420「御家老方諸事覚書」文化四年一二月二二日条 金沢市
立玉川
図書館加越能文庫蔵

一、左之通月番々演述、

夙君様御婚禮御整之上ハ

御前様与相唱可申事、

421「御家老方諸事覚書」文化四年二月二七日条

金沢市
立玉川
図書館加越能文庫蔵

一、夙君様今月十五日江戸表御着之旨申来、仍之今日各

金谷 御殿江罷出、

(前田治脩)

相公様江恐悦可申上旨、昨夕月番々廻状有之、各罷

出ル、

422「御家老方諸事覚書」文化四年二月二八日条

金沢市
立玉川
図書館加越能文庫蔵

一、左之通月番々廻状有之事、

当十八日御婚禮御首尾能相済申候、尤御一門様方御

招請之儀ハ御省略中ニ付其御儀無御座、備後守様初

(前田和之)

御見舞懸り之趣ニ付被 仰遣候処御出、前田隼人殿

(利和)

初御客有之、御盃事ハ御規式中御隙入被為在候付、

扨々御土器出、小謡も被仰付、天氣様も宜敷、御規

式万端無残所相済候段、同十九日出町飛脚御泊留至

(長連愛)

翌廿日発足早飛脚步を以、甲斐守等々申来候、先以

恐悦御同意ニ御座候、依之明廿九日各金谷 御殿江

罷出、相公様江御祝詞申上、御広式江茂罷出候筈ニ

(前田治脩)

候間御出、御申上可被成候、若御当病等ニ而御出難

被成候ハ、以御紙面御祝詞御申上可被成候、則下

書指進申候、右ニ付、来正月二日頭分以上江御弘之

趣申聞候付、各五時過致登城候旨御登達可被成候、

423「政隣記(耳目甄録)」二二四

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵
政隣記 耳目甄録 廿三・廿四

今月十八日 御婚禮御規式、御首尾能御整、

但、夙君様兼而御日図之通、十五日日本郷御邸江御

(政紹)

着、水越八郎左衛門「御歩頭兼御近習」、為御迎十四

日発、品川迄罷越、

424「三守御譜」三

金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

(文化四年)
十二月十五日 十一月廿七日

御出京

江戸表へ

御着輿此日本郷邸へ来輿

シ玉、十八日、御婚姻御整被遊、

【解説】『金沢城総合年表 後編』では二月二十八日としたが、右

の通りこれを二月一八日と訂正する。

この年

加賀藩、金沢城石川櫓下蓮池堀際、および四

十間櫓・長屋台の石垣修復を行う。

425 「御城高石垣之事等」

金沢市立玉川図書館後藤文庫蔵 『金城郭史料』

石川御櫓下、御乳母之池、高角迄積直、此所野面積二候、御櫓下等左右之角、草の角ニ而専平石之内宜石ニ而荒ク積立有之候所、文化四年御普請被仰付候所、左右共美敷切合角ニ相成候故、平積と角石と縁切見分大キニあしく候、此所角も荒クして、平積と釣合候様ニ仕事候、（下略）

426 「四拾間御長屋台同統御櫓台指図絵図」

金沢市立玉川図書館後藤文庫蔵

四拾間御長屋台同統御櫓台指図絵図

（*図・注釈略）

右之通出来可有之者也、

文化四年五月

〔金沢城史料叢書48〕

金沢城編年史料 近世四

令和 7 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 石川県金沢城調査研究所

〒920-0918

石川県金沢市尾山町10-5

電話 (076) 223-9696 FAX (076) 223-9697

E-mail : kncastle@pref.ishikawa.lg.jp

<https://www.pref.ishikawa.lg.jp/kyoiku/bunkazai/kanazawazyo/index.html>

印刷 株式会社ハク イ印刷